

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告・I

大塚遺跡・女原遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集

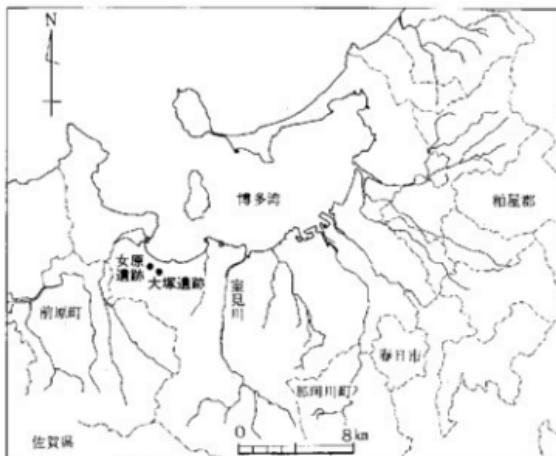
1990

福岡市教育委員会

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告・I

おおつか
みょうばる
大塚遺跡・女原遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集



大塚遺跡 遺跡略号 O T Z 女原遺跡 遺跡略号 M B R
調査番号 8640 調査番号 8660

1990

福岡市教育委員会

序

都市圏の拡大に伴う道路網の整備は各自治体の懸案事項であり、我が福岡市もその例外ではありません。その反面、道路網の整備によって消滅する埋蔵文化財の保護は、現代に生きる我々の大きな課題となっています。

福岡市と西九州とを結ぶ202号線バイパスを建設中の今宿地区は埋蔵文化財の宝庫として知られ、県内有数の前方後円墳の密集地でもあります。これらの埋蔵文化財の保護のため、福岡市ではバイパス建設に伴い建設省と事前協議を重ね、やむをえず現状保存できない所については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めております。調査の結果、『主船司跡か』と新聞紙上を賑わせた徳永遺跡をはじめ数多くの遺構・遺物が確認されておりますが、ここに報告する大塚遺跡・女原遺跡はその初年度に調査を実施した遺跡で、古墳時代から中世にかけての集落や水田を検出し、また大陸との交流をうかがわせる多量の遺物が出土しました。

本書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願うとともに、発掘調査・資料整理に関係された方々のご理解とご協力に対し深く感謝の意を表します。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は昭和61年9月24日～62年3月31日及び同年7月1日～10月31日にかけて福岡市教育委員会が行った、西区今宿所在の大塚遺跡ならびに西区女原所在の女原遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、九州地方建設局福岡国道工事事務所が計画した一般国道202号線今宿バイパス建設工事に伴う事前調査として実施した。
3. 調査において、遺構は発見順に連番号を附し、竪穴住居跡：SC、土坑：SK、溝状遺構：SD、掘立柱建物：SBで表記した。
4. 女原遺跡の調査は昭和61、62年度の2ヵ年に及ぶため、事業としては昭和61年度を女原遺跡3次（遺跡調査番号：8660）、昭和62年度を女原遺跡4次（同：8720）として区分したが、記録・遺物類の登録・注記は全て「女原遺跡3次調査」で統一している。
5. 本書に使用した図の作成は二宮忠司、松村道博、吉武学（福岡市教育委員会）、田中稿二（現大和町教育委員会）、池田光男、大庭友子、山口満（調査補助員）が行った。
6. 本書に使用した図の製図は吉武、宮井善朗（福岡市教育委員会）、池田、入江のり子、濱石正子、撫養久美子（整理補助員）が行った。
7. 本書に使用した写真のうち、遺構は二宮、松村、吉武、大庭が、遺物は吉武が撮影した。
8. 本書で使用する方位は全て磁北である。
9. 本書の執筆・編集は松村道博の助言のもとに吉武学が行った。
10. 本報告書に関する記録・遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、管理される予定である。

大塚遺跡6次調査

遺跡調査番号	8640		遺跡略号	O T Z
調査地地籍	西区今宿字大塚		分布地図番号	112-A-4
開発面積	10,000m ² (大塚～笠掛間)	調査対象面積	1,200m ²	調査面積
調査期間	1986年（昭和61年）9月24日～12月29日			

女原遺跡3次調査

遺跡調査番号	8660		遺跡略号	M B R
調査地地籍	西区女原		分布地図番号	120-A-5
開発面積	17,000m ² (笠掛～女原間)	調査対象面積	7,600m ²	調査面積
調査期間	1986年（昭和61年）11月10日～1987年3月31日、7月1日～10月31日			

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II.遺跡の位置と環境	3
III.大塚遺跡の調査	7
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	7
(1) 溝状造構と出土遺物	7
(2) 掘立柱建物と出土遺物	8
(3) その他の出土遺物	13
IV.女廻遺跡の調査	17
1. 調査の概要	17
2. 遺構と遺物	18
(1) 壁穴住居跡と出土遺物	18
(2) 土坑と出土遺物	30
(3) 溝状造構と出土遺物	46
(4) 掘立柱建物	53
(5) 水田遺構	62
(6) その他の出土遺物	63
V.おわりに	66

挿図目次

Fig. 1 国道202号線今宿バイパス路線内遺跡位置図 (1/30,000)	2
Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/16,000)	5
Fig. 3 大塚遺跡6次調査地点周辺地形図 (1/1,500)	6
Fig. 4 大塚遺跡Ⅱ区東壁土層図 (1/80)	7
Fig. 5 大塚遺跡遺構配置図 (1/200)	(折り込み)

Fig .6	掘立柱建物実測図・I (1/100)	10
Fig .7	掘立柱建物実測図・II (1/100)	11
Fig .8	掘立柱建物実測図・III (1/100)	12
Fig .9	出土遺物実測図・I (1/3)	14
Fig .10	出土遺物実測図・II (1/3)	15
Fig .11	女原遺跡3次調査地点周辺地形図 (1/1,500)	16
Fig .12	女原遺跡B区西壁土層図 (1/80)	17
Fig .13	SC-02実測図・I (1/40) (折り込み)	
Fig .14	SC-02実測図・II (1/40)	19
Fig .15	SC-02出土遺物実測図・I (1/3)	21
Fig .16	SC-02出土遺物実測図・II (1/3)	22
Fig .17	SC-02出土遺物実測図・III (1/3、1/2)	23
Fig .18	SC-35実測図 (1/40)	25
Fig .19	SC-52実測図 (1/40)	27
Fig .20	SC-60実測図 (1/40)	28
Fig .21	SC-35・52・60出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig .22	SK-09・11・36・37実測図 (1/40)	31
Fig .23	SK-11・36・37出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig .24	SK-40実測図 (1/40) (折り込み)	
Fig .25	SK-40出土遺物実測図・I (1/3)	35
Fig .26	SK-40出土遺物実測図・II (1/3)	36
Fig .27	SK-40出土遺物実測図・III (1/3)	37
Fig .28	SK-40出土遺物実測図・IV (1/3)	38
Fig .29	SK-40出土遺物実測図・V (1/3、1/2)	40
Fig .30	SK-41・51実測図 (1/40)	42
Fig .31	SK-51出土遺物実測図 (1/3)	43
Fig .32	SK-53・56実測図 (1/40)	44
Fig .33	SK-63、SX-15実測図 (1/40、1/20)	45
Fig .34	SK-56、SX-15出土遺物実測図 (1/3)	45
Fig .35	SD-30~34実測図 (1/200)	46
Fig .36	SD-30~34出土遺物実測図・I (1/3)	49
Fig .37	SD-30~34出土遺物実測図・II (1/3)	50

Fig .38 SD—30～34出土遺物実測図・III (1 / 3)	51
Fig .39 SD—30～34出土遺物実測図・IV (1 / 3)	52
Fig .40 掘立柱建物実測図・I (1 / 100)	55
Fig .41 掘立柱建物実測図・II (1 / 100)	56
Fig .42 掘立柱建物実測図・III (1 / 100)	57
Fig .43 掘立柱建物実測図・IV (1 / 100)	58
Fig .44 掘立柱建物実測図・V (1 / 100)	59
Fig .45 掘立柱建物実測図・VI (1 / 100)	60
Fig .46 水田遺構・足跡群全体図 (1 / 1,000)	62
Fig .47 水田跡実測図 (1 / 200)	(折り込み)
Fig .48 足跡実測図 (1 / 100)	64
Fig .49 その他の出土遺物実測図 (1 / 2、1 / 3)	65

付図 女原遺跡3次調査区遺構配置図 (1 / 200)

表 目 次

Tab .1 国道202号線今宿バイパス路線内遺跡一覧	2
Tab .2 大塚遺跡・女原遺跡調査一覧	4

図 版 目 次

PL .1 1. 大塚遺跡遠景 (南西から)	2. 大塚遺跡調査区全景 (西から)
PL .2 1. 溝状遺構 (SC—01) (西から)	2. SB—04、05 (西から)
3. SB—05 (西から)	
PL .3 大塚遺跡出土遺物 (1 / 3)	
PL .4 1. 女原遺跡遠景 (南から)	2. 女原遺跡調査区全景 (西から)
PL .5 1. 女原遺跡 A 区全景 (南から)	2. 女原遺跡 B 区全景 (南から)
PL .6 1. 女原遺跡 C 区全景 (北から)	2. 女原遺跡 D・E 区全景 (東から)
PL .7 1. SC—02 (東から)	2. SC—35周辺 (東から)

3. SC—35遺物出土状況
5. SC—52（東から）
PL .8 1. SK—11（南西から）
3. SK—40（西から）
5. SK—53（北から）
PL .9 1. SB—03（東から）
3. SB—17（東から）
5. SB—42（西から）
PL .10 1. SB—58（西から）
3. B区水田遺構検出状況（北から）
PL .11 1. B区水田遺構北端部（東から）
3. D区水田遺構検出状況（北から）
5. C区足跡検出状況（牛蹄）
PL .12 女原遺跡出土遺物・I (1/3)
PL .13 女原遺跡出土遺物・II (1/3)
PL .14 女原遺跡出土遺物・III (1/3)
PL .15 女原遺跡出土遺物・IV (1/3)
PL .16 女原遺跡出土遺物・V (1/3)
PL .17 女原遺跡出土遺物・VI (1/3)
PL .18 女原遺跡出土遺物・VII (1/3)
PL .19 女原遺跡出土遺物・VIII (1/3)
PL .20 女原遺跡出土遺物・IX (1/3)
4. SC—35（東から）
6. SC—60（東から）
2. SK—36（東から）
4. SK—51（南東から）
6. SK—56（東から）
2. SB—16（東から）
4. SB—18、19（南東から）
6. SB—57（東から）
2. SB—65（南から）
2. B区西壁土層（東から）
4. D区南西部足跡群（東から）
6. C区足跡検出状況（人）

I. はじめに

1. 調査に至る経過

一般国道202号線バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査は、建設省九州地方建設局（以下九地建）の委託を受けた福岡県教育委員会（以下県）によって昭和44年度から継続して行われており、その成果は昭和59年度までに計10冊の報告書にまとめられ、うち福岡市内の遺跡を扱ったものは6冊を数える。その後県側から市内遺跡については福岡市の方で対応して欲しいとの要望があり、協議の結果、市教育委員会文化部埋蔵文化財課（以下市）がこれを担当することとなった。市では昭和61年度から路線内の文化財の調査を始め、平成元年度までに11の地点で調査を行っている。

今回報告する2地点のうち、大塚地区は既に県の手で昭和48年度に試掘調査され、『今宿大塚南遺跡』として昭和52年度に報告された地区（大塚遺跡1次調査地点）である。^{文獻5}市では九地建の委託を受け、昭和61年7月22日に大塚地区に再度試掘調査を行ってピットを主とする遺構の存在を確認し、昭和61年9月24日から12月29日まで本調査を行った。女原地区は昭和61年11月5～8日にかけての試掘調査で、水田跡及びその下層に竪穴住居跡とピットを確認したが、遺跡の範囲が広大なため、九地建と協議の結果、建造物先行工事部分（水路部分）を優先して調査することとし、昭和61年11月10日～昭和62年3月31日、同年7月1日～10月31日の2年度にわたって本調査を行った。また、この2地点の中間に位置する笠掛地区（女原笠掛遺跡）では県によって古墳1基が調査されているため試掘調査を行ったが、著しく削平されており遺構は確認されなかった。

2. 調査の組織

昭和61、62年度の調査に関わる体制は以下のとおりである。

調査委託 建設省九州地方建設局 福岡国道工事事務所

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第一係長 折田 學

調査庶務 埋蔵文化財第一係 岸田 隆

調査担当 試掘調査担当 小林義彦、下村智、大庭康時

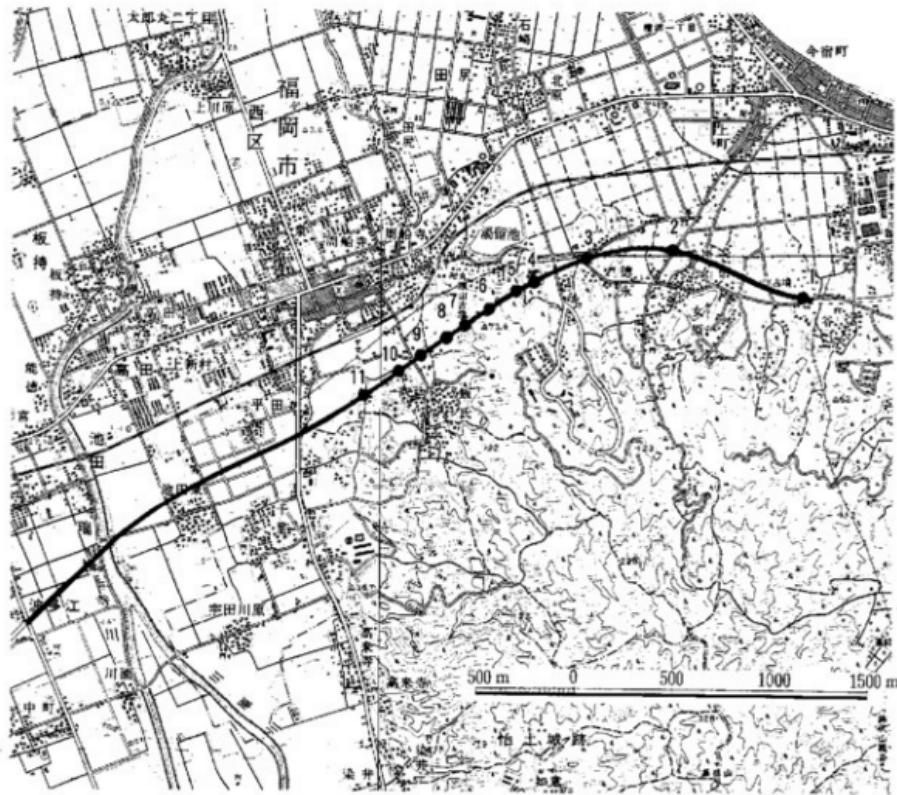


Fig. 1 国道 202 号線今宿バイパス路線内遺跡位置図 (1 / 30,000)

地点	遺跡名	地区 次数	道路 略号	調査 番号	調査地所在地	調査面積 m ²	調査期間	調査担当者	概要
1	大郡遺跡 6 次	OTS	8640	西区今宿字大郡	1,200	860924～861226	二宮忠司、古武学		中世集落跡
2	女原遺跡 3 次	MBR	8660 8723	西区女原字中牟田、社	3,000 5,000	861110～870331 870701～871031	二宮、松村謙博、 吉武		古墳時代集落、他
3	徳永遺跡群Ⅰ区	TKU	8608	西区徳永	1,282	880410～880610	松村、宮井昌朗		中・近世集落
4	徳永遺跡群Ⅱ区	TKU	"	"	1,712	880601～881006	松村、宮井		古代包含層
5	徳永遺跡群Ⅲ区	TKU	8846	"	1,760	890117～890331	松村、宮井		古墳時代集落
6	徳永遺跡群Ⅳ区	TKU	"	"	1,314	890301～890331	松村、宮井		古墳時代包含層
7	荒町遺跡群Ⅰ区	HMC	8920	西区新氏字蓮町	1,083	890420～890720	松村、宮井		弥生終末～中世包含層
8	荒町遺跡群Ⅱ区	HMC	"	"	1,214	"	松村、宮井		古墳時代・中世集落
9	新氏遺跡群Ⅰ区	IJ	8921	西区新氏字井尻、他	6,300	890515～900110	松村、宮井、長家 伸		古墳時代集落
10	板氏遺跡群Ⅱ区	IJ	"	西区板氏字ムタサカ	500	900118～900331	松村、宮井、長家 伸		弥生時代遺跡群
11	板氏遺跡群Ⅲ区	IJ	"	西区板氏字緑原	6,588+α	890815～900331	松村、宮井、長家 伸		弥生後半・古墳集落

Tab. 1 国道 202 号線今宿バイパス路線内遺跡一覧

昭和61年度調査 文化財主事 二宮忠司

埋蔵文化財第一係 吉武 学

昭和62年度調査 埋蔵文化財第一係 松村道博、吉武 学

調査補助 池田光男、大庭友子、田中稿二（現大和町教育委員会）、山口 清

整理補助 池田光男、入江のり子、濱石正子、撫養久美子

調査作業 太田孝房、鬼丸邦宏、永嵐良馬、平田信吉、三苦宗登、有吉貞江、池 弘子、上原 チヨ子、柴田シズノ、柴田タエ子、清水文代、末松信子、杉村文子、津田和子、富永純子、鳥巣良子、中牟田サカエ、中村千里、西嶋タミエ、西嶋初子、西納テル子、西納トシエ、能美八重子、野坂三重子、野坂康子、原 早苗、平田政子、藤野ふじ子、古井モモエ、松本愛子、松本マサ子、松本フジ子、三苦ヨシコ、森友ナカ、山下サノエ、吉岡アヤ子、吉岡員代、吉岡竹子、吉岡蓮枝、吉積ミエ子、脇坂ミサヲ

整理作業 飯田千恵子、上田保子、太田順子、太田頼子、緒方まさよ、清水優子、成清直子、浜野年代

II. 遺跡の位置と環境

大塚・女原両遺跡は糸島平野東端部に小さく開けた今宿平野に位置する。この平野は、南部は高祖山から北へ伸びる丘陵と谷、北部は博多湾岸に発達した砂丘とによって構成されており、この間を後背湿地の沖積地化や近世以降の干拓によって陸化した平地部がつないでいる。大塚遺跡6次調査地点は丘陵先端部の西側斜面、女原遺跡3次調査地点は丘陵間に形成された扇状地の裾部にそれぞれ位置する。調査地点の地籍は大塚遺跡が福岡市西区今宿字大塚、女原遺跡が同女原字中牟田～川原田である。前後したが、大塚遺跡は過去5回、女原遺跡は同じく2回の調査を経ており、これについては一覧表を附した。ここでは両遺跡以外の周辺遺跡の調査例について概要を述べる。

今山遺跡 大正12年に中山平次郎氏が踏査して以来、昭和43年～59年に計6次の調査がなされ、^{文献7,8,11,13,18}

今山の西～南斜面で弥生時代前期に始まる石斧製作跡を検出している。

今宿遺跡1次 水道管埋設のため昭和44年市調査。弥生時代前期後半の壺棺を検出した。^{文献12}

今宿遺跡2次 自転車道建設のため昭和51年市調査。弥生時代前～中期の墓地を検出し、土壙墓から細型銅劍、勾玉などが出土した。^{文献18}

今宿五郎江1次 今宿小学校改築のため昭和59年市調査。弥生時代後期前半～中頃の環濠の他、^{文献20} 11世紀中頃～13世紀中頃の柱穴・井戸・墓などを検出した。

今宿五郎江2次 市道建設のため昭和60年市調査。弥生時代中期～後期前半の掘立柱建物

群・大溝を検出し、大溝から小銅鐸や大量の木製品などが出土した。

今宿五郎江 3次 精油所建設のため昭和62年市調査。弥生時代後期の溝、同後期～古墳時代の土坑、同後期～古代の掘立柱建物、古墳時代前期の堅穴住居跡を検出した。このうち東西に走る幅約4mの弥生時代後期の溝は1次調査の環濠と同時期だが関係は明確でない。^{文献23}

青木遺跡 消防署建設のため昭和60年市調査。弥生時代中期初頭の土坑、同中期中頃の住居跡、^{文献24}同後期後半の甕棺・溝状遺構、中世の掘立柱建物・土壙墓等を検出した。^{文献25}

今宿古墳群 高祖山北麓に沿って12基の前方後円墳が分布し、若八幡古墳、鎌崎古墳、丸殿山古墳、今宿大塚古墳、山の鼻古墳などが調査されている。また13～15群に分かれて分布する300基以上の群集墳では今宿イヤゾノ古墳群、相原古墳群、徳永アラタ西古墳群、徳永アラタ古墳群などが調査されている。^{文献16 文献19 文献5 文献17}

元寇防壁・今津地区 保存整備のため昭和43年市調査。各区で防壁の築造法・石材が異なることなどが判明した。^{文献14}

	次数 調査番号	地区	調査原因	調査面積 m ²	調査期間	調査者	概要
大塚遺跡	1 7317	大塚町	国道建設	130	740118～740204	福岡県教育委員会	中世のピット列
	2 7318	高田	国道建設	96	740128～740216	福岡県教育委員会	弥生後期の溝状遺構、ピット
	3 8101	前田	鉄塔建設	400	820201～820228	折尾 孝	弥生中期末～後期のピット
	4 8236	高田2次	国道建設	2,000	820426～820617	福岡県教育委員会	弥生後期～古墳前期集落、他
	5 8201	園場整備		7,500	830117～830428	柳沢一男、杉山富雄	古墳時代集落(6～7C)、他
女原	1 8517	園場整備		3,000	850527～850812	横山邦顯、下村智	古墳時代集落(6C)、他
遺跡	2 8626	園場整備		2,270	860714～860904	力武卓治	古墳時代集落

Tab. 2 大塚遺跡・女原遺跡調査一覧

- 福岡県教育委員会刊「今宿バイパス開通準備文化財調査報告書」市内道路網一覧
文献1. 第1集「福岡市大字佐六町所在の遺跡群」(福岡古墳群、宮の前遺跡など地名、高崎古墳群、大久遺跡) 1978
文献2. 第2集「福岡市大字植木・飯原町所在の遺跡」(若八幡古墳群、福岡馬鹿塚遺跡、飯原難原遺跡) 1971
文献3. 第3集「福岡市西近大字宇佐・鳥井町所在の遺跡」(高崎古墳群、大久遺跡) 1973
文献4. 第4集「福岡市西近大字宇佐・鳥井町所在の遺跡」(高崎古墳群) 1976
文献5. 第5集「福岡市西近・糸島郡新町所在遺跡の調査」(福岡古墳群、今宿大塚の遺跡、今宿高田遺跡、今宿小塚遺跡) 1977
文献6. 第10集「今宿高田遺跡」(今宿高田遺跡) 1984

今宿牛野内遺跡調査報告書 実

文献7. 小山洋平著『今宿の石器製作場』福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第6集 1969

文献8. 長田昌也著『今山遺跡第5・6号古墳剥離面を終えた』 1980

文献9. 下条京子著『福岡水道』福岡市歴史博物館企画 1985

文献10. 福岡県教育委員会「今宿古墳群」福岡県文化財調査報告書第26集 1968

文献11. 下條京子「今山遺跡」福岡市歴史資料配布調査研究報告 1 1973

文献12. 福岡市歴史資料刊行部「緊急発掘された遺跡と遺物」 1977

文献13. 福岡市教育委員会「今山遺跡」福岡市歴史文化財調査報告書第22集 1968

文献14. 福岡市教育委員会「今宿元町遺跡発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第4集 1969

文献15. 福岡市教育委員会「今宿山古墳」福岡市歴史文化財調査報告書第10集 1970

文献16. 福岡市教育委員会「福原古墳群」福岡市歴史文化財調査報告書第28集 1974

文献17. 福岡市教育委員会「福原アラタ古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集 1979

文献18. 福岡市教育委員会「今山・今宿遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981

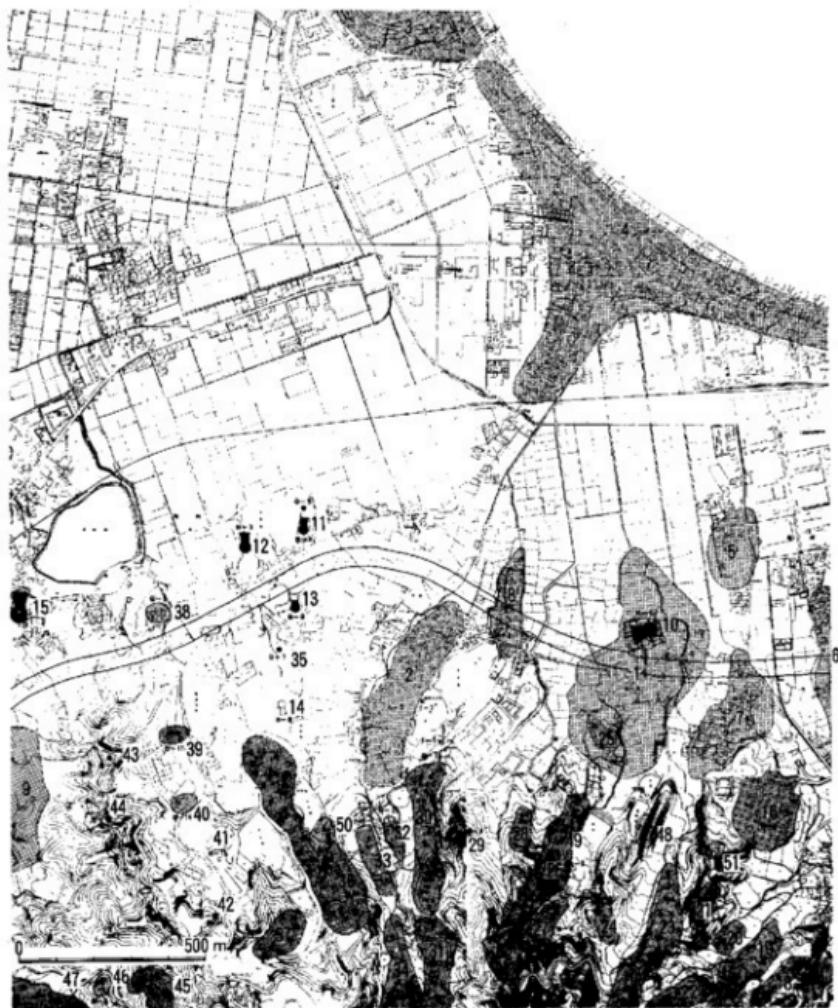
文献19. 福岡市教育委員会「動谷古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 1984

文献20. 福岡市教育委員会「今宿古跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集 1986

文献21. 福岡市教育委員会「今宿山古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 1986

文献22. 福岡市教育委員会「青木遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第166集 1987

文献23. 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財年報Vol.2 1987年度」 1989



1. 大理遺跡
2. 女原遺跡
3. 今山遺跡
4. 今宿遺跡群
5. 今宿五郎江遺跡
6. 青木遺跡群
7. 谷遺跡
8. 女原笠掛遺跡
9. 飯氏引地遺跡
10. 大塚古墳
11. 山ノ界1号墳
12. 山ノ界2号墳
13. 若八幡宮古墳
14. 下谷古墳
15. 丸隈山古墳(史跡)
16. 谷上古墳群C群
17. 相原古墳群
18. 相原古墳群E群
19. 相原古墳群C群
20. 相原古墳群D群
21. 新開古墳群A群
22. 相原古墳群B群
23. 谷上古墳群A群
24. 新開古墳群E群
25. 新開古墳群F群
26. 新開古墳群C群
27. 新開古墳群D群
28. 新開古墳群B群
29. 新開古墳群A群
30. 女原古墳群C群
31. 女原古墳群E群
32. 女原古墳群B群
33. 女原古墳群A群
34. 女原古墳群
35. 下引地古墳
36. 德永古墳群H群(徳永アラタ古墳群)
37. 徳永古墳群G群
38. 徳永古墳群A群
39. 徳永古墳群C群
40. 徳永古墳群D群
41. 徳永古墳群E群(徳永アラタ西古墳群)
42. 徳永古墳群F群
43. 徳永古墳群B群
44. 細氏古墳群L群
45. 旗氏古墳群E群
46. 旗氏古墳群D群
47. 飯氏古墳群C群
48. 新開製鉄遺跡
49. 新開窯址50. 女原上ノ谷製鐵址
51. 青木城址

Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1 / 16,000)

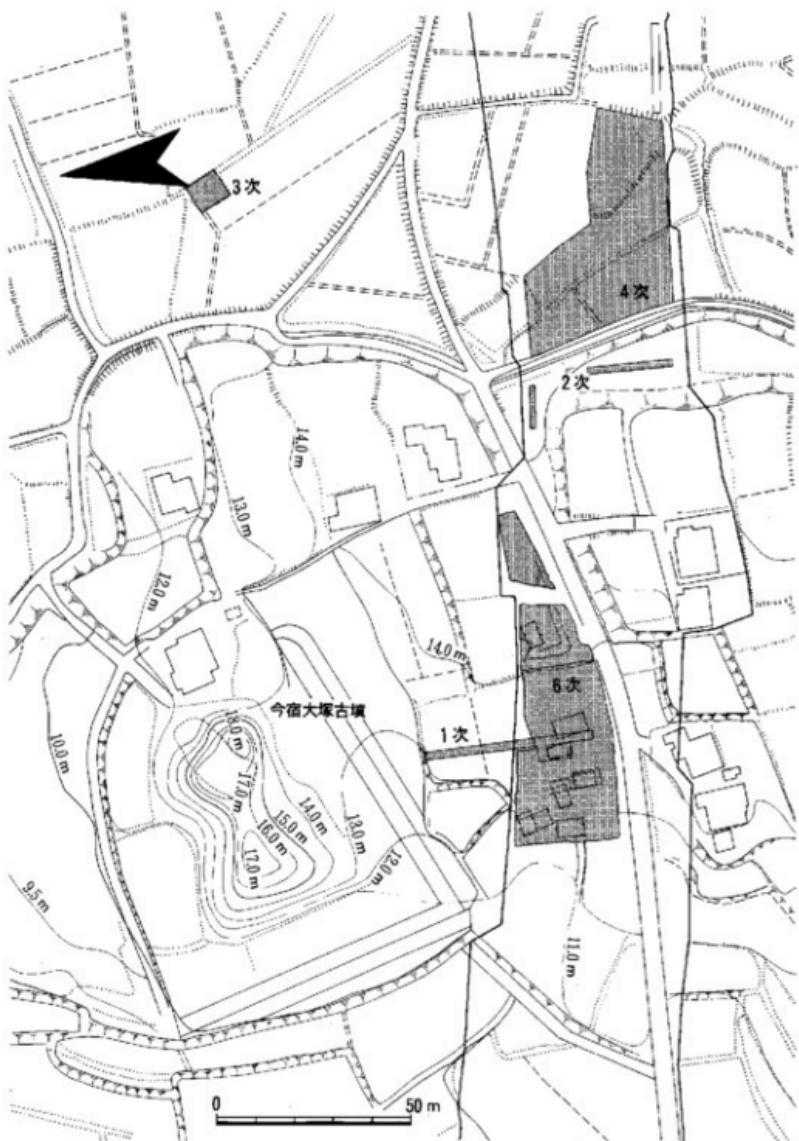


Fig. 3 大塚遺跡 6次調査地点周辺地形図 (1 / 1,500)

III. 大塚遺跡の調査

1. 調査の概要

大塚遺跡6次調査地点は、高祖山から北に向かって伸びる丘陵先端部分の西側斜面に位置する。このすぐ北側の丘陵先端部分には史跡・大塚前方後円墳が位置し、同じく東側の丘陵尾根部の大塚遺跡高田地区（大塚遺跡4次調査地点）では弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落や奈良時代の井戸が確認されている。調査前の現状は水田を埋めた畠地であった。

調査区は西に下りながら広がる三角形状をなし、地下げによって段状に造成され3区画に分かれため東からI～III区と呼称した。また、遺構が調査区西側へ展開していたため、少し拡張した。検出した遺構は溝状遺構1条と掘立柱建物12棟で、時期的には大半が中世（16世紀前後）のものと考えられる。溝状遺構は台地の尾根上を区画するためのものと考えられるが、溝区画の中に位置する掘立柱建物は1棟である。またこれらの遺構の他、調査区全域に水田区画を示す深い溝が見られ、ここからは近世（18世紀以降）の遺物が出土した。

2. 遺構と遺物

(1)溝状遺構と出土遺物

SD-01 Fig.4・5 PL.2

I区からII区にかけて検出した。I区の西端部から直線的に西へ走り、II区で北に折れている。東端部と北端部が調査区内で終わっているが、これは削平された結果であり、本来は地形にあわせて東と北へそれぞれ延びていたものであろう。またコーナー部分は深く掘りこまれている。覆土は暗褐色土の単層で、区画を主目的とする溝であったと思われる。

SD-01出土遺物 Fig.9 PL.3

4は土師質土器の皿で復元口径10.0cm、底径7.2cm、器高2.0cmを測る。胎土は精良だが大粒の砂が混じる。暗茶色を呈し、焼成良好。ロクロ成形で、器面が削落して調整がはっきりしないが、底部は糸切りと思われる。

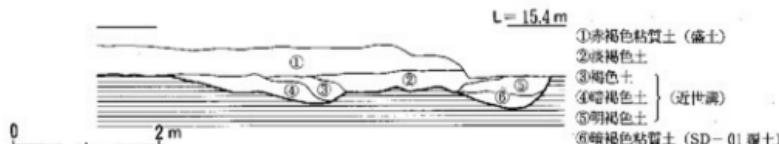


Fig.4 大塚遺跡II区東壁土層図 (1/80)

(2)掘立柱建物と出土遺物

掘立柱建物は12棟検出した。調査区内は西端部を除いてピットが密ではなく、掘立柱建物の把握は比較的容易であった。掘立柱建物の柱穴覆土はおおかた溝状遺構の覆土に類似していた。

SB-02 Fig.6 PL.2

II区北側に検出した。唯一溝状遺構 SD-01の区画内に位置する建物である。桁行3間、梁行1間の東西に長い建物で、桁行全長590cm、梁行381cmを測る。桁行方位はN-78°-Eにとる。柱穴は全て円形プランを呈し、径22~35cm、深さ18~30cmを測る。柱痕跡をもつものが2つあり、そのプランは円形で、径12~13cmを測る。柱穴からの出土遺物はない。

SB-03 Fig.6

SB-02と一部重複し、北側に展開する建物である。溝状遺構 SD-01と重なるが、攪乱構に切られてその前後関係は分からぬ。北側は調査区の外に延びている。2間以上×1間以上で、主軸方位はN-36°-Eにとる。柱穴は平面円形で、径は16~27cm、深さ6~14cmである。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-04 Fig.6 PL.2

III区中央やや東寄りに検出した桁行3間、梁行2間の南北に長い建物で、桁行全長817cm、梁行全長477cmを測る。桁行方位はN-6°-W。柱穴は平面円形で、径22~37cm、深さ9~40cmを測る。3個の柱穴に柱痕跡を認め、平面円形で、径は15~20cm。出土遺物はない。

SB-05 Fig.6 PL.2

SB-04の北西に1.5mの間を置いて、これとほぼ並行に建つ。後述するSB-12と重複するが直接の切り合い関係はない。この建物はSB-12ともども1次調査でその一部が検出され、ピット列として報告されている。今回の調査で周辺を精査し、掘立柱建物として把握した。桁行3間、梁行2間の南北に長い建物で、桁行全長606cm、梁行全長340cmを測る。桁行方位はN-4°30'-Wにとる。柱穴は平面円形で、径22~46cm、深さは13~51cmを測る。前調査時に径約20cmの柱痕跡が検出されたと報告がある。柱穴は南西隅のひとつを除いて完掘されており、出土遺物はない。

SB-06 Fig.7

III区中央やや南西よりに検出した桁行3間、梁行1間の南北に長い建物である。SB-07と重複するが、直接の切り合いはない。桁行全長650cm、梁行400cmを測る。桁行方位は磁北にとる。柱穴は全て円形プランを呈し、径30~39cm、深さ23~38cmを測る。全ての柱穴に柱痕跡が認められ、そのプランは円形で、径18~24cmを測る。北東隅の柱穴から古墳時代の土師器片が出土したが、建物の年代を示すものではないと思われる。

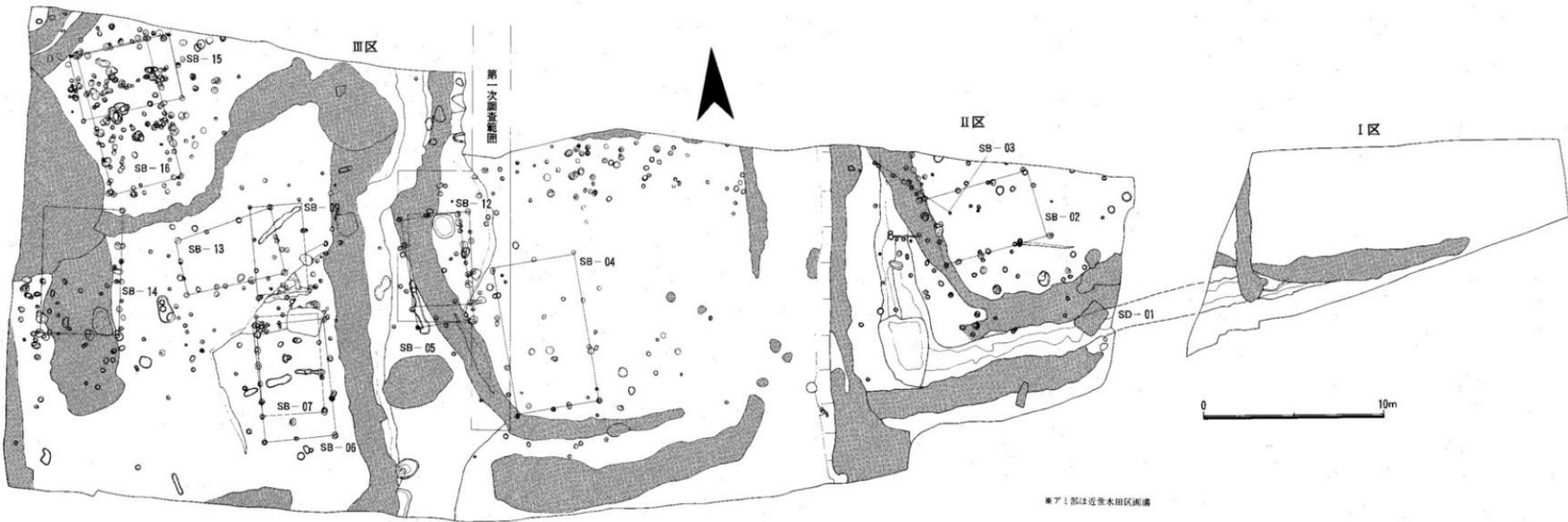


Fig. 5 大塚遺跡遺構配置図 (1 / 200)

SB-06出土遺物 Fig.9 PL.3

Fig.9-3は土師器壺形土器の口縁部片と思われる。口縁の屈曲はゆるく、内湾ぎみに開く。小片のため口径不明。胎土に砂粒、雲母粒を含み、橙色を呈する。焼成は良好で、外面に黒斑が見られる。器面が剥げ落ちているが、内面はナデ調整か。

SB-07 Fig.7

SB-06と重複する桁行3間、梁行2間の南北に長い建物である。北東隅の柱穴は擾乱坑に切られている。桁行全長555cm、梁行全長348cm。桁行方位はN-1°-E。柱穴は平面円形で径は23~45cm、深さ22~35cm。柱痕跡は4個の柱穴に認められ、平面円形で、径13~24cm。柱穴から奈良時代の須恵器片が出土したが、建物の年代を示すものではないと考えられる。

SB-07出土遺物 Fig.9 PL.3

Fig.9-7は須恵器壺の底部片で高台が貼り付く。小片のため不確実だが、高台部の復元径8cmである。胎土は精良で、灰青色を呈し、焼成は良好である。

SB-09 Fig.7

SB-07の南に1.2m離れて位置する。桁行3間、梁行1間の南北に長い建物で、桁行全長520cm、梁行294cm。桁行方位はN-2°30'-W。柱穴はひとつが十坑に切られているが、平面円形で、径19~37cm、深さ10~32cm。柱痕跡はない。少量の土器細片が出土した。

SB-12 Fig.7

SB-05と重複しているが直接の切り合いはない。1次調査の際に全掘されている。西側が削平されていることを考慮し、掘立柱建物とした。桁行3間、梁行1間の南北に長い建物で、桁行全長527cm、梁行356cmを測る。桁行方位はN-5°-E。柱穴は平面円形で、径30~40cm、深さは23~50cmである。柱痕跡はひとつの柱穴に認められ、平面円形で、径17cmを測る。

SB-13 Fig.8

SB-09と一部が重複する3間×3間の東西に長い建物である。SB-09と直接の切り合いはない。東西の全長569cm、南北の全長348cmを測る。主軸方位はN-10°-Wにとる。柱穴は平面円形で径は25~38cm、深さ6~36cmである。柱痕跡はひとつの柱穴に認められ平面円形で、径は19cmである。柱穴からの出土遺物はない。

SB-14 Fig.8

調査後に図面上で操作し復元した。調査区の西端中央部に位置する。桁行4間、梁行3間の南北に長い建物で、桁行全長715cm、梁行全長444cmを測る。桁行方位はN-6°30'-Eにとる。柱穴は平面円形で、径15~68cm、深さ11~24cmを測る。ひとつに柱痕跡があり、平面円形で、径21cmである。出土遺物はない。

SB-15 Fig.8

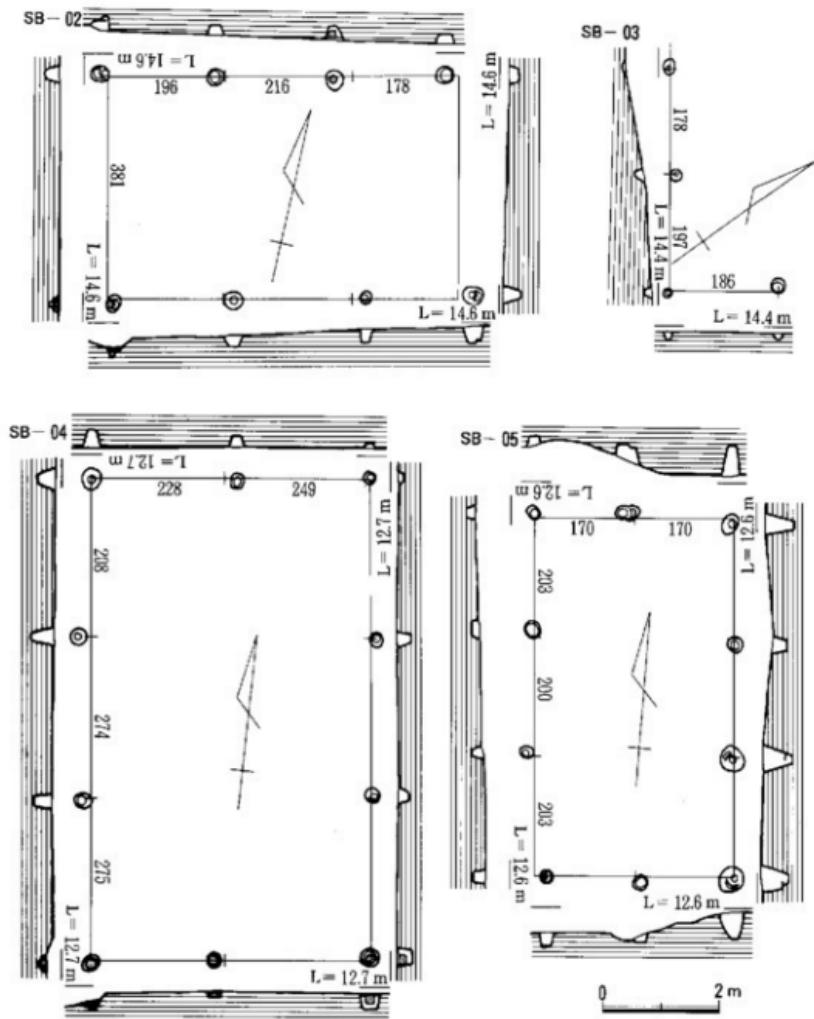


Fig. 6 摺立柱建物実測図・1 (1 / 100)

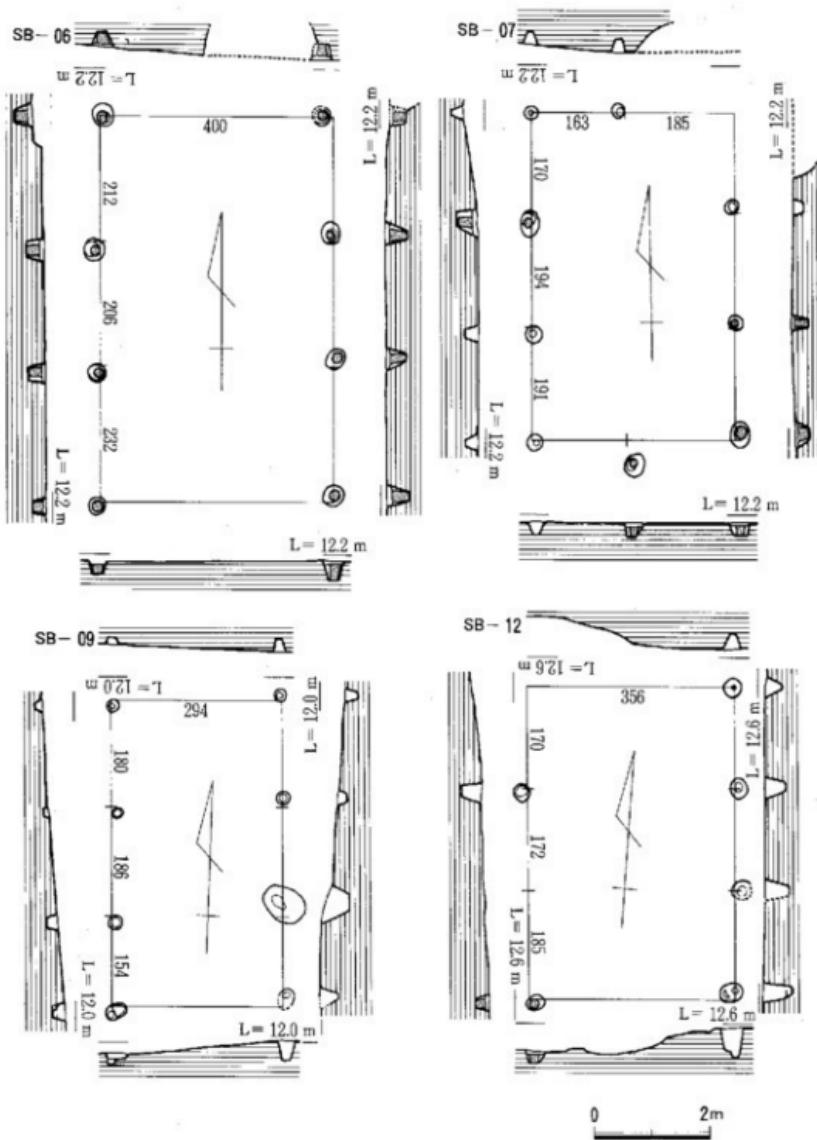


Fig. 7 据立柱建物実測図・II (1 / 100)

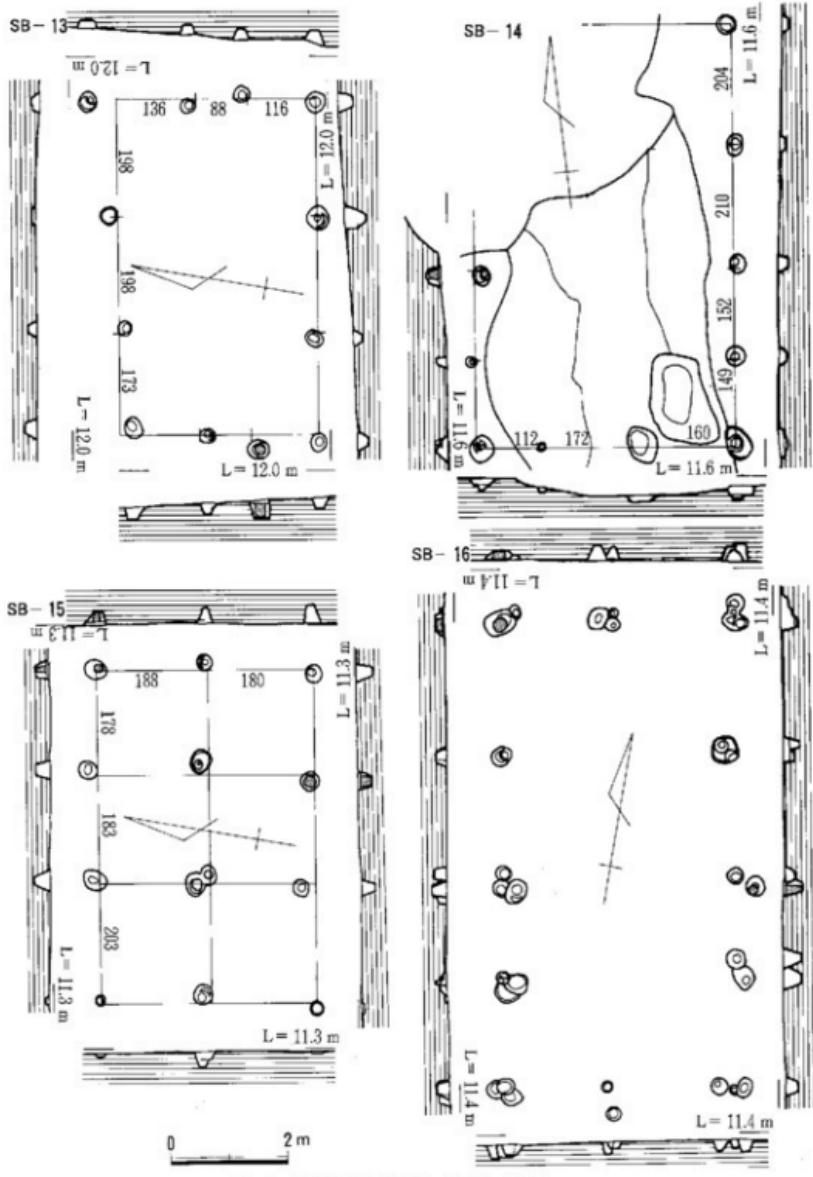


Fig. 8 据立柱建物実測図・III (1 / 100)

図面上の操作による建物で、調査区北西隅に位置する。桁行3間、梁行2間の総柱建物と考えたが、柱穴が密な場所にあるため確実ではない。東西に長く、桁行全長564cm、梁行全長368cm。桁行方位はN-80°-E。柱穴は平面円形で径16~43cm、深さは4~31cm。柱痕跡は3個の柱穴に認められ、平面円形で、径15~22cm。柱穴から中世土師質土器が出土した。

SB-15出土土器 Fig.9 PL.3

Fig.9-1は土師質土器皿の底部片である。復元底径6.6cmを測る。胎土は精良で、雲母粒を含む。色調は外面淡乳灰色、内面淡灯色を呈し、焼成良好。ロクロ成形で、磨滅してはっきりしない底面に回転糸切痕が認められる。

SB-16 Fig.8

SB-15と重複するが、直接の切り合いはない。柱穴の切り合いから3回の建て替えを想定できるが、場所によって切り合いのないもの、調査のミスで不明なものがあり、対応関係がはっきりしない。桁行4間、梁行2間で、南北に長く、桁行全長約800cm、梁行全長約400cmを測る。桁行方位はN-10°-Wあたりにとる。柱穴は平面円形で、径16~55cm、深さは11~32cm。柱痕跡は2個の柱穴に認められ、平面円形で、径16~26cmを測る。柱穴より中世の土師質土器の細片が出土したが、図示できるものはない。

(3)その他の出土遺物

Fig.9-2、5、6、8~10及びFig.10-11~14は掘立柱建物としてまとまらないピットや近世以降の水田区画溝などから出土した遺物である。

2は土師質土器皿底部片である。復元底径7.8cmを測る。胎土は精良で少量の雲母粒を含む。外面は風化して乳白色、内面は淡橙色を呈し、焼成は良好。器面が磨滅しているが、内底面に化粧土が残り、外底面には回転糸切痕が認められる。5は土師質土器の坏であろうか。復元底径7.2cmを測る。胎土は精良で雲母粒を含む。外面淡乳灰色、内面淡橙色を呈し、焼成は良好。ロクロ成形で、底部は回転糸切痕と板目圧痕が残る。6は十師質の火鉢である。平面形が方形になるもので、外面に梅花文の印を押している。胎土は精良、焼成は良好で、いぶして黒褐色に仕上げる。内外ナデ調整。8は土師質土器の鍋で、口縁部がゆるく外方に屈曲し、内湾して開く。復元口径33cmを測る。胎土に砂粒、雲母粒を含み、内外赤褐色を呈し、焼成良好。外面ナデ調整、内面横位の刷毛目調整。口縁部外面に煤が付着している。

9~14は大塚古墳に樹立されていたであろう埴輪片である。他にも数点あるが、突帯を含む部分の破片のみを図化した。突帯は11が他のものに比してやや扁平である。14が基底部、他は胴部の破片と思われる。直径は、突帯直上で11が23.1cm、12が25.4cm、13が28cm、14が底径32.3cmを測る。全て器面が磨滅あるいは剥げ落ちている。

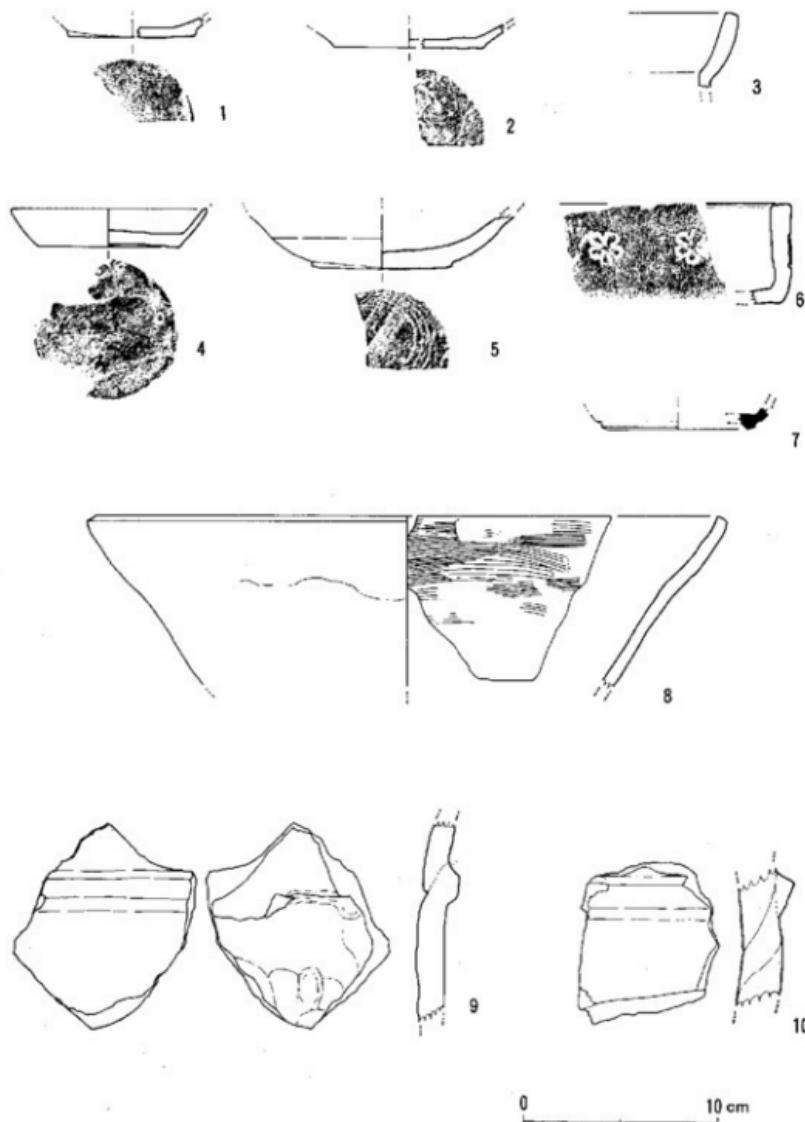


Fig. 9 出土遺物実測図・I (1 / 3)

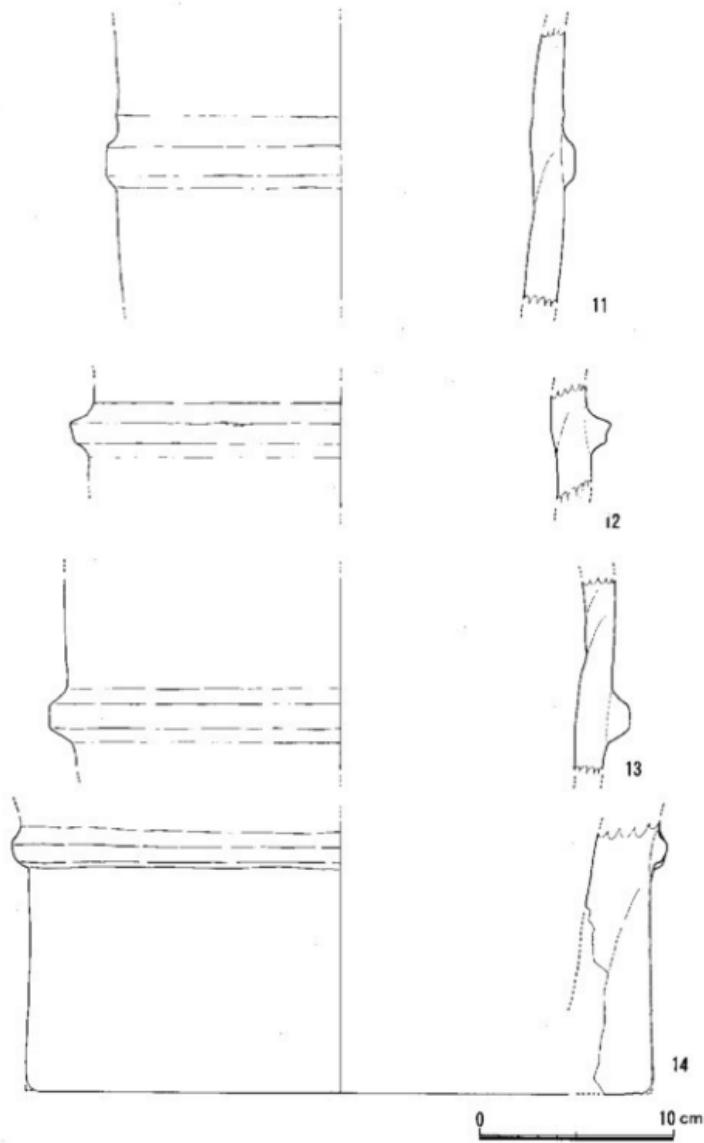


Fig.10 出土遺物実測図・II (1/3)

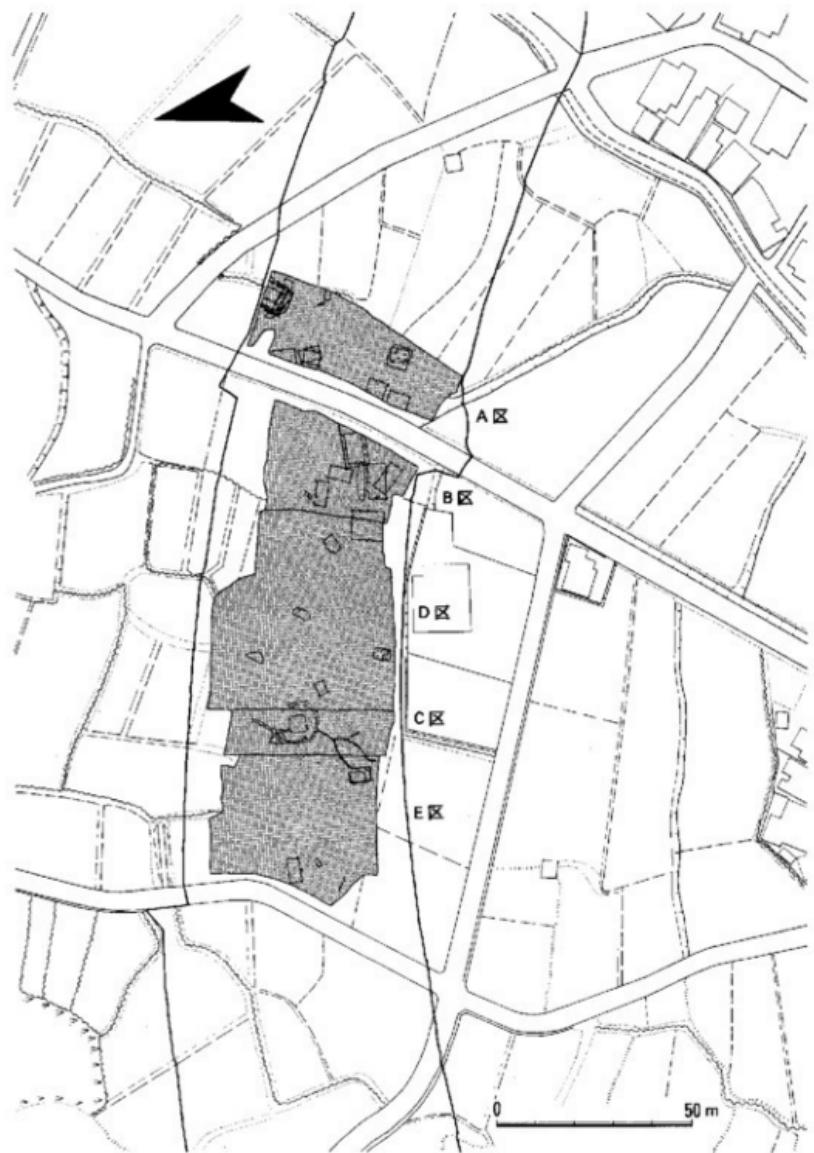


Fig.11 女原遺跡 3次調査地点周辺地形図 (1 / 1,500)

IV. 女原遺跡の調査

1. 調査の概要

女原遺跡3次調査地点は高祖山から北へ延びる丘陵の間に形成された谷の裾部に位置する。大塚遺跡6次調査地点から西へ約800m離れており、西側約200mには岩八幡古墳、山の鼻1・2号墳が位置する。また、南側の谷部において1・2次調査が実施されており、古墳時代後期の竪穴住居跡を中心とする集落が検出されている。調査区内は南から北へゆるやかに下っている。調査前は水田であった。

調査はバイパス建設工事の工程の都合上、水路等の先行工事部分にまず着手したため、調査区が5区画に分断されることとなり、調査順にA～E区と呼称した。

遺跡の基本的な層序は、上からI層現水田、II層現水田床土、III層砂、IV層黒色土、V層黄褐色粘質土、VI層灰褐色粘質土、VII層シルト、VIII層疊層である。検出した遺構は、III層にすっぽり覆われた水田跡13筆以上、V層上面で検出した竪穴住居跡4棟・土坑11基・溝状遺構6条・掘立柱建物16棟・ピット群などである。また、IV層黒色土は縄文時代から13世紀初頭までの遺物を包含している。このうち竪穴住居跡・土坑・溝状遺構は山土遺物から古墳時代中・後期に位置づけることができる。掘立柱建物はIV層から掘りこまれており、古墳時代～13世紀の範囲におさまることは間違いないが、出土遺物のないものもあって時期の判定が難しい。また、水田跡はIV層黒色土の形成以後（13世紀以降）のものであるが、III層からの出土遺物がなく、埋没時期をつかめない。

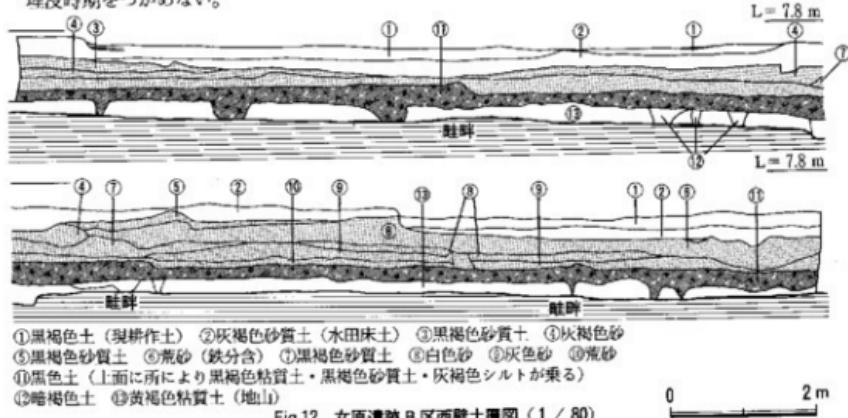


Fig.12 女原遺跡 B 区西壁土層図 (1 / 80)

2. 遺構と遺物

(1) 壕穴住居跡と出土遺物

壌穴住居跡は4棟検出した。いずれも古墳時代のものである。

SC-02 Fig.13, 14 PL.7

A区で検出した方形プランの住居跡である。大小2棟が切り合っているが、完掘後に切り合いをつかんだため、遺物等は一緒に取り上げている。セクションベルトの土層の観察から、小が大に先行するものと見られる。小(Fig.14)は東西3.85m、南北4.9m、深さ0.1mのややいびつな長方形プランを呈する。床面には大小12個のビットがあるが、主柱穴と見られるのは2個で、心々距離で2.24m離れて位置する。覆土は黒褐色上で、貼床は見られない。大(Fig.13)は東西5.9m、南北5.5mの方形プランを呈する。壁は0.2m内外を残している。床面には小の主柱穴を含め18個のビットがあるが、配置から見て主柱穴となるのは4個であろう。床面中央に炭化物を含む深黒色土の詰まった浅い窪みがある。南西のコーナー部分のみに焼溝がめぐる。住居跡南壁中央に浅い土坑を掘っている。また、屋外には住居跡のプランに沿って小ビットが這っている。住居跡の覆土は黒色粘質土で包含層に類似し、小の覆土とは異なる。小を黒褐色上で埋めて床を貼った結果であろうか。

大小の住居跡からは土師器を中心とする多量の遺物が出土した。

SC-02出土遺物 Fig.15~17 PL.12, 13

土師器には甕、壺、高杯、小形丸底壺、鉢などの器種がある。また、土師器の他に朝鮮系の軟質・陶質土器が出土した。土器以外には砥石片、勾玉が出土した。

1~6は土師器壘形土器である。球形の胴部に屈曲して開く口縁部が付く。1は口縁がまっすぐ開き、復元口径10cm。胎土に砂粒を含み、内面淡い黄褐色、外面橙色を呈し、焼成良好。調整は胴部内面がヘラ削り、外面が縦位の刷毛目、口縁外面が横ナデである。2は口縁が外反して開く。復元口径15cm。胎土は精良で、橙~淡褐色を呈し、焼成良好。調整は1と同じである。3は口縁端部が外反する。口径17.5~17.8cm。胎土に砂粒と雲母粒を含み、橙~淡橙色を呈し、焼成良好。調整は胴部内面ヘラ削り、外面縦位の刷毛目、口縁外面は縦位の刷毛目の後横ナデである。4は口縁が外反して開き、端部を内側に突出させる。復元口径17cm。胎土に砂粒を多量に含み、乳灰色を呈し、焼成良好。口縁の一部に黒斑が見られる。調整は胴部内面ヘラ削り、口縁外面に縦位の刷毛目が残るが、他は器面が剥落して不明である。5は口縁が外反に開き、端部は丸くおさめる。胴部はやや肩が張る。復元口径13.6cm。胎土に砂粒、雲母粒を含

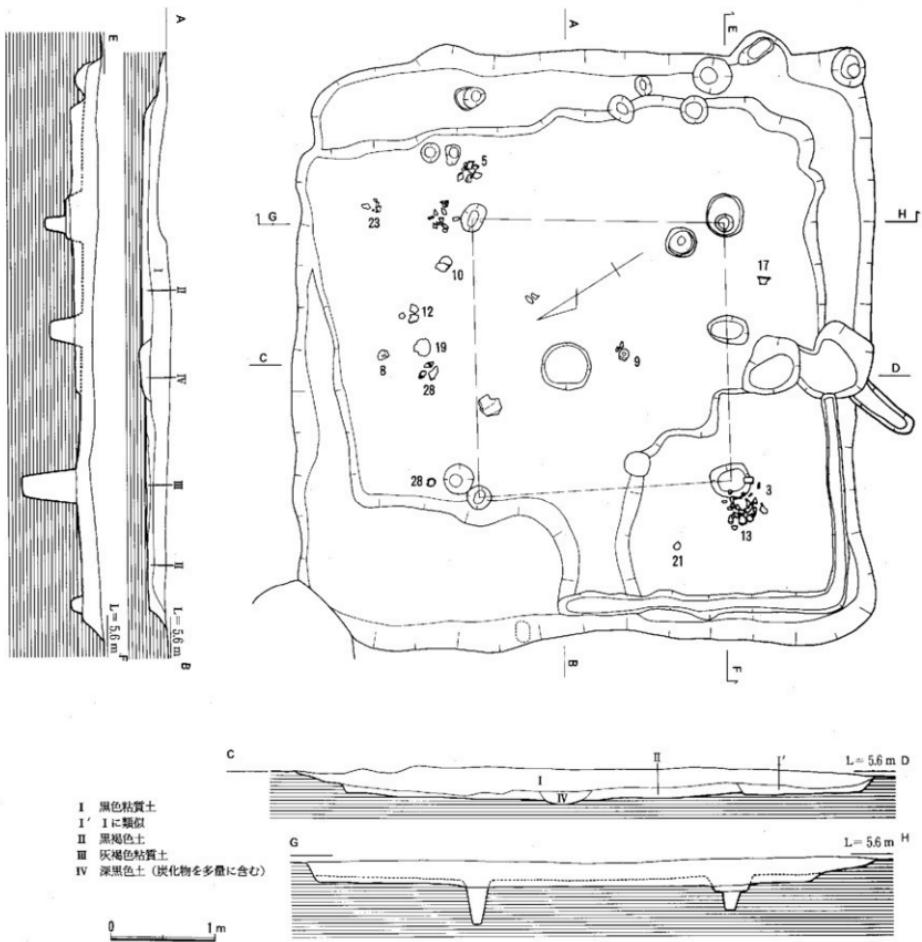


Fig.13 SC-02 実測図・I (1 / 40)

* 図中の番号は遺物番号と同じ

み、褐～淡褐色を呈し、焼成良好、胴部内面ヘラ削り、外面縦横に刷毛目、口縁内外横ナデ調整である。6は口縁端部が外方に突出する。復元口径17.8cm。胎土に砂粒を含み、淡黄褐～淡褐色を呈し、焼成は良好。調整は胴部外面が細かい継ぎの刷毛目である以外は5と同じである。

7は直口壺である。球形の胴部に短く開く口縁部がつく。胴部の最大径は中位にあり、復元胴径26cmを測る。復元口径14.6cm。器高は26cmほどである。胎土は精良で、橙色を呈し、焼成は良好。胴内面は指で整形した後ヘラで荒くナデ、外面刷毛目、口縁内外は磨滅しているが横ナデ調整と思われる。

8～19は高壺である。8～13が環部、14～19が脚部片である。

环部は、12、13以外は环底部のみの残欠で全形が不明である。9は丸く内湾して開く器形であろう。10と11は屈曲部で折れている。12、13は口縁が屈曲して開き、端部がやや外反するも

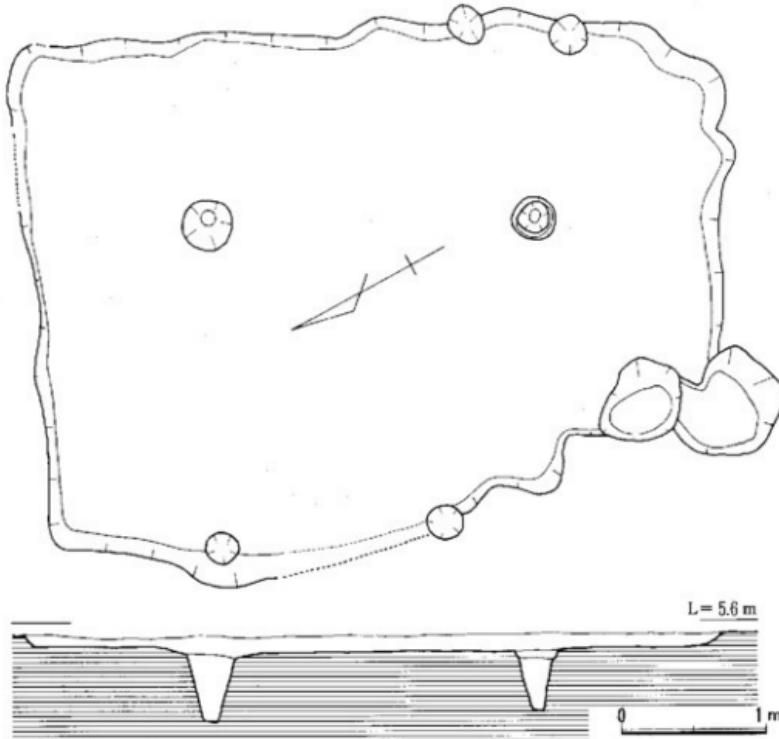


Fig.14 SC-02 実測図・II (1 / 40)

のである。坏部と脚部の接合は8～11、13で観察でき、いずれも脚を貼り付けた後粘土で補強しているようである。8は胎土に多量の砂粒を含み、橙色を呈し、焼成やや不良。器面が剝落して調整不明。9は胎土に砂粒、雲母粒を含み、橙色を呈し、焼成良好で黒斑がある。坏内底面をヘラナデ、外底面を刷毛目の後ナデ調整する。10は胎土が精良で、角閃石を少量含み、暗橙色、焼成やや不良。内底面はナデの後同心円状に刷毛目を施し、外底面は刷毛目調整。11は胎土に砂粒を多量に含み、内面黒褐色、外面赤橙色を呈し、焼成良好。内外面に粗い刷毛目調整を加える。12は口径16cmを測る。胎土は精良で雲母粒を含み、暗黄褐色。焼成良好で外面の一部に黒斑が残る。口縁外面横ナデ、外底面ナデ、内面は器面が剝落して調整不明。13は復元口径18.4cm。坏底が厚い。胎土に砂粒、雲母粒を多量に含み、焼成やや不良。口縁外面ナデ調整、他の部位には刷毛目調整を加え、内外面に赤色顔料を塗布し暗赤褐色に仕上げる。

脚のうち14～16はまっすぐ下方に開く器形をなし、14、15は屈曲して裾が開く。17は外湾しながら開いて終わる。18、19は裾部の破片で、18は内面に稜がある。19は他と異なり、裾部を別に作って脚筒部を接合するものである。坏部と脚部の接合は14～17で観察でき、15以外は脚の貼り付け、15は脚を差し込んで接合する。14は胎土に砂粒、雲母粒を含み、明黄褐色を呈し、焼成良好。器面が剝落しているが、内面ヘラ削り、外面ナデ調整か。15は胎土に砂粒、雲母粒を含み、橙色を呈し、焼成良好。内面はシボリ痕をヘラ削りし、外面は丁寧なナデ調整。16の胎土は精良で、橙色、焼成やや不良。内面シボリ痕をヘラ削りし、外面は器面剝落して調整不明。17はかなり平たい坏部が乗るのであろう。脚下端部は面取りしている。底径10.4～10.6cm、脚部高7.9cmを測る。胎土は精良で、雲母粒を少量含む、橙色を呈し、焼成良好。脚内外を横ナデ調整する。18は底径11.3cmを測る。胎土に砂粒を少量含み、内面黒褐色、外面赤橙色を呈する。焼成はやや不良である。内面はヘラ削りした後、裾部をヘラナデ、外面はナデ調整である。19は脚裾部の残欠で、底径14.9～15.1cmを測る。胎土に多量の砂粒、雲母粒を含み、橙色を呈し、焼成良好。内面端部をナデ、外面は刷毛目の後ナデ調整か。

20～24は小形丸底壺である。いずれも球形の胴部に口縁部が取りつく。20は口縁が内傾して短く立つ。図上復元による法量は、口径6.3cm、器高9.0cm、胴最大径10.0cmである。胎土に砂粒を含み、橙色を呈し、焼成は良好。胴内面はヘラ先で荒く整形、他は器面剝落のため調整不明。21は口縁が外方に屈曲して立つが、屈曲部以上を欠く。復元胴径は8.2cm。胎土に砂粒、雲母粒を含み、内面褐色、外面黒褐～暗黄色を呈する。焼成良好。内面ヘラ削り。外面は口縁横ナデ、胴部ナデ、底部に刷毛目調整を加える。22は他に比して肉厚で、口縁は短く開いて端部を尖り気味におさめる。小片のため不確実だが復元口径10cmを測る。胎土に砂粒を少量含み、赤褐色を呈し、焼成はやや不良。器面が剝落しているが、内面屈曲部にナデ、外面は口縁部に横ナデ、胴部に縦位の刷毛目調整を加える。23は口縁が大きく外に開く。口縁が歪んでおり、

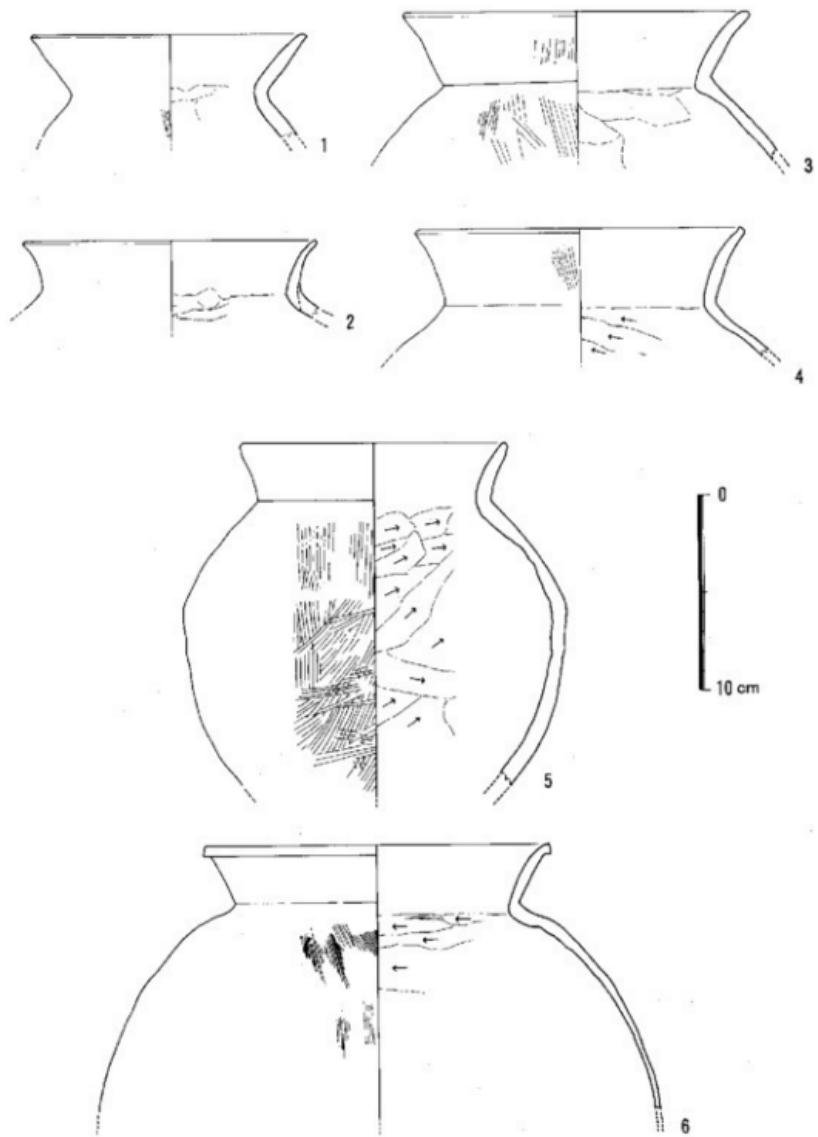


Fig.15 SC-02 出土遺物実測図・1 (1/3)

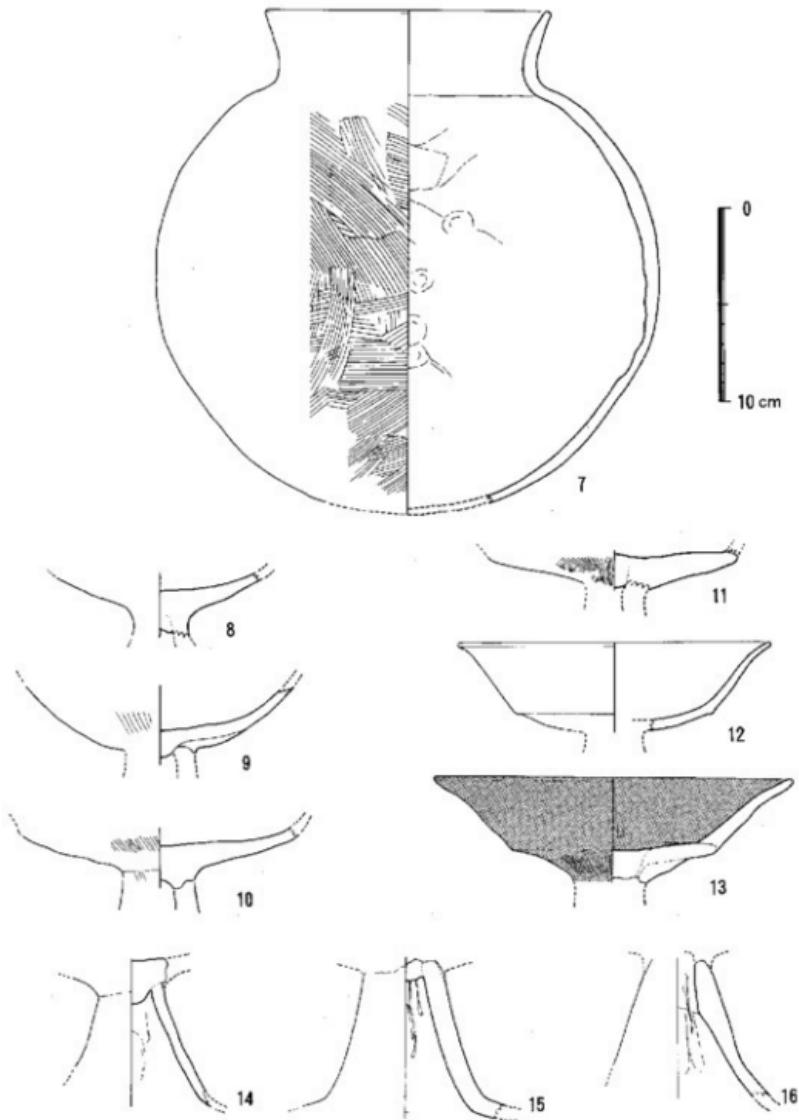


Fig.16 SC-02 出土遺物実測図・II (1 / 3)

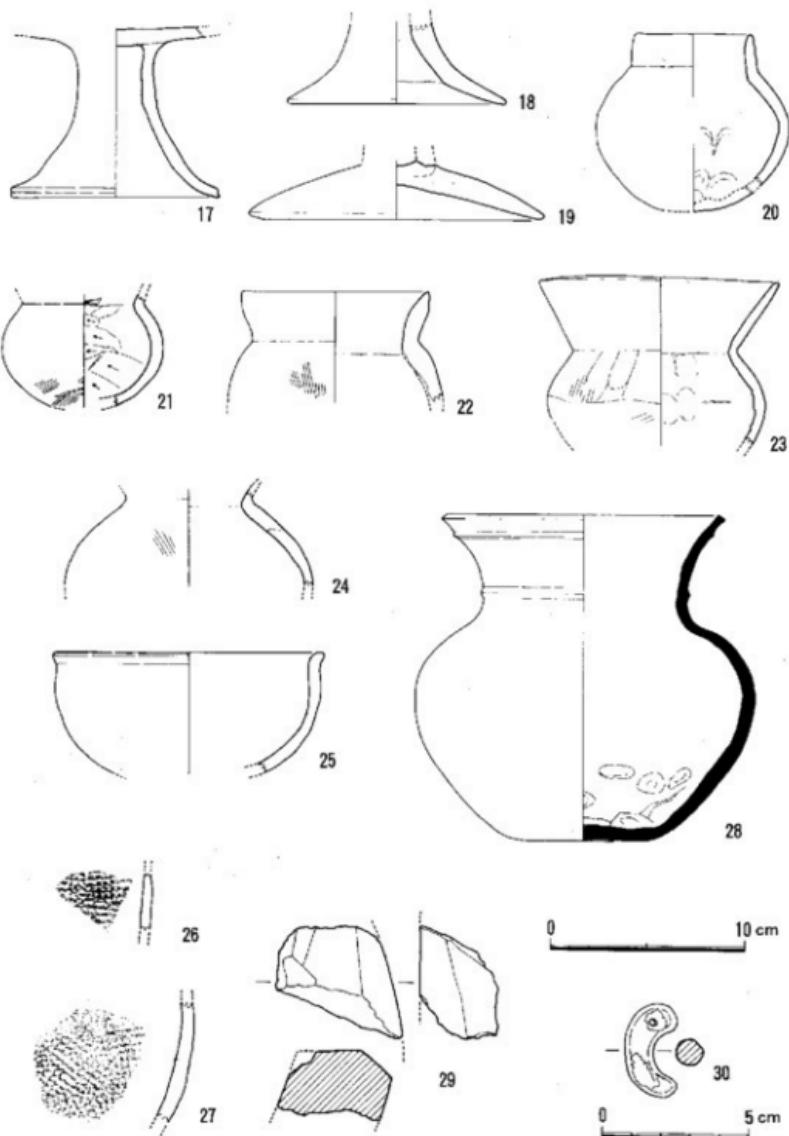


Fig.17 SC-02 出土遺物実測図・III (30は1/2、他は1/3)

復元口径は11.4~12.0cmである。胎土は精良だが、大粒の砂を少し含んでいる。橙色を呈し、焼成良好。胴部内面はヘラ先で整形し、外面は上位を縦に下位を横に板状工具でナデ調整し、口縁内外を横ナデする。24は胴部の破片で口縁は屈曲して外に開く。胎土は精良で雲母粒を含む。内面暗褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好で、胴外面に黒斑が見られる。内面ナデ調整、外面は器面が削落しているが、一部に刷毛目が残る。

25は鉢形土器で、底部を欠く。口縁端部が外反する。器形が歪んでおり、復元口径は14~14.3cm程度である。胎土に砂粒を含み、橙~暗橙色を呈し、焼成はやや不良。内外をナデた後、口縁内外を横ナデ調整。

26、27は朝鮮半島系の軟質土器で、26は小形の、27は大型の土器の一部であろう。ともに外面に格子タキを施すが、胎土は他の土師器と大差ない。26は厚さ0.6cmで、胎土に砂粒、雲母粒を含み、内面淡褐色、外面褐色を呈し、焼成は良好。27は厚さ0.8cmで、胎土に径2mmの砂粒数個と微小な砂粒を少量含み、淡黄褐色を呈し、焼成は良好。ともに内面はナデ調整。

28は陶質土器の壺である。やや肩の張る胴部に、外反して開く口縁部を取りつく。口縁端部は面取りし、若干窪ませる。口縁部に2条の突帯が巡るが、文様はない。底部は安定の悪い平底で、中央部がやや窪む。口径14.6cm、器高16.7cm、胴部最大径は17.5cmを測る。胎土に径1.5mmの黒褐色の鉱物を少量含む。色調は淡い灰青色で、底部付近は焼成不良のため淡灰色を呈する。内底部に指頭痕が残り、胴部外面の中位に3~4条の横位のヘラ削りを認める。胴部1/3以下を内外ともナデ調整、それより上位をロクロ回転による横ナデ調整で仕上げる。外底面が著しく磨滅している。全体の2/3ほどを残している。

29は砥石片である。背面が欠けているが、4面に使用痕がある。石材は砂岩である。

30は勾玉である。表面は風化して、青緑色を呈する。滑石製。

SC-35 Fig.18 PL.7

C区中央部に検出した竪穴住居跡である。周辺は中・近世の水田耕作に伴う足跡群が密に踏み込まれている。住居跡の周りに約2mの間隔をおいて溝（SD-33）が円形に巡っており、またその溝から分枝した溝（SD-32）がSC-60となつながっている。溝は地形にあわせて北に下る。これらの溝と出土遺物については項を改める。

住居跡は東西4.5m、南北4.5mの正方形プランを呈する。壁は約0.2mを残している。床面には12個のピットがあるが、配置に規則性がない上にいずれも浅く、主柱穴を決め難い。住居跡床面は汚れた地山土で床を貼っている。住居跡北西壁から溝（SD-34）が屋外へ延びており、これが先に述べた住居跡を埋む溝に連結している。SD-34の底面は住居跡床面とほぼ同レベルで、ここから北に向かって下る。また住居跡に連結する部分では溝の覆土の上に地山土

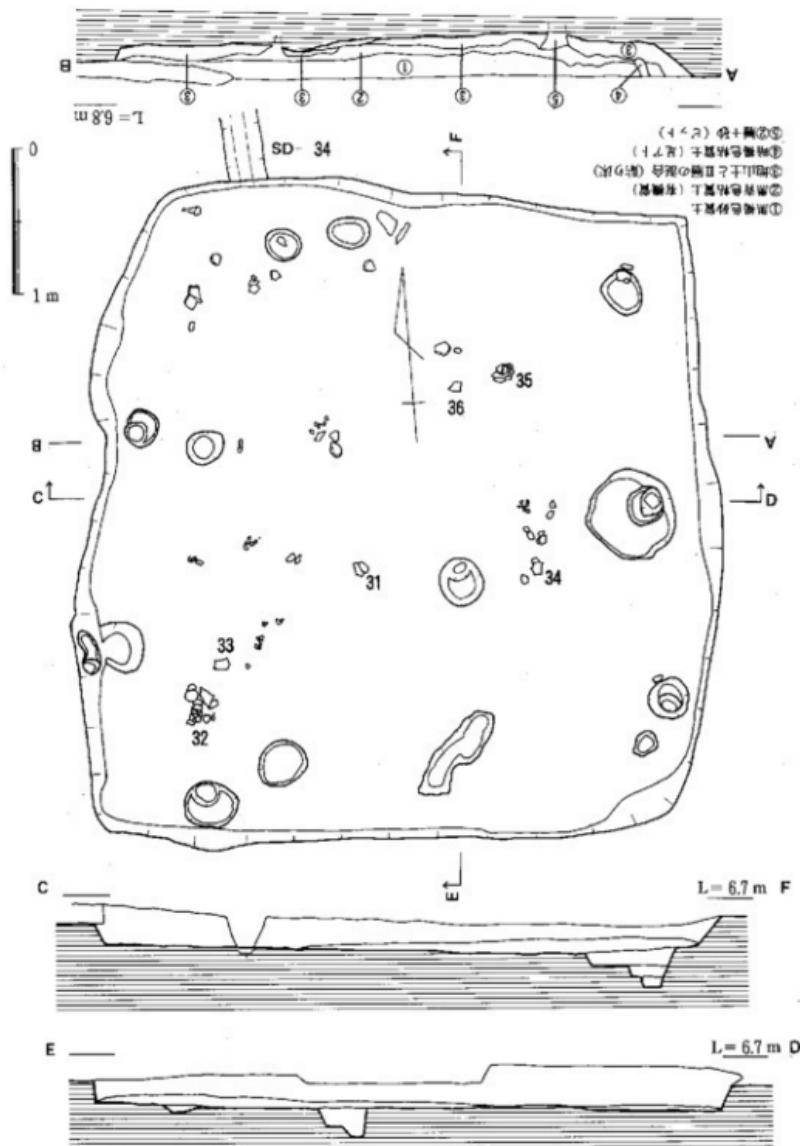


Fig.18 SC-35 実測図 (1 / 40)

図中の番号は遺物番号に同じ

が被った状況であり、ここが暗渠になっていた可能性が高い。住居跡の覆土は粘質土→砂質土の順に堆積しており水流によって埋没したことを示している。また調査時にも湧水のため周辺がかなり軟弱であったことから見て、住居跡を囲む溝や住居跡から出ていく溝は排水を意図したものであると考えられる。

SC-35出土遺物 Fig.21 PL.13, 14

31~35は土師器、36は須恵器である。他に土師器片521点、須恵器甕片1点がある。この中には36のように足跡に踏まれて混入したと考えられる遺物が含まれている。また粘質土に密閉されて、土器に付着した漆が良く残っていた。

31は甕形土器の口縁部片である。口縁は強く屈曲して開き端部は丸い。肉厚である。復元口径14.3cm。胎土に砂粒を多量に含み、暗橙～黒褐色を呈し、焼成は不良。胴部内面へラ削り以外は調整不明。32は甕形土器の胴部片である。球形をなす。胎土に2~8mmの砂粒と雲母粒を含み、褐～淡褐色を呈し、焼成良好。内面へラ削り、外面は刷毛目調整のあとナデている。外底面が磨滅し、外面上半と内底面に炭化物が付着している。また、内底面は炭化物の上から黒色の漆が円形にかかっているが、意図的に塗られたものであろうか。33は高坏の坏底部である。胎土に砂粒、雲母粒を含み、淡橙色を呈し、焼成はやや不良。脚を貼り付け、粘土で補強して接合しており、接合部が肉厚である。外底面は粗い刷毛目調整で、内底面には漆が塗布されており、黒色を呈する。34は高坏の脚部で、ゆるく外反して開き端部は尖り気味である。復元底径11.4cm。胎土に砂粒を多量に含み、風化して乳灰色を呈し、焼成は不良。調整は不明。35は脚付きの小壺である。胴部は球状をなし、口縁部を欠く。器面が剥落して明確でないが、脚部が接合面から剥げ落ちているように見える。胎土に砂粒、雲母粒を含み、風化して乳白色を呈し、焼成は不良である。36は須恵器甕の胴部片である。胎土に径1mmの砂粒を少量含み、灰青色を呈し、焼成良好。外面に格子タタキ、内面に同心円文のあて具痕が残る。36は足跡からの混入品であろう。

SC-52 Fig.19 PL.7

D区南西部に検出した南北に長い竪穴住居跡である。東西最大3.05m、南北最大4.46mを測り、西に向かって扇形に広がる不整長方形プランを呈する。壁は0.1m弱を残す。床面の北西隅と南東隅にベッド状の高まりがある。南側1/5を区画するように溝が横断し、溝は更に東壁沿いに北へ約2m延びている。また、住居跡北西隅にも壁に沿って掘られた浅い窪みが3つほどある。床面中央部でビット3個を検出したが、南西～北東に並ぶ2個が主柱穴であろう。南西の主柱穴から西壁まで浅い溝が掘られている。床面は地山土で、覆土は黒褐色土である。

SC-52出土土器 Fig.21 PL.14

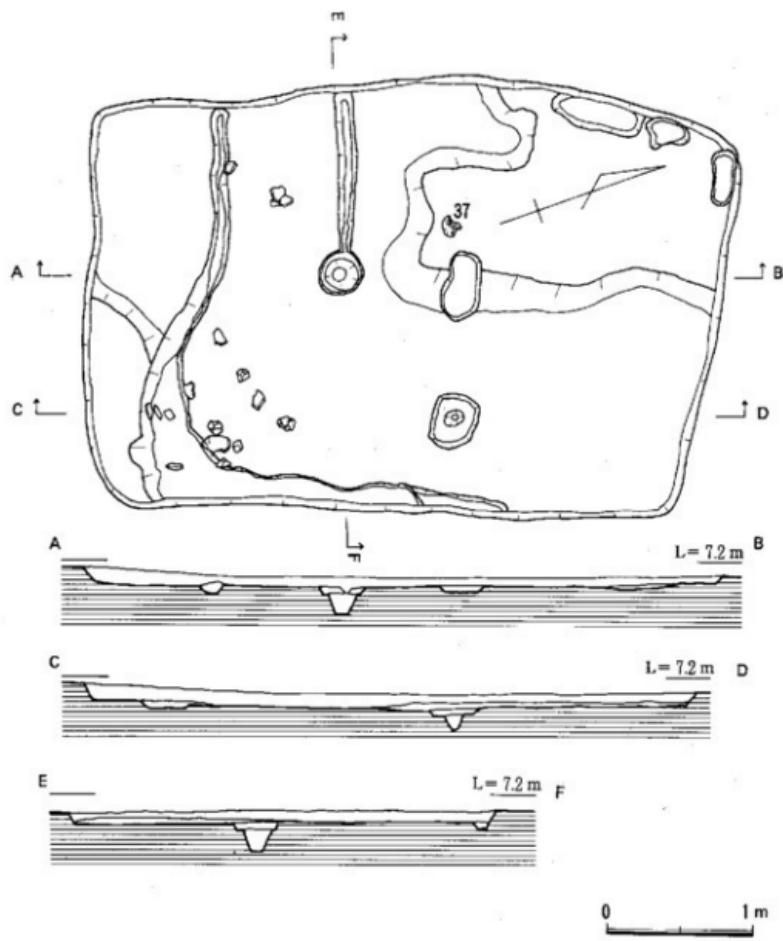


Fig.19 SC-52 実測図 (1 / 40)

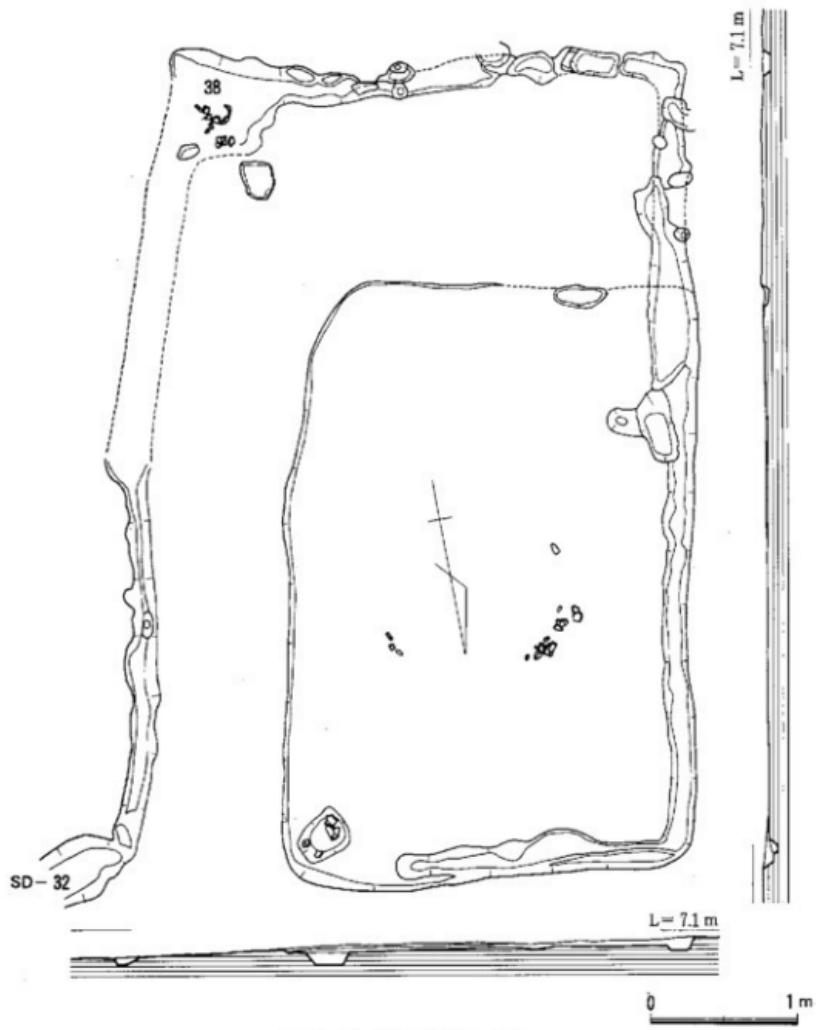
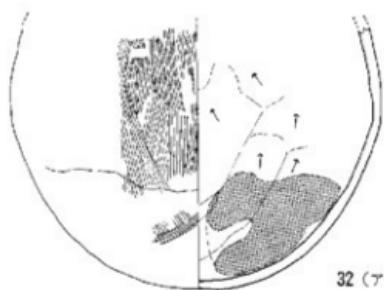


Fig.20 SC-60 実測図 (1 / 40)

SC - 35



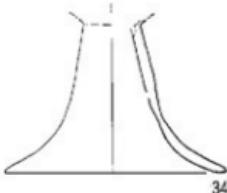
31



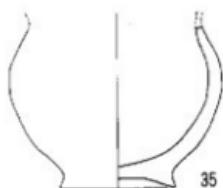
32 (アミは漆)



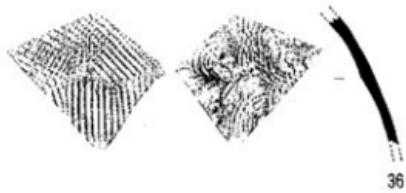
33 (アミは漆)



34

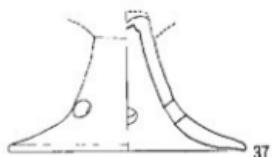


35



36

SC - 52



37



Fig.21 SC - 35、52、60 出土遺物実測図 (1 / 3)

SC-52からは80点の土師器片が出土した。壺、高壺などの器種があるが、図化し得るのは1点のみである。37は高壺の脚部で、外反して開き端部は丸い。3方に透孔を穿つ。底径12.1cm。胎土に砂粒、雲母粒を含み、外面黒～褐～赤褐色、内面暗橙色を呈し、焼成は不良。接合は脚の差し込みによる。器面が削落して調整手法は不明である。

SC-60 Fig.20 PL.7.

D区南東隅で検出した南北に長い方形プランの堅穴住居跡である。著しい削平を受けているうえ、周辺は中・近世水田に伴う足跡が密に踏み込まれており、極めて残りが悪い。当初は東西2.8m、南北4.2mの小形住居跡と考えたが、住居跡屋外の南から東にかけて溝が方形に巡っており、これを壁溝の名残りと見れば、南と東にベッド状の高まりを持つ東西4.0m、南北5.7mの住居跡となろう。壁溝はさらに住居跡屋内の西辺から北辺の半ばまで巡り、ほぼ住居跡を一周している。また、東辺の壁溝は住居跡を出て北方へ続いており、SC-35を閉む溝SD-33に連結している。住居跡床面の北東隅に浅いピット一つがあるが、主柱穴とは考えにくく、床面には他に深いピットは見当らない。住居跡床面は地山土（黄褐色粘質土）である。

出土遺物には土師器片97点、須恵器片6点があるが、他に住居跡に踏み込まれた足跡に伴うと思われる近世の陶磁器、瓦などが混在して出土している。

SC-60出土遺物 Fig.21 PL.14

38は土師器壺形土器で、住居跡南東隅の壁溝覆土より出土した。球形の胴部にやや外反して開く口縁部が付き、端部は少し上方につまみ上げ、面取りする。復元口径12cm。胎土に砂粒及び径2～3mmの砂を含み、内面淡灰色、外面乳白～褐色を呈する。焼成は不良で、胴部外面に黒斑が見られる。全体的に器面が削落して調整は不明瞭だが、内面は胴部がへら削りで屈曲部直下は指おさえ、口縁は横位の刷毛目が残る。外面は胴部に刷毛目を認めるが、肩部以上は不明である。

(2)土坑と出土遺物

土坑は11基検出した。全て古墳時代のものである。

SK-09 Fig.22

A区北東部で検出した南北に細長い楕円形プランの土坑である。南北長1.8m、東西最大幅0.6m、深さ0.08mを測る。遺物は土器小片が少量出土したが、図化できるものはない。

SK-11 Fig.22 PL.8

SK-09の東南に位置する東西に長い隅丸方形プランの土坑で、東側は調査区の外に伸びる。

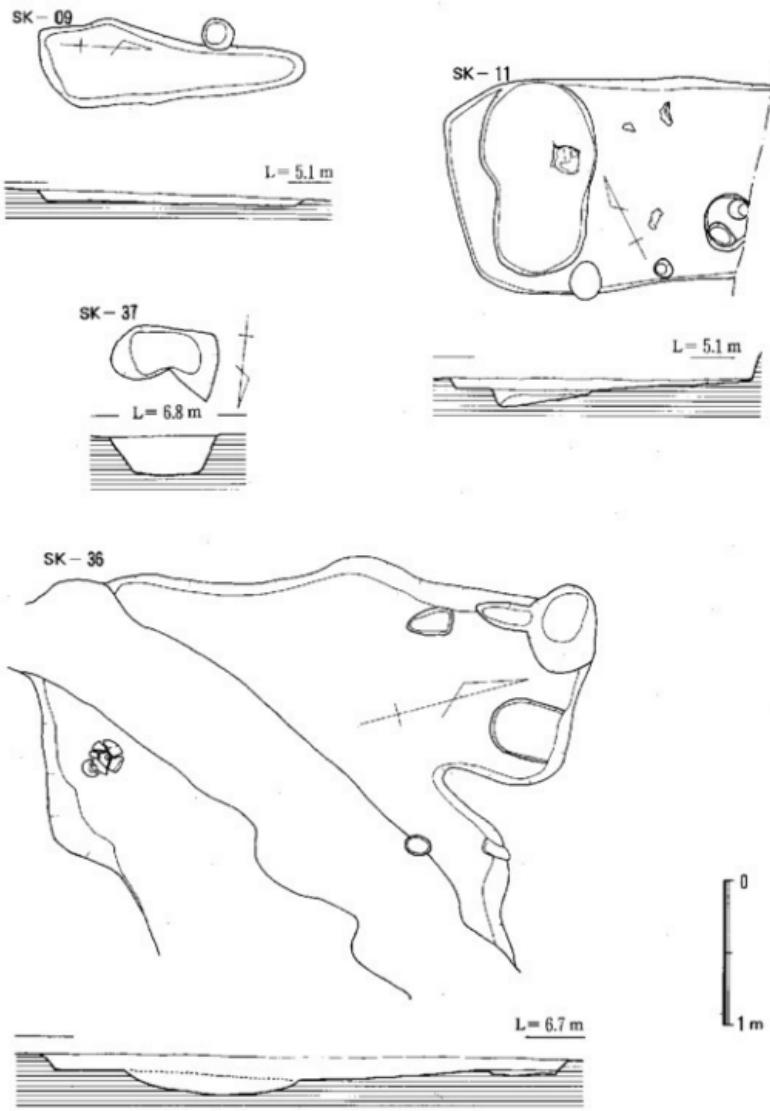


Fig.22 SK-09, 11, 36, 37 実測図 (1 / 40)

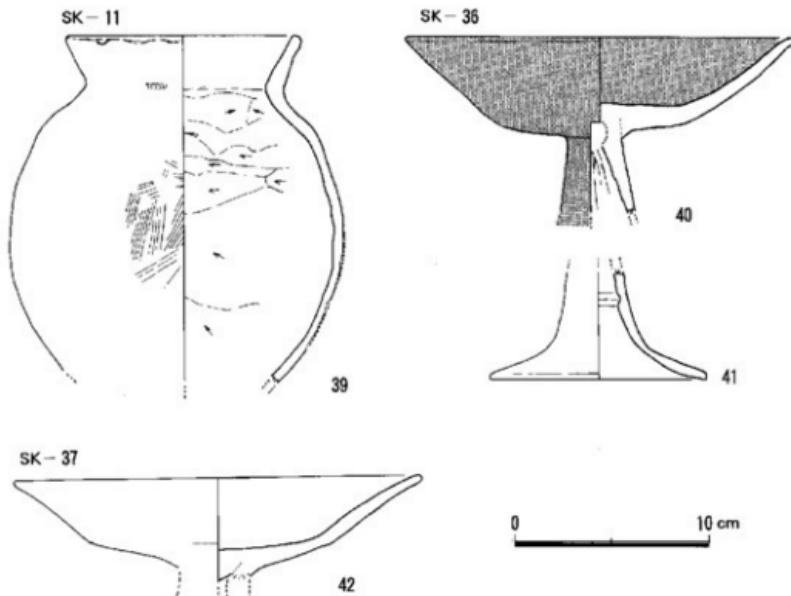


Fig.23 SK-11、36、37出土遺物実測図 (1 / 3)

南北幅1.5m、東西長2.3m以上で、深さ0.08mを測る。土坑底面西側に楕円形の浅い窪みがあり、長径1.35m、短径0.8m、深さ0.1mである。

SK-11出土遺物 Fig.23 PL.14

覆土から土師器片12点が出土したが、図示できるのは1点である。39は土師器壺形土器で、土坑内の浅い窪みから出土した。縦に長い球形の胴部に短く開く口縁部が付く。口縁端部の一部は外に折り返されている。復元口径12.1cm、胴部最大径は中位にあって復元径17.1cmを測る。胎土・砂粒・雲母粒を少量含み、内面暗橙色、外面橙～淡橙色を呈す。焼成は良好で、胴部外面の対をなす2ヶ所に黒斑が見られる。胴部内面へラ削り、外面は刷毛目調整の後ナデており、口縁内外を横ナデ調整している。口縁と胴下半部の外面に煤が付着している。

SK-36 Fig.22 PL.8

C区中央部で検出した。竪穴住居跡SC-35の北約2mに位置し、SC-35を囲む溝SD-33に切られている。切り合いと削平のため明確でないが、方形を意識したプランであろう。南北長3.9m、東西長3.1m以上である。土坑北端の底面に4個の浅いピットがある。

SK-36出土遺物 Fig.23 PL.14

図示した2点の他に土師器壺などの破片7点がある。

40、41はともに高壺である。40は脚下半部を欠き、逆に41は脚下半部のみの残欠であるが接合しない。40は壺部が浅く、壺底部から口縁部への屈曲がゆるやかで稜を持たない。口径19.4~19.8cm。胎土に小さな砂粒を多量に含み、焼成は良好で、口縁部に黒斑が見られる。脚を壺底部に差し込んで接合している。器面がほとんど剥落しているが、壺部内外面と脚部外面に僅かに赤色顔料の付着を認める。41はラッパ状に広がる脚部で、底径10.9~11.1cmを測る。胎土に小さな砂粒を含み、淡橙色を呈し、焼成はやや不良で底面に黒斑が見られる。器面が剥落して調整不明である。

SK-37 Fig.22

豊穴住居跡SC-35の西側にあり、SC-35を囲む溝SD-33と切り合うが先後関係は分からなかった。東西に長い楕円形プランで、東西0.74m以上、南北0.37m、深さ0.25mを測る。

SK-37出土遺物 Fig.23 PL.14

図示した高壺の他に土師器壺などの破片27点が出土した。42は高壺で、浅い壺部片である。口縁は屈曲し、外反して開く。口径20.7cm。胎土に小さな砂粒を少量含み、淡橙~乳白色を呈し、焼成は一部不良。脚を壺部に貼り付けて接合している。器面が剥落して調整は不明である。

SK-40 Fig.24 PL.8

B区南半部で検出した東西に長大な土坑である。東西長9.5m、南北最大幅2.4mを測る。土坑は南に深い断面皿状をなし、検出面から底面まで0.2m弱である。土坑底面には約20個のピットが見られ、それらは土坑の東西両壁に集中している。また、後述する掘立柱建物SB-42がこの土坑の南側に並行して建っている。土坑の覆土は黒褐色土の単層で、土師器を始めとする多量の遺物が出土した。

SK-40出土遺物 Fig.25~29 PL.15,16

43~67は土師質の、68~74は須恵質の土器で、朝鮮系の土器を含んでいる。他に土師質の土器片606点がある。器種は壺、壺、高壺、小形丸底壺、脚付鉢、平底鉢などがある。また、75~79は石製品、80~82は鉄製品である。

43~46は壺である。43は屈曲してまっすぐ開く口縁部である。小片のため不確実だが復元口径14cmを測る。胎土に砂粒を少量含み、淡橙色を呈し、焼成は良好。口縁部と胴部の接合位置がずれ、粘土を余している。器面剥落のため調整は不明。44も屈曲して直に開く口縁部で、やや肉厚である。復元口径16cm。胎土に砂粒を多量に含み、橙~淡橙色を呈し、焼成良好。胴部

内面ヘラ削り、外面縦位の刷毛目、口縁内外横ナデ調整である。45はなで肩の胴部に内湾して開く口縁部が付くもので、頸部の屈曲は緩やかである。復元口径18.6cm。胎土に砂粒が多く、雲母粒を少し含み、橙～褐色を呈し、焼成はやや不良である。器面が剥落しているが、胴内面ヘラ削り、外面に刷毛目調整を認める。46は同一個体と思われる破片が多数あるが、口縁から底部までつながらない。肩の張る球形の胴部に内湾気味に外に開く口縁部が取りつく。口縁端部は面取りする。他に同じ胎土・色・焼きの口縁部小片があり、それは端部が外反する。口縁が部位によって変形するのか、あるいは別個体か。復元口径17.6cm。胎土に小さな砂粒と雲母粒を少量含む。橙～褐色を呈し、焼成は不良で胎土が黒色を呈する。調整は口縁内外面横ナデ、胴部内面は指で整形した後ナデ、胴部外面は底部から先に叩いたと見え、下半が平行タタキ、上半は板目が少し浮き出て格子模様のタタキになる。

47は二重口縁の壺形土器である。口縁部の破片で、復元口径11.2cmを測る。胎土に砂粒を含み、橙色を呈し、焼成やや不良。内外横ナデ調整。48は壺または甕の底部片である。著しく磨滅しており、他からの流れ込みか。平底で底面中央がやや窪む。底径は5.9cm。胎土に小さな砂粒を少量含み、淡黄褐～褐色を呈し、焼成はやや不良である。調整は胴部内面ナデ、外面板状工具によるナデで、内外底面は器面が剥落して調整不明である。

49～58は高杯である。49は壺口縁部片で、大きく直線的に開き端部は外反する。大口径土器の小片のため不確実だが復元口径34cm。胎土は精良で、雲母粒を含む。淡橙～暗橙色を呈し、焼成良好。内面は下半を板ナデの後上半を横の刷毛目、外面は上半を縦位の刷毛目の後下半を横ナデと一部板ナデし、最後に口縁内外を横ナデ調整する。50は壺部小片で、屈曲部外面に段を持つ。胎土は精良で雲母粒を含む。焼成良好。内外をナデ調整の後、赤色顔料を塗布し、暗赤色に仕上げる。51は脚を欠く。壺部は浅く、強く屈曲して口縁が立ち上がり、端部は外反する。口径17.3cm。胎土に小さな砂粒、黄白色の粒子、雲母粒をそれぞれ少量含む。橙褐色を呈し、焼成良好。接合は脚の差し込みで、接合面に刻み目がある。調整は内外とも刷毛目の後ナデで仕上げる。52は丸く深い壺部に「ハ」字形に開く脚部が付く。壺口縁端部が少し外反する。口径17.7cm、復元底径11.9cm、器高14.6cmを測る。胎土は精良で、橙～淡黒褐色を呈し、焼成は良好である。壺底部に突起をつくり、脚部に差し込んで接合する。器面剥落のため調整は明瞭でないが、壺部外面にナデもしくは研磨の痕跡、脚部内面にシボリ痕が認められる。53は壺底部のみの残欠である。胎土は精良で、内面暗橙色、外面赤褐色を呈し、焼成は不良。接合は脚貼り付けの後粘土で補強したものか。器面が磨滅しているが、内面に暗文を認める。54は壺口縁部と脚部を欠く。胎土に大粒の砂を含み、橙褐～黒褐色を呈し、焼成良好。壺と脚の接合は52と同じ。脚筒部外面は丁寧なナデ、内面ヘラ削り、他はナデ調整である。55、56は脚筒部片で、裾部とは内面の縫で境する。ともに脚を壺に差し込んで接合する。55は胎土に大粒の

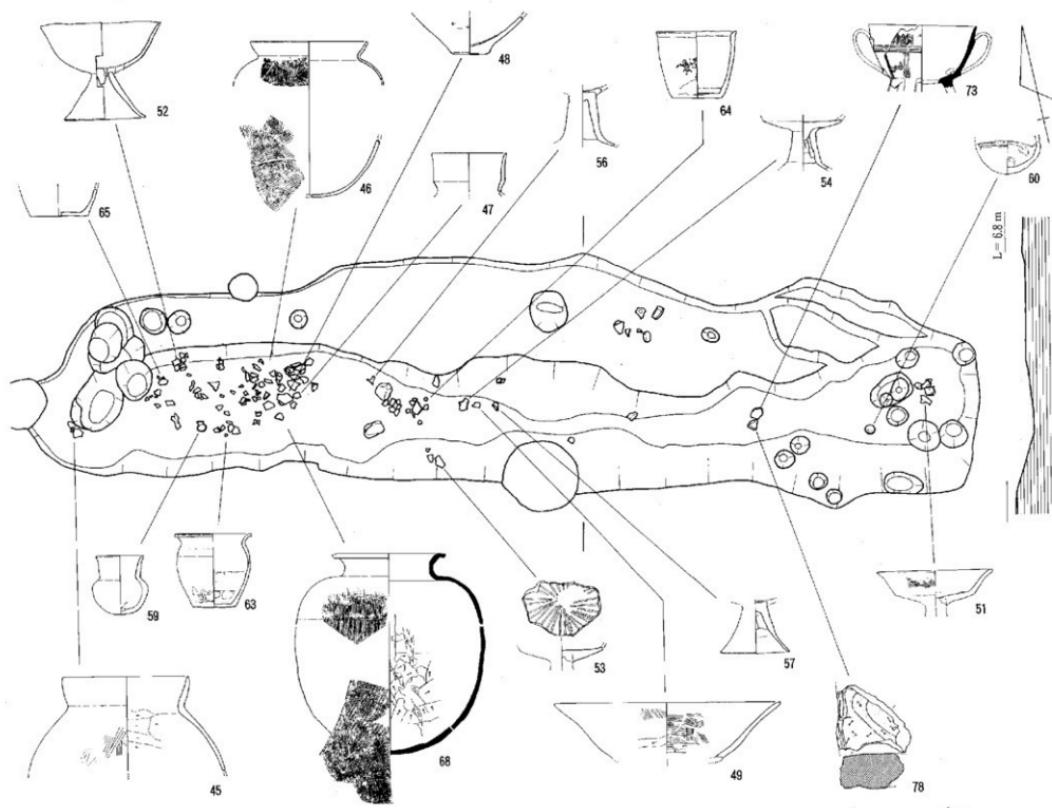


Fig.24 SK-40実測図 (1 / 40)

0 1m

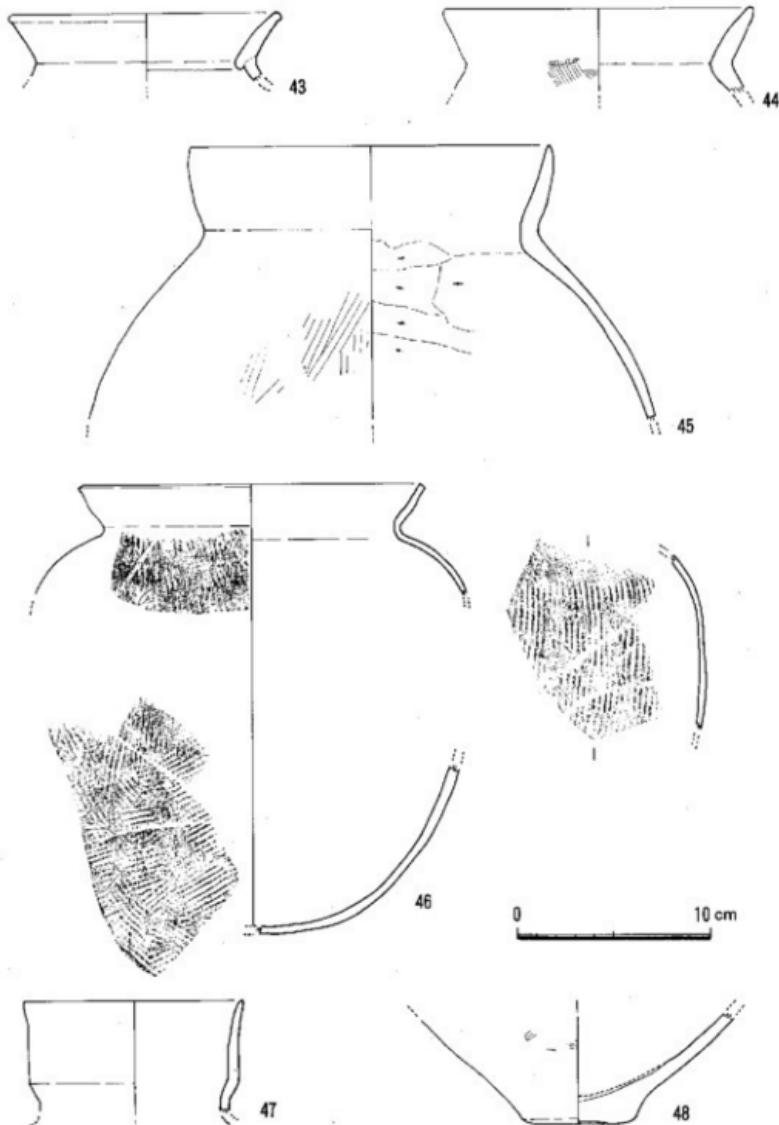


Fig.25 SK-40 出土遺物実測図・I (1 / 3)

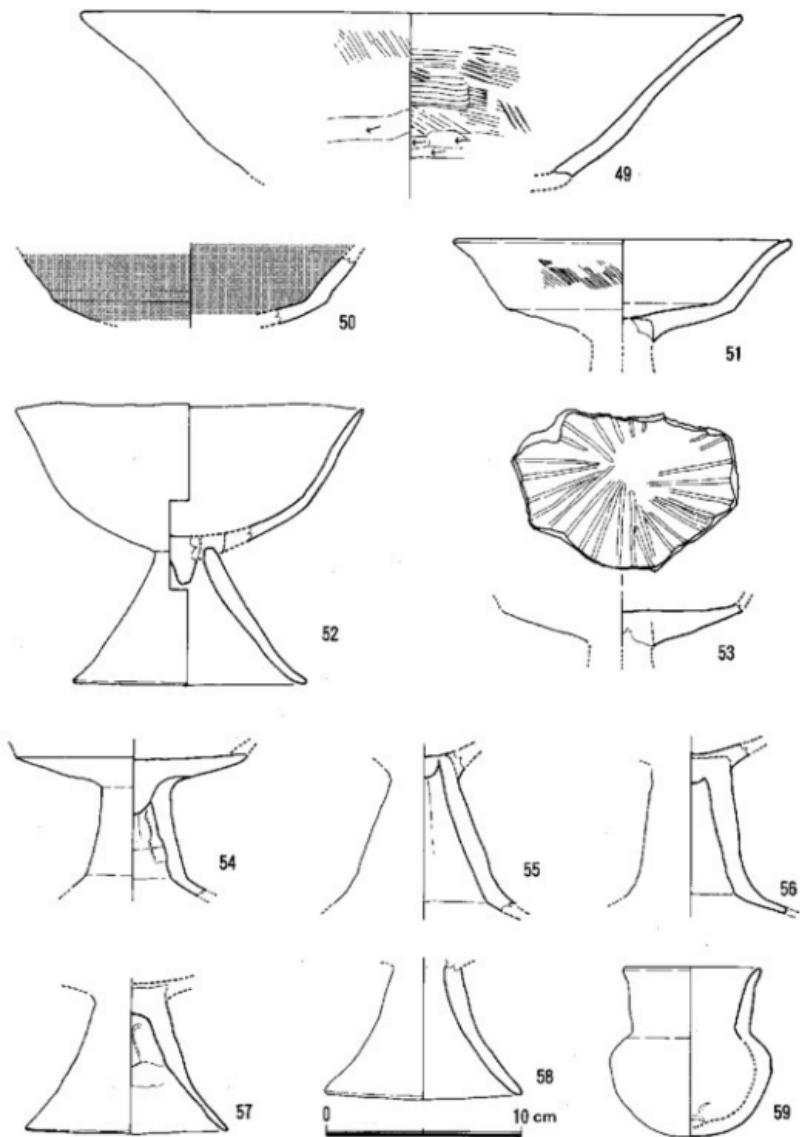


Fig.26 SK-40 出土遺物実測図・II (1 / 3)

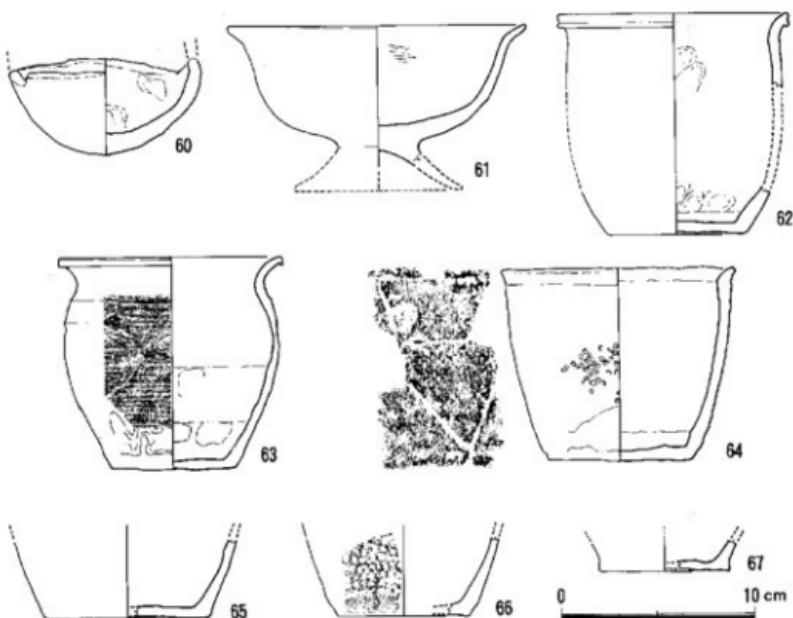


Fig.27 SK-40出土遺物実測図・III (1/3)

砂を含み、内面橙褐色、外面黒褐色を呈し、焼成は良好。内面ヘラ削りの後ナデ、外面ナデ調整。56は胎土に大粒の砂と角閃石を少量含み、内面褐色、外面黒褐～暗赤褐色を呈し、焼成はやや不良。内面ヘラ削り、外面ナデ調整。57、58は「ハ」字形に聞く脚である。57は復元底径10cm。胎土に砂粒を少量を含み、淡橙色を呈し、焼成はやや不良。脚を坏に差し込んで接合。内面にヘラ削りの痕跡があるが、器面が剥落して他は調整不明。58は器形が歪んでおり、底径は最大10.1cm。胎土は精良で、橙色を呈し、焼成はやや不良。器面が剥落して調整不明。

59は小形丸底壺である。肩の張る球形の胴部に外傾して聞く口縁部が付き、端部が外反する。口径7.1cm、器高8.8cmを測る。胎土に小砂粒と角閃石を多量に含み、暗橙褐色を呈し、焼成良好。内底面をヘラ先で整形し、胴部内外をナデ、口縁部内外を横ナデ調整する。60は小形丸底壺の底部残欠である。擬口縁をなす。胎土に多量の砂粒、少量の雲母粒を含み、黄褐色を呈し、焼成はやや不良。器面が風化して調整が明瞭でないか、内底面に指頭痕が残る。

61は脚付鉢である。胴は丸く、口縁部は外反する。脚端部を欠く。口径15.5cm。胎土に小砂粒、雲母粒を含み、黄褐色を呈し、焼成は不良で外面に黒斑がある。器面が剥落して調整不明。

62～67は朝鮮系軟質土器の平底鉢である。62は口縁部と底部が接合しないが胎土・色調から

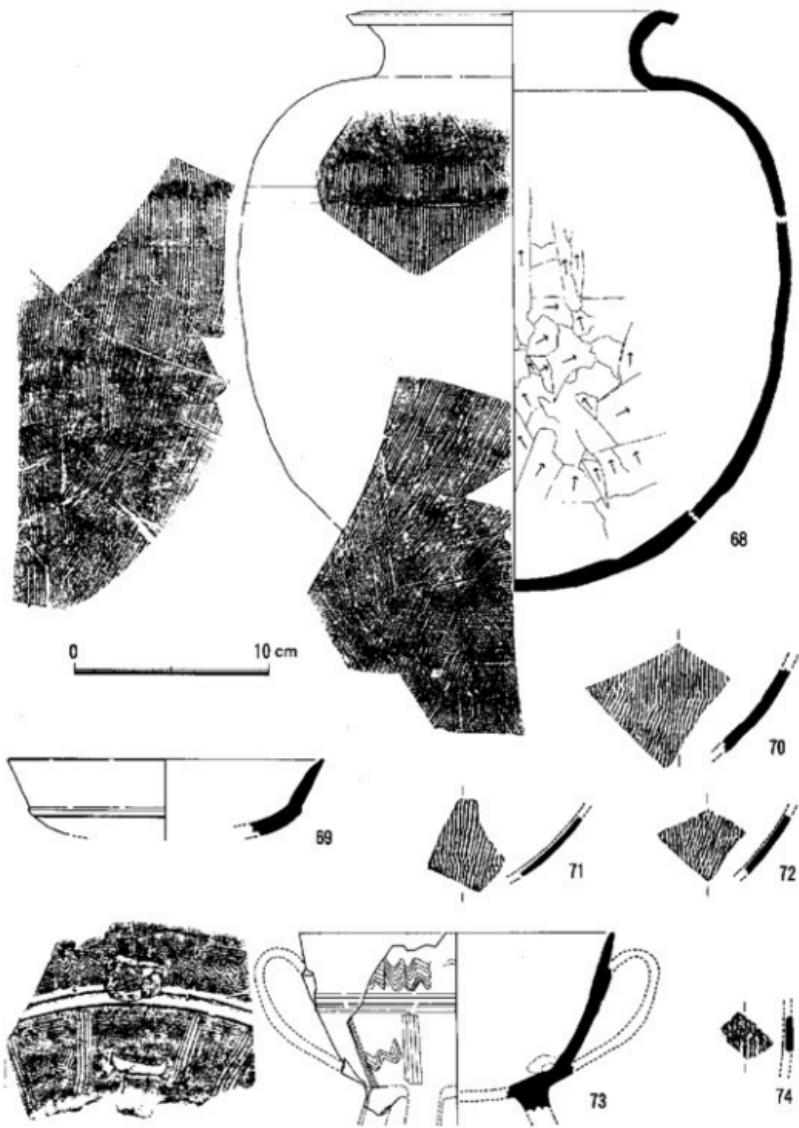


Fig.28 SK-40出土遺物実測図・IV (1/3)

見て同一個体であろう。口縁は外反し、端部は面取りされて窪み、下端が下に垂れる。図上復元による法量は、口径12cm、底径7.2cmである。胎土に砂粒を多量に含み、黒褐～暗橙色を呈し、焼成は不良である。調整は内面を指先で整形した後、口縁内面と胴部外面下端部にヘラ削りを加え、全体を横ナデかナデて仕上げる。63はやや肩の張る器形で、口縁は外反して開き、端部を面取りする。口径11.6cm、底径6.4cm、器高11cmを測る。胎土に径0.5mm前後の砂粒を多量に、雲母粒を少量含む。橙色を呈し、焼成は良好。下半部は内外面とも指頭痕が残り、底部内外をナデ、胴以上を板状工具による横ナデ調整で仕上げる。64は胴部が内窓外傾して立ち、端部で若干外反する。最大径は口縁にあり、図上で復元した法量は、口径12.1cm、底径7.4cm、器高10cmである。胎土に0.5mm前後で砂粒を多量に含み、内面明黄褐色、外面暗橙色を呈す。焼成は良好で外面下端部に黒斑がある。調整は、内面が胴部ヘラ削りの後底部を含めてナデ調整し、胴部と底部の境を横ナデ、外面は胴部に格子タタキ、底部にナデ調整を加えた後、その境をヘラ削りし、最後に口縁内外を横ナデする。65～67は底部片である。復元底径は65が8.4cm、66と67が6.8cmを測る。いずれも胎土に砂粒を多量に含み、色調は橙～褐色を呈し、焼成は良好である。調整は65が胴部外面ヘラ削りの後ナデ、66が胴部外面格子叩きで底部との境をナデ調整している。それ以外は器面が剥落して調整不明である。

68～74は陶質土器である。68は壺形土器で、肩の張る球形の胴部に強く外反して開く口縁部が付く。口縁は端部でやや下方に垂れる。口径17.1cm、器高30cmを測る。胎土はSC-02出土の壺(28)に似ており、精良で径0.5mm前後の黒色粒子をほんの少し含む。内外灰黒色を呈し、焼成は不良で、胎土が赤褐色をなす。2cm前後の粘土帯を積み上げて成形しており、口縁を胴に差し込んで接合する。内面ナデ及びヘラ削り、外面ナデで細かい縦席文タタキの後、肩部を帶状に1回転ナデでタタキを消している。70～72は同一個体で、壺形土器の胴部片である。同じものが他に3点ある。胎土に黒褐色と白色の粒子を少量含み、色調は淡灰色を呈し、焼成は不良。外面は平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。74も壺の胴部片と見られる。胎土は精良で、灰褐色を呈し、焼成は良好である。外面に縦席文タタキを施すが、縦目は68より粗い。69は無蓋高壺の口縁部である。復元口径16cm。胎土は精良で、灰黒色を呈し、焼成不良。ロクロ回転は逆時計回り。73も無蓋高壺で、偏平な把手がはずれた痕がある。壺部は深く、内窓気味に開き、端部を面取りする。壺部中位に2条の稜を入れ、その上位に横描波状文、下位に横状施文具による縦沈線と波状文を入れる。脚には透孔が入るが、透孔の横幅は不揃いで透孔の数は不明。復元口径16.2cmを測る。胎土に径1mm前後の白色と黒褐色の粒子を多量に含み、灰青色を呈する。焼成良好。壺内底面に指頭痕が残る。ロクロ回転は逆時計回り。施文は①稜線・上位の波状文②把手貼付③縦沈線④縦沈線の間に波状文、の順に行っている。

75～79は砾石である。75は小形、他は大型品である。75は方柱状をなし、4面を使っている。

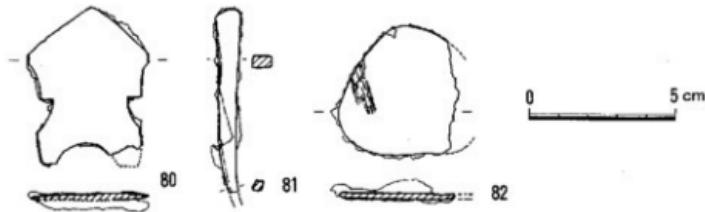
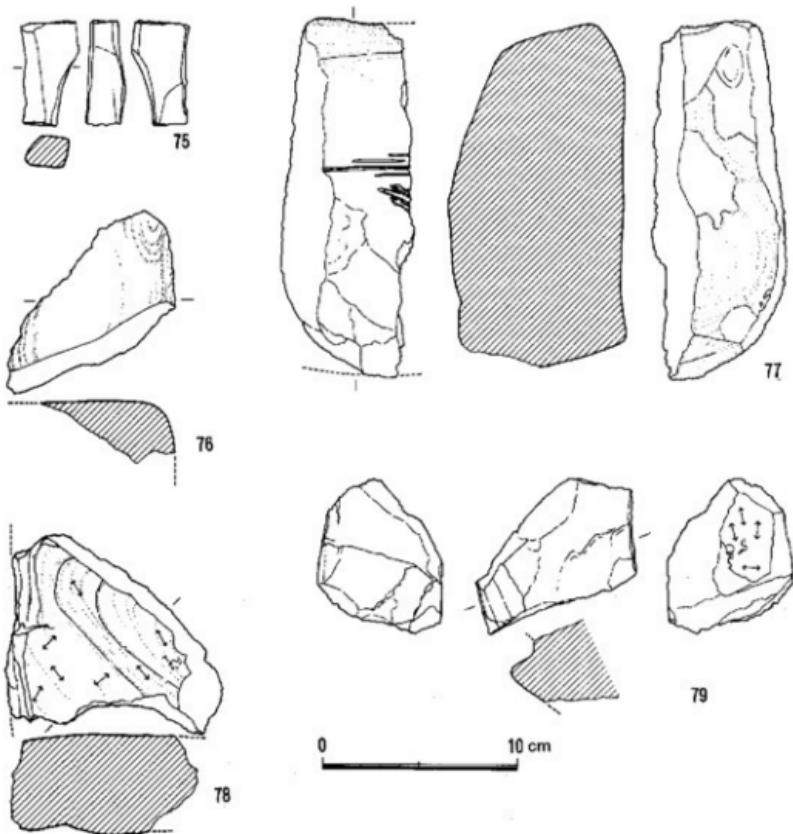


Fig.29 SK-40 出土遺物実測図・V (75~79…1/3, 他…1/2)

上下が折れている。砂岩製。76は台石かもしれない。上面がやや窪む。今山産の安山岩を用いている。77は厚さ9cmの砂岩の両面を使っている。片方の面には4条の浅い溝がある。78は片方の面が浅く窪むもので、火を受けた形跡がある。砂岩製。79は表裏両面に研磨した痕がある。片方は砥石面だが、もう一方は溝状の窪みが彫られ、焼けている。全体の形が不明だが、何らかの鉢型の可能性もある。砂岩系の石材を用いている。

80~82は鉄製品である。80は無茎の鉄鎌である。片脚を欠く。長5.4cm、幅4.1cm。81は有茎の鉄鎌で、下端部を欠く。長6.2cm以上、幅0.9cm。82は隅丸の三角形状を呈する板状の鉄製品で、一部が欠けている。表裏両面に木質が付着しているが、木質の日は不揃いである。

SK-41 Fig.30

SK-40の北約12mで検出した東西に長い梢円形プランの土坑である。東西長2.75m、南北幅0.9m、深さ0.45mを測る。土師器の小片2点が出土したが、図示できるものはない。

SK-51 Fig.30 PL.8

SK-40の北西約12mに位置する東西に長い方形プランの土坑である。東西長4.4m、南北幅3m、深さ0.3mを測る。底面東側に深さ0.7mの梢円形のピットがある。

SK-51出土土器 Fig.31 PL.17

覆土から約180点の土器片が出土した。土師器の他に、弥生土器などが混入している。

83は突帯文土器の甕である。口縁部と同高に突帯を貼付する。胎土に砂粒を多量に含み、暗橙～黒褐色を呈し、焼成は良好である。器面が剥落して調整不明である。突帯の刻目は棒状工具の押圧による。84は甕棺の口縁部片である。口縁が逆L字形に屈曲し、口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。胎土に砂粒を含み、淡黄褐～黒褐色を呈し、焼成は不良である。口縁外面が横ナデ調整である以外は器面が剥落して調整が不明である。

土師器には甕、高环、小形丸底壺などがある。図示できるのは3点である。85は大形高環の脚部で、屈曲して開く。底径18.9cmを測る。胎土に小さな砂粒を含み、橙～黒褐色を呈し、焼成はやや不良で黒斑がある。器面剥落のため調整は不明である。86、87は小形丸底壺である。球形の胴部に真っ直ぐ開く口縁部が付く。86はほぼ完存しており、口径9.3～9.5cm、器高10.6cm、胴部最大径10.7cmを測る。胎土に径2～3mmの砂粒を含み、赤～橙色を呈し、焼成は良好で、胴部と口縁部に黒斑が見られる。胴部内面ヘラ削り、外面板状工具による雑なナデで、口縁内外をヘラ削りした後横ナデ調整する。87は口径が胴径を上回り、口径8.8cm、器高8.8cm、胴部最大径8.4cmを測る。胎土に小さな砂粒を少量含み、淡橙色を呈し、焼成は良好で、外面の対をなす2ヶ所に黒斑がある。胴部内面ヘラ削り。外面は全面に刷毛目を施した後、胴部を

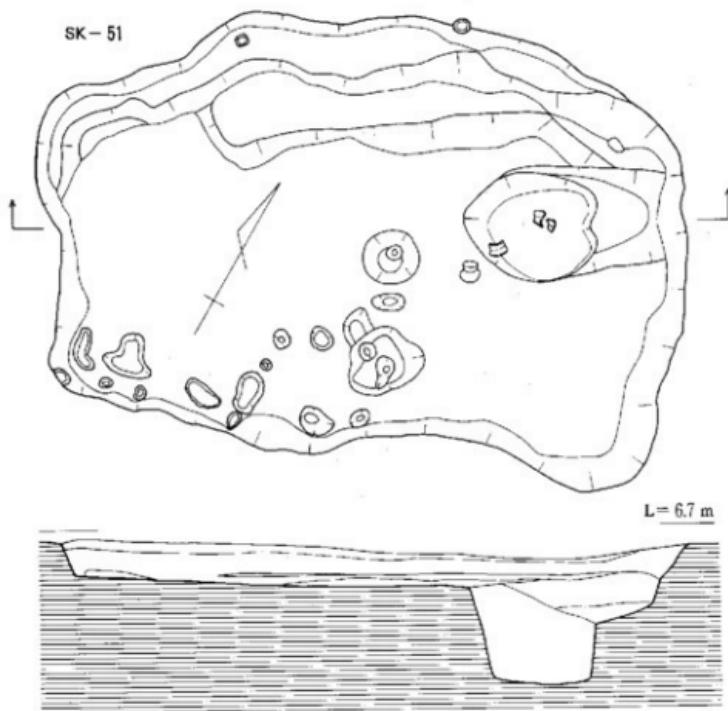
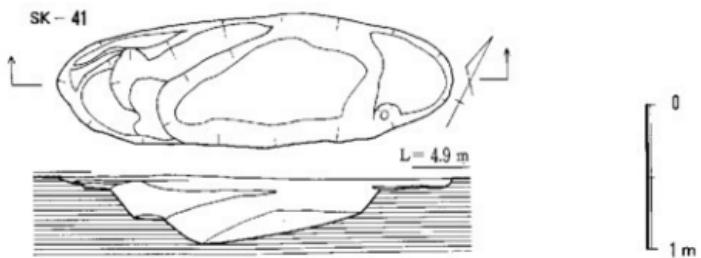


Fig.30 SK - 41、51 実測図 (1 / 40)

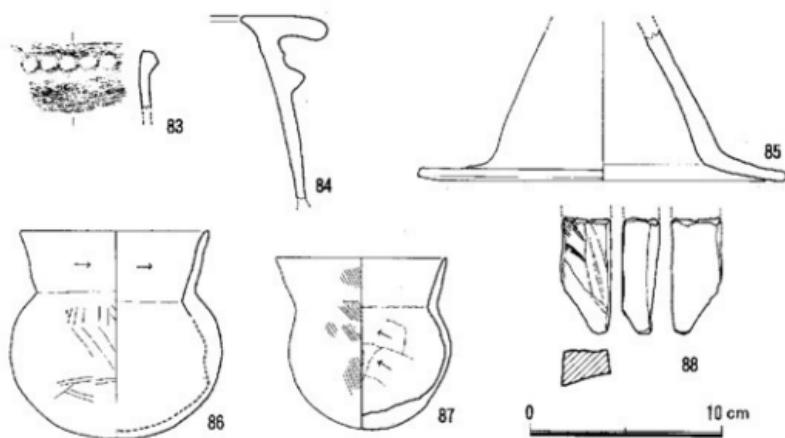


Fig. 31 SK-51 出土遺物実測図 (1 / 3)

ナデ、口縁部を横ナデ調整している。

88は砥石片である。方柱状をなし4面を使用しているが、うち一面が特に窪み、刃物で傷付けたような痕がある。上端を欠く。砂岩製である。

SK-53 Fig. 32 PL. 8

D区北西部で検出した南北に長い土坑である。プランは不整な楕円形を呈し、南北長4.8m、東西幅2.6m、深さ0.3mを測る。土師器甌の小片が出土したが、焼化できない。

SK-56 Fig. 32 PL. 8

D区中央部で検出した。周辺には木根の痕と思われる小ピットが集中しており、この土坑も倒木痕かもしれない。南北に長い隅丸方形プランを呈し、南端は試掘溝に切られている。南北長4.2m以上、東西幅2.6m、深さ0.2mを測る。土坑底面には小ピットがいくつかある。

SK-56出土遺物 Fig. 34 PL. 17

土師質の土器片約140点と須恵器片4点が出土した。土師質の土器には甌、壺、高壺、平底鉢などが、須恵器には壺や高壺と思われる細片などがある。4点を焼化した。

89は高壺で、脚を欠く。壺部は比較的深く、屈曲部に縫はない。口縁はやや外反気味に開く。口径14.2~14.5cm。胎土に砂粒を少量含み、橙色を呈し、焼成は良好である。外面縦位の刷毛目の後口縁部を横ナデ調整する。内面は器面が剥落しており、調整が不明である。90~92は朝

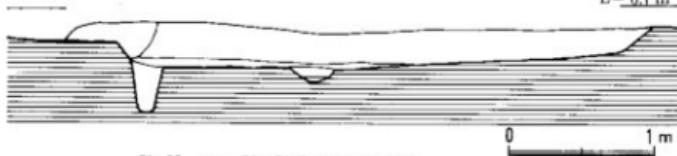
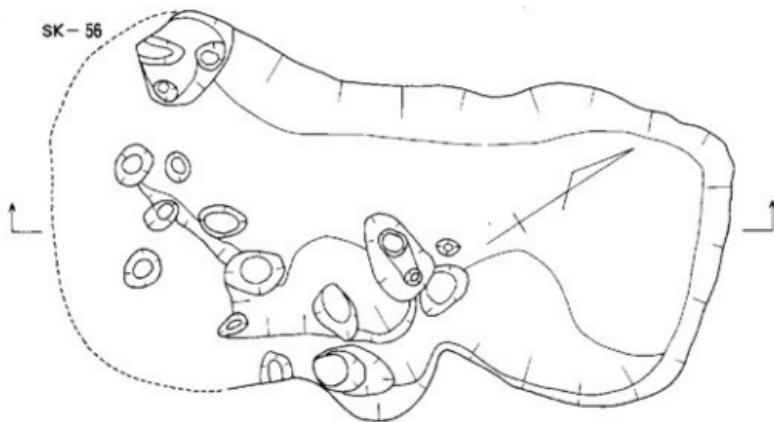
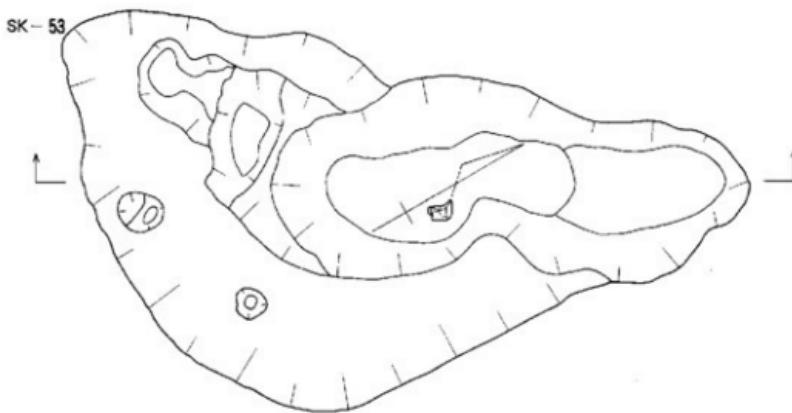


Fig.32 SK-53, 56 実測図 (1 / 40)

0 1 m

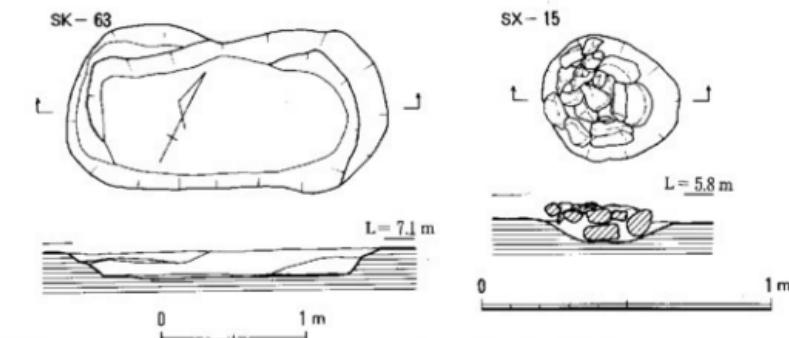


Fig.33 SK-63、SX-15 実測図 (1 / 40, 1 / 20)

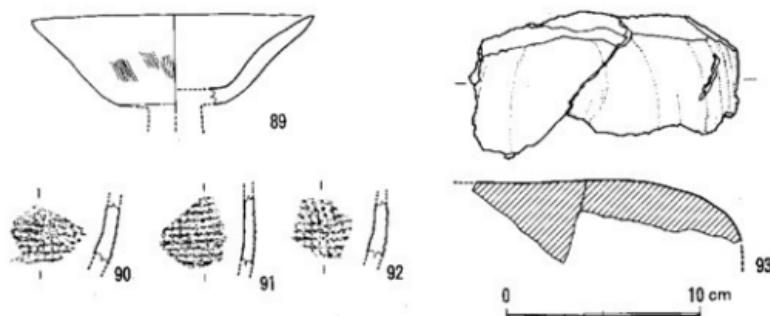


Fig.34 SK-56、SX-15 出土遺物実測図 (1 / 3)

鮮系の軟質土器で、同一個体である。胎上に砂粒、雲母粒を含み、内面橙色、外面黒褐～淡褐色を呈する。焼成は良好である。外面に格子タタキを施す。内面は器面剥落のため調整不明である。

SK-63 Fig. 33

E区南西隅に検出した東西に長い土坑で、梢円形プランを呈し、東西2.2m、南北1.1m、深さ0.2mを測る。土師器片9点、須恵器片4点が出土したが、小片のため図示できない。

SX-15 Fig. 33

A区北東隅に検出した小形の浅い土坑で、土坑内には礫が詰まっていた。礫は扁平なもの

と丸いものがあるが、焼けた形跡はない。覆土は暗黄褐色土で、炭化物を2～3点含む。

SX-15出土遺物 Fig.34 PL.17

小壺などの土師器片8点と砥石片1点がある。土師器は小片のため図示できない。93は砥石である。一面を残しており、磨かれて少し窪む。節理の入る安山岩系の石材を用いている。

(3) 溝状遺構と出土遺物

SD-30～34 Fig.35 PL.6

C区を中心に検出した細い溝である。周辺は中・近世の水田に伴う溝や足跡による擾乱が著しく、検出不可能な部分もあった。

地形に沿って南から北へ下りながら、5条の溝が合流する。いずれも幅0.3～0.8mで、断面U字形をなし、最深部で0.35mを測る。南から順に30～34の番号を付した。30はほとんど削平されているが、北へ向かい31に合流する。31は調査区南外から北東へ蛇行し、32に合流する。32はSC-60の壁溝から出て、東へ向かい33に合流する。33はSC-35を環状に囲む溝で、東側は中途で切れ、住居跡を一周したあと、北側はSC-35の北東約9mで近世の谷状落込みに切られている。34はSC-35の北壁からトンネル状をなして発し、北へ向かい33に合流する。

これらの溝は、その配置、覆土、出

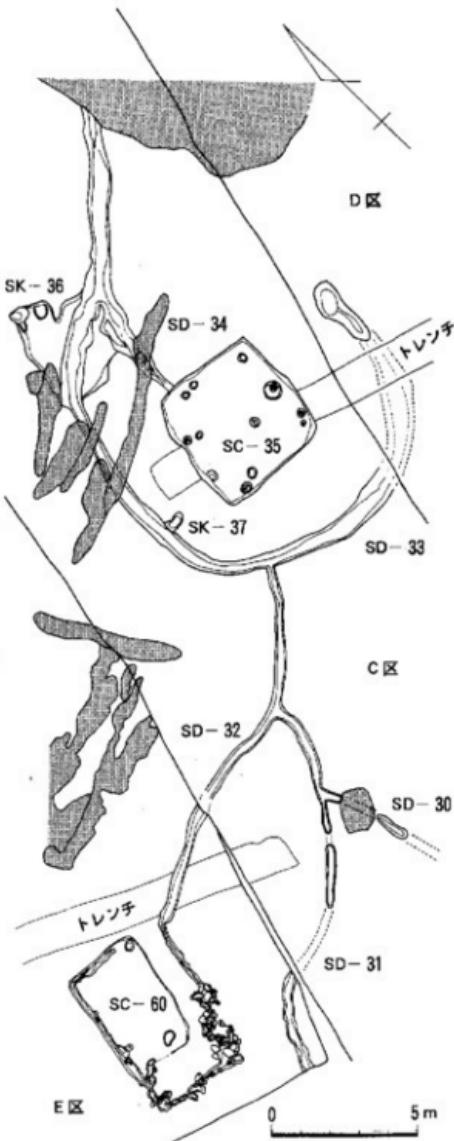


Fig.35 構状遺構 SD-30～34 実測図 (1 / 200)

土遺物から、SC-35、60と同時併存するものと考えられる。また、SD-30、31が更に南へ伸びていることから見て、調査区の南側にも住居跡の存在が予想される。

溝の性格は、住居跡から低い方へ流れ出していることから見て、排水を主目的としたものであろう。

溝の覆土は黒褐色の砂質土で、土師器を中心に多量の遺物を包含していた。

SD-30～34出土遺物 Fig. 36～39 PL. 17～20

出土遺物には土師器666点と須恵器24点がある。うち7割強がSD-33から出土したが、既に述べたように造構が中・近世の溝・足跡などに切られており、混入した遺物がある。

94～123は土師器、124、125は須恵器、126は陶質上器である。124、125は混入品である。

土師器には壺、壺、高坏、小形丸底壺がある。

94～99は壺形土器である。94は小形の壺の口縁部片で、頸部がくびれ、口縁は内湾して開き端部は尖る。復元口径11cm。胎土は精良で、径2～3mmの砂粒を少し含む。淡橙色を呈し、焼成は良好。胴部内面のヘラ削り以外は器面が剥落して調整不明。95も口縁が内湾して開き、端部は丸い。復元口径13cm。胎土に砂粒を含み、淡黄～褐色を呈し、焼成はやや不良で外面の一部に黒斑がある。器面が剥落して調整不明。96は頸部片で、屈曲部に稜を持つ。胎土に砂粒を含み、橙色を呈し、焼成は良好。内面のヘラ削り以外は調整不明。97は大型品の破片のため口径は不明。口縁はやや内湾気味に開き、端部を面取りする。胎土に多量の砂粒と雲母粒を含み、暗橙色を呈し、焼成は良好。胴部内面のヘラ削り以外は調整不明である。98はなで肩の球形胴部に短く直線的に開く口縁部がつく。器形がかなりいびつである。口縁内端を肥厚させ段をつくる。口径14.8cmを測る。胎土に砂粒を多量に含み、内面淡褐～褐色、外面淡橙～黒褐色を呈し、焼成は良好である。胴部内面ヘラ削り、外面の一部に刷毛目を認めるが、他は調整が不明である。99は胴部がやや肩の張る縦に長い球形をなし、口縁部を欠く。胎土に径2～3mmの砂粒を多量に含み、内面暗橙色、外面暗橙～淡橙色を呈し、焼成は良好で胴外面に黒斑がある。胴部内面ヘラ削り、外面は上位が横、下位が縦の刷毛目である以外は調整不明である。

100、101は壺形上器である。100はなで肩の球形胴部に、外に開く口縁を付けたもので、口縁端部は面取りする。胴部の中位よりやや下に断面三角形の突帯を貼付する。復元口径17.9cm、突帶上で復元胴径28.6cmを測る。胎土に小さな砂粒を多量、径5mm前後の砂を少量含む。内面淡橙褐色、外面淡橙～淡灰色を呈し、焼成は良好で胴外面に黒斑がある。胴部内面をヘラ削りの後頸部直下をナデ、胴部外面に僅かに縦位の刷毛目が残り、それ以外は調整不明である。101はやや長めの口縁で、直線的に開く。復元口径16.9cmを測る。胎土に砂粒を含み、橙色を呈し、焼成良好。調整は不明である。

102～117は高坏である。102～104は坏口縁部が強く屈曲して立ちあがり、坏底部との境に穢

を持つ一群である。102は図面上の光形である。坏部はやや浅く、口縁は少し外反気味に開き端部は丸い。脚は裾部が屈曲して短く開き、筒部は中位以上が中実である。復元法量は、口径18.6cm、器高12.5cm、底径10.8cmである。胎土に砂粒を含み、風化して乳白色を呈し、焼成は良好である。脚を坏部に貼り付けて接合している。調整は不明である。103は坏部の口縁端を欠く。脚裾は外窺しながら開き端部は丸くおさめる。脚の復元底径は11.2cmを測る。胎土に砂粒を含み、淡橙～淡黒褐色を呈し、焼成は良好。坏底部に突起をつくり、脚に差し込んで接合している。脚筒部内面にシボリ痕とヘラ削りが見られる他は調整不明である。104は坏部が他より深い。口縁は若干外反して開き端部は尖り気味に丸い。脚はゆるく屈曲して開き、内面の稜で筒部と裾部を分ける。脚の中位に3方から透孔を入れる。口縁がゆがみ、復元口径21cm、器高13.7～14.9cm、復元底径15.3cmを測る。胎土に小さな砂粒を含み、淡橙～淡褐色を呈し、焼成はやや不良である。脚を坏底に差し込んで接合している。脚筒内面はシボリ痕をヘラ削りしているが、他は調整不明である。105～108は坏部の屈曲がゆるく、はっきりした稜を形成しない一群である。いずれも坏部のみの残欠である。105は坏底が丸く、口縁は外反して開く。口径18.2cm。胎土に砂粒を含み、橙～淡橙色を呈し、焼成は良好で外面に黒斑がある。接合は脚の差しみみか。内面に刷毛目が僅かに残る他は調整不明。106は屈曲部外面に段の痕跡を残し、口縁がほぼまっすぐ開く。復元口径17.2cm。胎土に砂粒、雲母粒を含み、淡橙色を呈し、焼成良好。接合は坏底の突起に脚を貼り、粘土で補強したものか。調整は不明である。107は平らな坏底に外反して開く口縁部が付き、端部は丸い。口径は18.3cm。胎土に砂粒を含み、褐～淡橙色を呈し、焼成は不良で、坏部内面は焼されて褐色である。脚を坏底に貼り付け粘土で補強して接合している。坏部内面は丁寧なナデ調整で、外面は調整不明である。108は口縁端を欠く。坏部内底は平たい。胎土に砂粒を含み、内面淡褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。脚部を坏底に貼り付け、粘土で補強して接合する。調整不明。109は坏底が小さく、口縁が大きく直線的に開くもので、口径は17.8～18cmを測る。胎土に砂粒を含み、乳白色を呈する。焼成は良好で、口縁の一部に黒斑がある。脚を坏底部に貼り、粘土で補強して接合している。器面が全面剥げ落ちている。110は坏部が内窺して開き、坏底部と口縁部の境が不明瞭である。口径は19.3cmを測る。胎土に砂粒を少量含み、淡橙色を呈し、焼成は良好。接合は脚の差しみみで、中空の脚が坏内底まで突き抜けている。全ての器面が剥落しているが、坏部内面に僅かに赤色顔料が認められ、おそらく内外面にわたって丹塗りを施したものであろう。また、脚筒内面にシボリ痕とヘラ削りが見られる。111～117は脚部片である。111、112は脚筒が直線的に下方へ広がり、脚裾が強く屈曲して開くものである。111は底径13cm。胎土に砂粒を含み、淡橙色を呈し、焼成は良好。脚筒内面にシボリ痕が残るが、他は調整不明。112は下端部を欠く。胎土に砂粒と雲母粒を少量含み、内面淡褐色、外面淡橙色を呈し、焼成は不良である。器

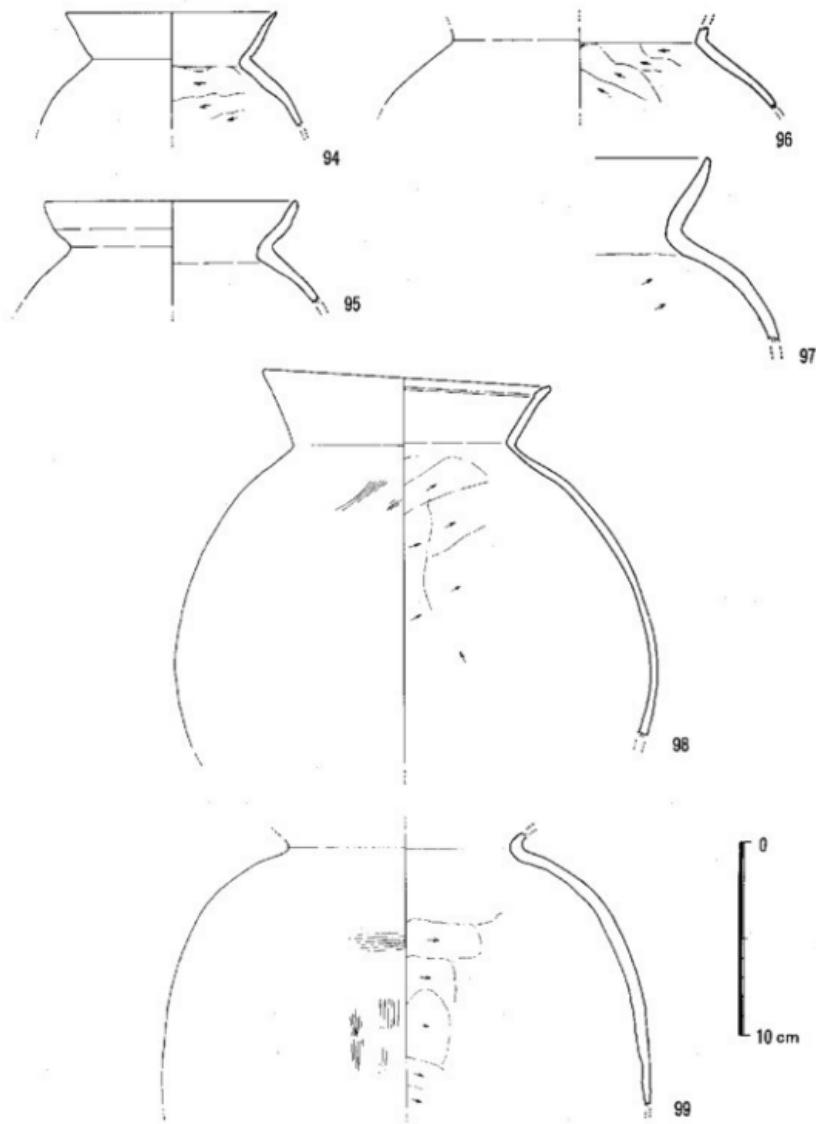


Fig.36 SD-30~34 出土遺物実測図・I (1 / 3)

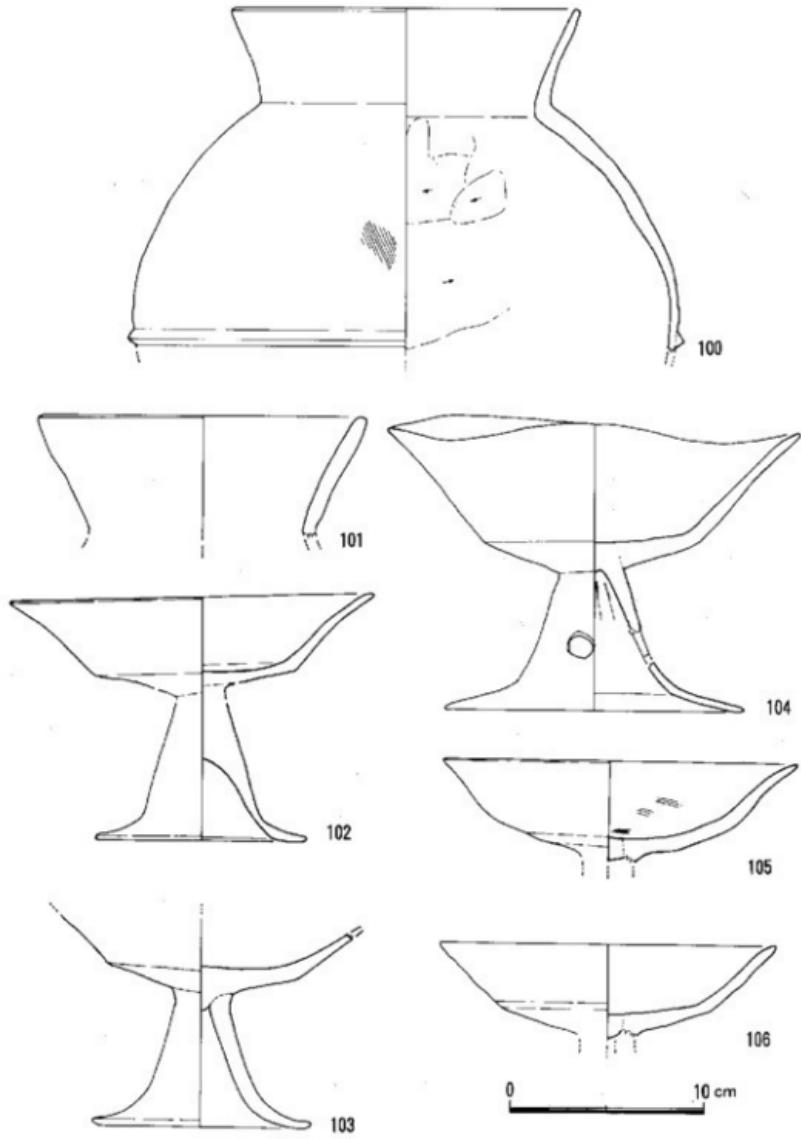


Fig.37 SD-30~34 出土遺物実測図・II (1/3)

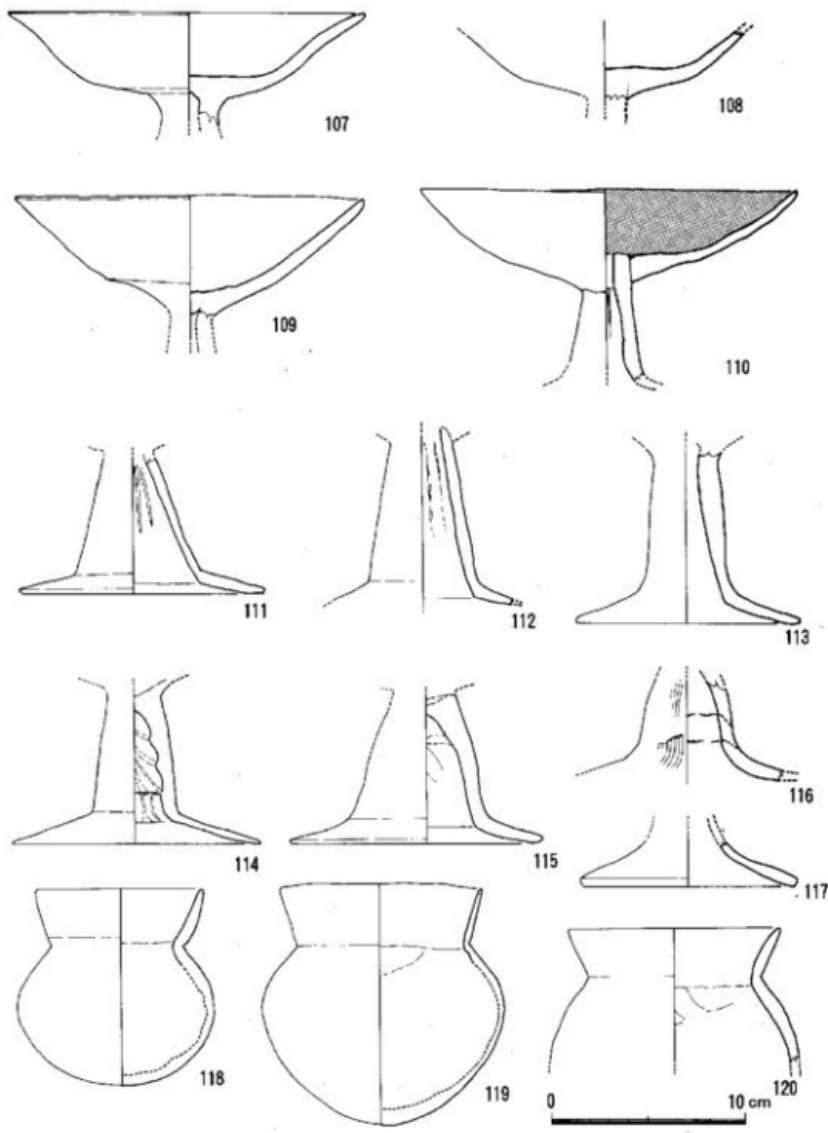


Fig.38 SD-30~34 出土遺物実測図・III (1 / 3)

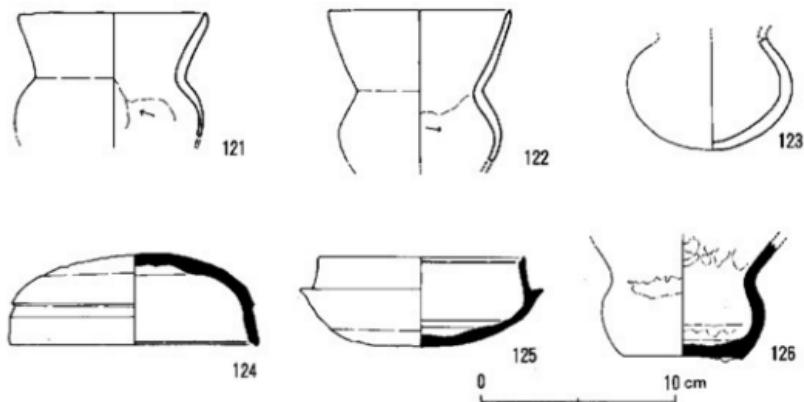


Fig. 39 SD-30 ~ 34 出土遺物実測図・IV (1 / 3)

面が剥落しているが、脚筒内面にヘラ削りを施している。113、114は脚筒が細身で棒状を呈するものである。脚裾は強く屈曲してラッパ状に開く。113は復元底径12.1cmで、胎土に砂粒を含み、橙～淡橙色を呈し、焼成は良好である。調整は不明である。114は復元底径12.7cmで、胎土に砂粒を含み、焼成は不良で脚筒内面がいぶされて黒色を呈する。环底の突起に脚を貼り付けて接合するものである。全ての器面が剥落しているが、脚筒内面にらせん状にヘラ削りした痕が残る。115、116は脚筒が中位で膨らみながら開くものである。115は復元底径13cmで、胎土に砂粒を含み、淡橙～乳白色を呈し、焼成は良好である。脚筒内面にヘラ削りが残るが、他は調整不明である。116は脚下端部を欠く。胎土に砂粒を含み、暗橙色を呈し、焼成はやや不良である。脚筒内面に粘土帯の積み上げの痕跡を残し、外面には縦位に刷毛目を加える。117は脚下端部の破片であろう。底径10.8～11.2cmを測る。胎土に砂粒・雲母粒を含み、淡橙色を呈し、焼成は良好。調整は不明である。

118～123は小形丸底壺である。球形の胴部に外に開く口縁部がつく。118は口縁がやや内湾気味に開く。口縁部を少し欠くがほぼ完存している。口径8.3cm、器高10.2cm、胴部最大径は中位にあり10.1cmを測る。胎土に砂粒を含み、焼成は不良で全面が燃されて灰褐～黒褐色を呈する。胴部内面をヘラ削りした後ナデている以外は調整不明である。119は薄手のつくりで、胴部は肩が張る。完品である。口径10.2～10.4cm、器高12.6cm、胴部最大径12.5cmを測る。胎土に砂粒、雲母粒を含み、淡赤色を呈し、焼成が不良で胴部外面の相対する2ヶ所に黒斑がある。胴部内面のヘラ削り以外は調整不明である。120は胴部がなで肩である。復元口径20cmを測る。胎土に砂粒を含み、橙色を呈し、焼成は良好で外面に黒斑がある。胴部内面のヘラ削り

以外は調整が不明である。121は口径と胴径がほぼ等しい。口径9.7cmを測る。胎土に砂粒を含み、橙～淡橙色を呈し、焼成は良好で外面に黒斑がある。胴内面に僅かにヘラ削りの痕跡が残る以外は調整不明である。122は口縁が長く内湾気味に伸び、口径が胴径を上回る。復元口径9.4cmを測る。胎土に砂粒を含み、内面淡褐色、外面淡橙～灰褐色を呈し、焼成はやや不良である。胴内面のヘラ削り以外は調整不明である。123は口縁部を欠く。胴部がやや扁平な球形をなし、最大径は8.5cmを測る。胎土は精良で、赤褐色を呈し、焼成は良好で外面に黒斑がある。調整は不明である。

124、125は須恵器蓋坏で、攢乱溝からの混入品と思われる。124は蓋で、天井部は丸く、口縁部と体部の境にやや丸い稜があり、口縁端部に内傾する段を持つ。口径12.6cm、器高4.7cmを測る。胎土には径2～3mmの砂を少量含み、淡い灰青色を呈し、焼成は良好である。天井部の約2/3の範囲にヘラ削りを加える。成形とヘラ削りのロクロ回転は天井部から見て時計回りである。125は坏身で、体部は丸い。蓋受けのかえりはやや丸く、内端が少し窪む。口縁部は内傾外反気味に伸び、端部を窪ませて内傾する段をつくる。口縁部の大半を欠き、復元口径10.7cm、器高4.6cmを測る。胎土は124の蓋と同じで、色調はやや黒っぽい。焼成は良好。体部の約1/2の範囲にヘラ削りを加えており、ロクロ回転は底から見て時計回りである。

126は陶質土器で平底の小形壺であろうか。口縁部の大半を欠く。安定のよい平底の扁平な体部で、頸がさほど締まらず大きく開く口縁部がつく。底径6.2cm、胴径8.2cmを測る。胎土は精良で、内面淡青～淡灰青色、外面黒～灰～淡灰色を呈する。焼成は良好で、外面に炭素が吸着している。また上方から緑黒色の自然釉をかぶり、口縁内面、内底面、肩部外面に釉が特に厚かかる。外底には砂粒が融着している。ロクロ成形で、外底面はナデ調整している。

(4) 掘立柱建物

掘立柱建物は16棟検出した。ピット群はA区からB区にかけて特に密集しており、掘立柱建物としてまとめきれなかったものも多い。また結果としてかなりいびつな建物となったものもあるが、ここではそれらはひとつの可能性を示すものとして提示した。

柱穴の覆土は、上層の包含層が落ち込んだ深い黒色を呈するものと、黒褐色を呈するもの、地山土が汚れて暗黄褐色を呈するものがある。当初、これが時期差を示すものと考えたが、竪穴住居跡SC-01の覆土の観察によると、下層に黒褐色土、上層に深黒色土が堆積しており、両者は短い間に変化していることが分かる。また、掘立柱建物の柱穴を含めピット群には土師器を出土するもののが多かったが、Fig.49-131,133などの古代末から中世始めにかけての遺物を含むものもある。遺構検出面を覆う包含層には土師器が特に多く含まれており、これが混入した柱穴が多数あると考えられ、出土遺物に掘立柱建物の時期を求めるることは危険であろう。

SB-03 Fig.40 PL.9

A区北端部に検出した。建物はさらに北へ延びており、主要部分は調査区外にある。当初は4間×3間以上の建物としたが、側柱で囲まれた内側に側柱と同じ土質の覆土のピット2個が存在するため、身舎部分が2間×2間以上で、東西に庇を持つ建物に復元した。身舎は東西全長293cmを測る。南北の柱間は東西に比べて長い。主軸方位はN-40°-Eにとる。柱穴の平面形は円、楕円、隅丸方形のものがあり、その径は60~120cm、深さは36~71cmを測る。柱痕跡を持つものが3個あり、そのプランは円形で、径は21~23cmである。この建物に関わる11個の柱穴の覆土は黒色土と明黄褐色粘質土（地山土）が混ざったもので、明らかに周辺の他のピットと異なっており区別できる。柱穴からは土師器片が少量出土したが、図示できるものはない。また、建物の南側には2条の浅い雨落ち溝状の窪みが建物に並行して掘られており、その東西両端は建物を囲むように北へ屈曲して終わっている。内側の窪みは狭く幅0.25~0.3m、外側の窪みは広く最大幅約1.5mで、ともに深さは0.1m前後である。これらは位置関係から見て、建物に伴うものと思われる。覆土は黒色土で、土師器73点、須恵器1点が出土したが、いずれも小片であり、図化できるものはない。

この建物は溝状の窪みから出土した上器から見て古墳時代に属するものと考えられる。

SB-16 Fig.40 PL.9

A区南西部に検出した3間×2間以上の建物である。西側は調査区の外へ延びている。南北長540cmを測る。主軸方位はN-30°-Eにとる。柱穴は平面凸形で、径19~35cm、深さ10~33cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から土師器小片が3点出土したが図示できるものはない。

SB-17 Fig.40 PL.9

SB-16の南側に1mの間をおいてこれと並行に建つ3間×3間以上の建物である。西側は調査区外に伸展する。南北全長480cmを測る。主軸方位はN-34°-Eにとる。柱穴は平面円形で、径17~54cm、深さ6~22cmを測る。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-18 Fig.41 PL.9

A区北西部に検出した桁行2間、梁行1間の南北に長い建物である。桁行全長428cm、梁行長303cmを測る。桁行方位はN-23°-Eにとる。柱穴は平面円形のものと隅丸方形のものがある。径は25~54cm、深さ11~27cmを測る。柱痕跡はない。土器の細片が出土した。

SB-19 Fig.41 PL.9

SB-18と重なる。柱穴の切り合いから、SB-18より古い。桁行3間、梁行2間の南北に長い建物で、桁行全長552cm、梁行全長332cmを測る。桁行方位は磁化にとる。柱穴のプランは円ないし不整な椭円形を呈し、径24~83cm、深さ6~26cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から土器の細片が3点出土したが図示できるものはない。

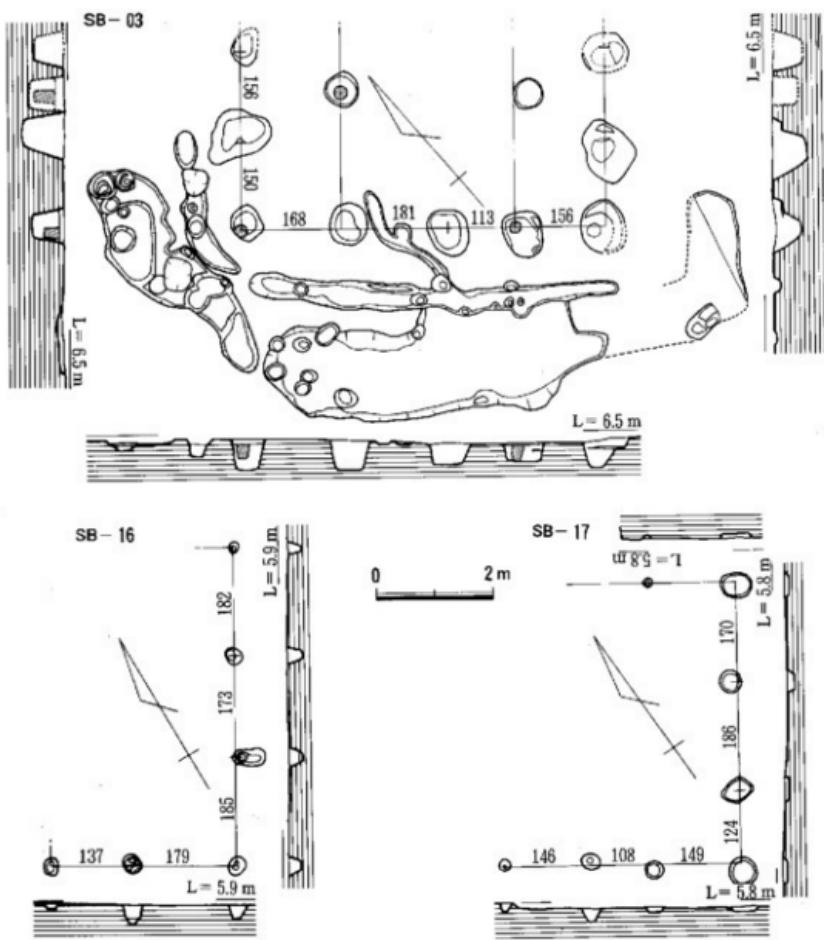


Fig.40 据立柱建物実測図・I (1 / 100)

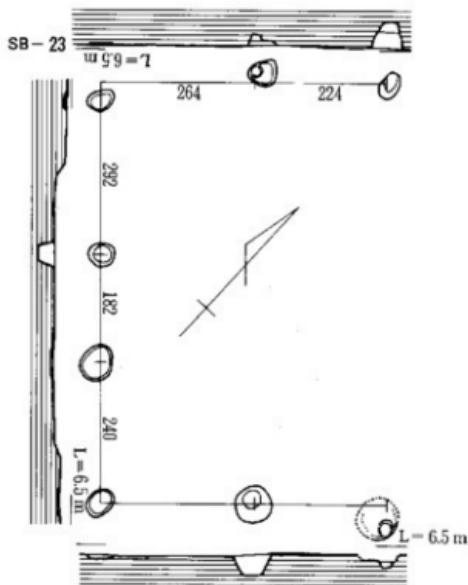
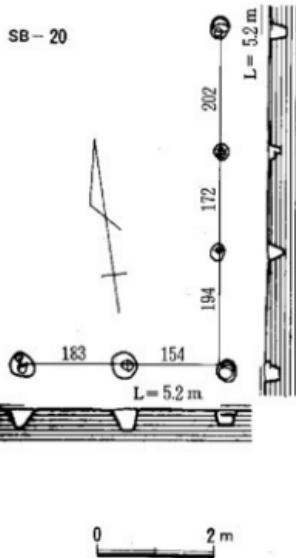
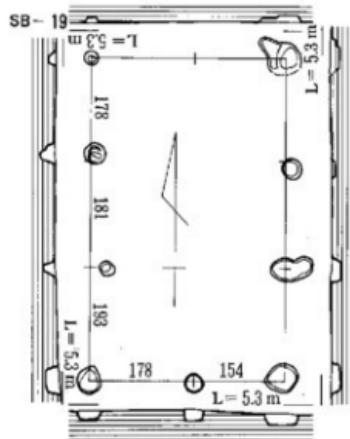
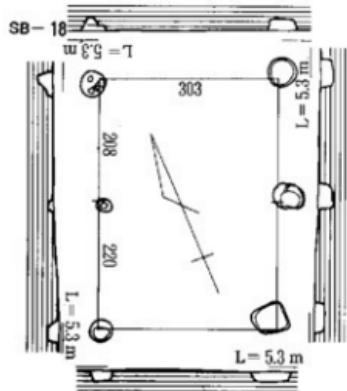


Fig.41 拼立柱建物実測図・II (1 / 100)

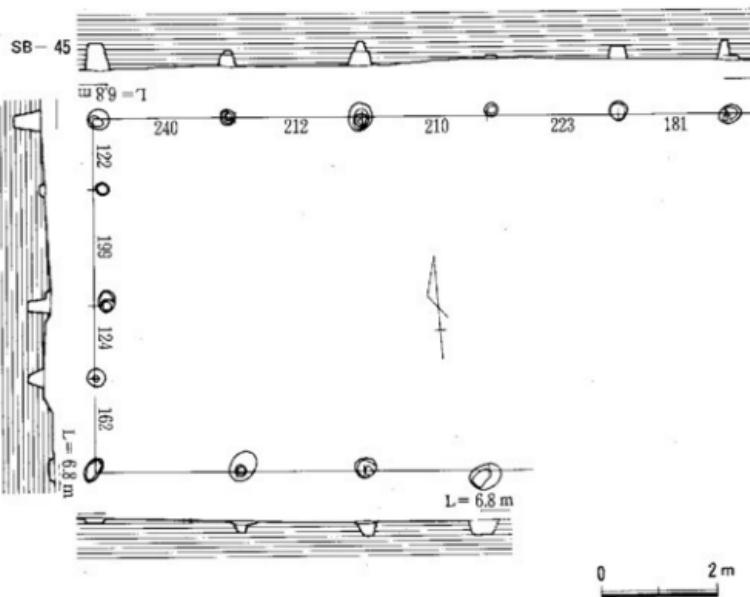
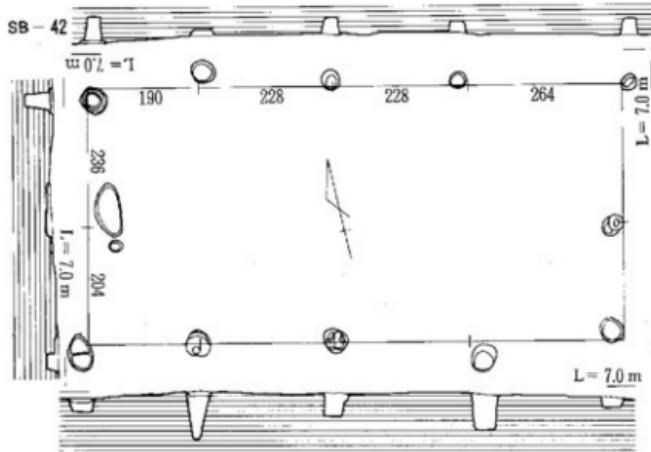


Fig.42 据立柱建物実測図・III (1 / 100)

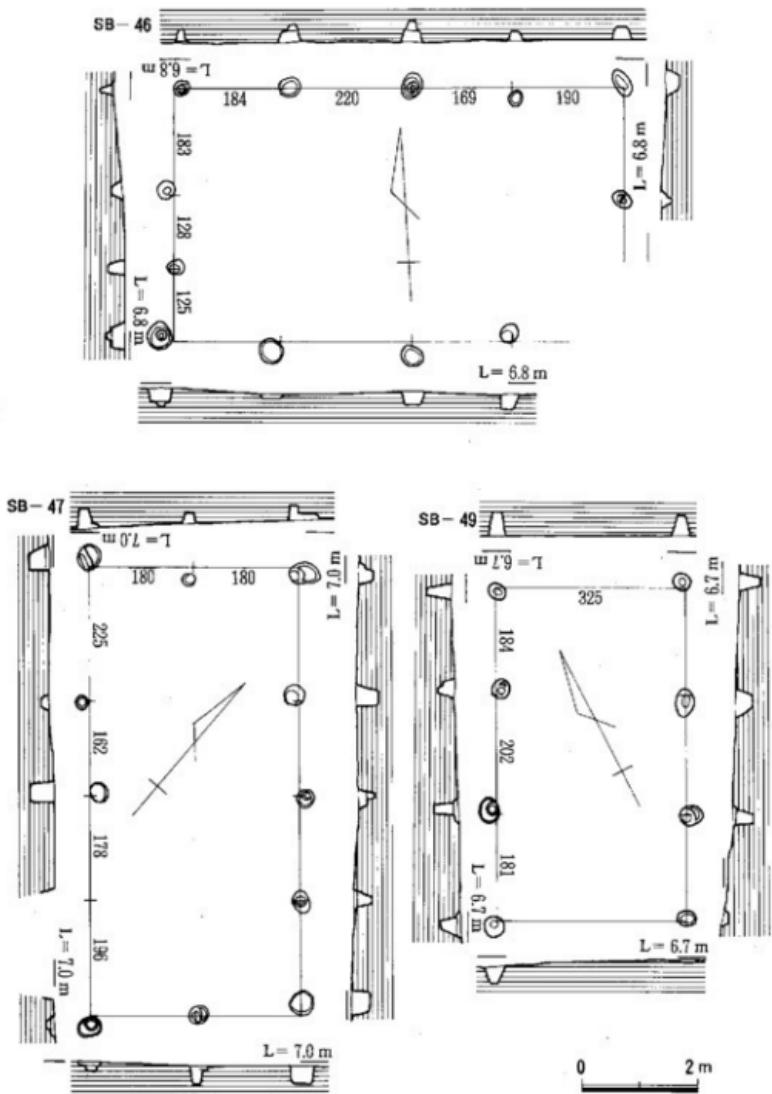


Fig.43 据立柱建物実測図・IV (1 / 100)

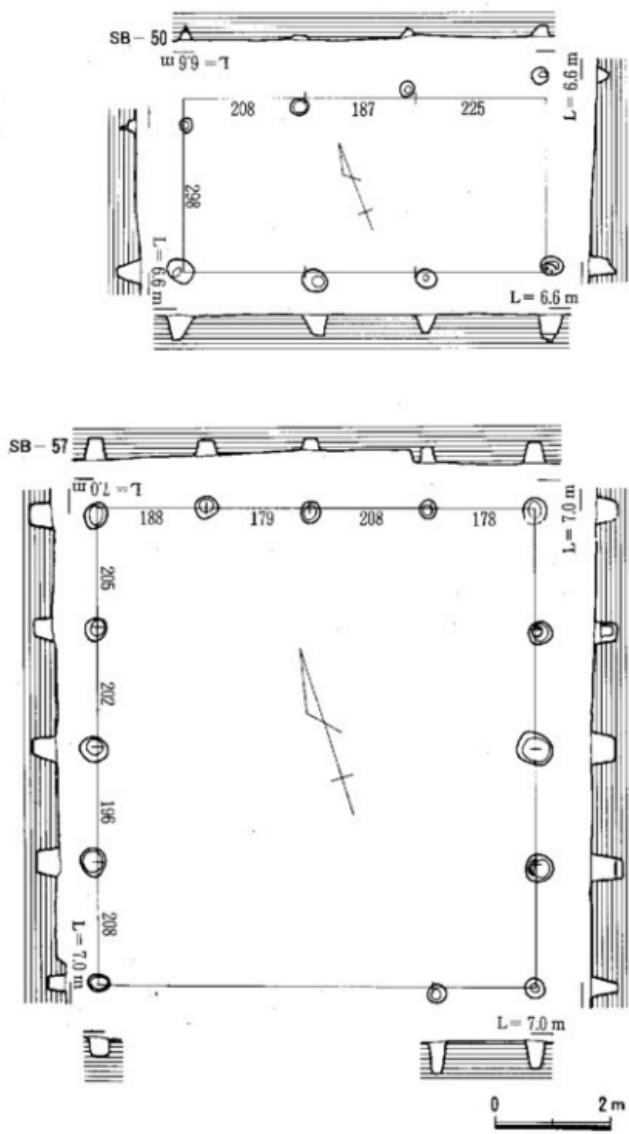


Fig.44 挖立柱建物実測図・V (1 / 100)

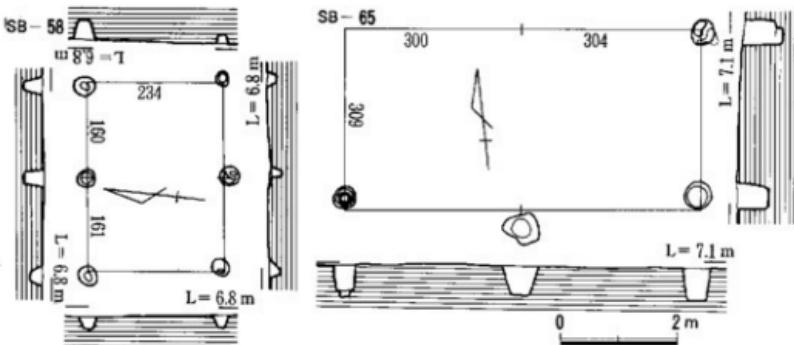


Fig.45 捏立柱建物実測図・VI (1 / 100)

SB-20 Fig. 41

SB-19の北隣でその一部を検出した。調査区内で3間以上×2間以上だが、中心部分は調査区外にある。主軸方位はN-8°-Eにとる。柱穴は平面円形で、径26~44cm、深さ21~35cmを測る。柱痕跡はない。柱穴の覆土は包含層と同じ深黒色土で、土器の細片が出土した。

SB-23 Fig. 41

SB-03と重複する。この建物の柱穴がSB-03の柱穴及びこれに伴う溝状の窪みを切っている。調査区内で3間×2間以上で、北側は調査区の外に及ぶ。東西全長714cmを測る。主軸方位はN-47°-Eにとる。柱穴は平面円形ないし梢円形で、径47~63cm、深さ4~45cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から土師器片が5点出土したが、図化できるものはない。

SB-42 Fig. 42 Pl. 9

B区南端部で検出した。土坑SK-40の南側にこれと並行に建つ。桁行4間、梁行2間の東西に長い建物で、桁行全長910cm、梁行全長440cmを測る。桁行方位はN-77°-Eにとる。柱穴の平面形は円形のものと楕円形のものがあり、円形のものの径は28~48cmである。深さは10~80cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から古墳時代の土師器甕形土器の破片などが出土したが、図化できるものはない。

SB-45 Fig. 42

SB-42、46、49と重なる。SB-49と柱穴が切り合うが、柱穴と建物の対応関係が明確でなく、建物の先後関係は判別できない。桁行5間以上、梁行4間の東西に長い建物で、梁行全長607cmを測る。桁行方位はN-85°30'-Wにとる。柱穴のプランは円ないし楕円形を呈し、径24~55cm、深さ6~47cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から高环脚部などの土師器片が出土した。

が図化できるものはない。

SB-46 Fig .43

SB-45と重なる。桁行4間、梁行3間の東西に長い建物である。桁行全長763cm、梁行全長436cmを測る。桁行方位はN-87°-Wにとる。柱穴のプランは円ないし楕円形を呈し、径28~49cm、深さ9~38cmを測る。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-47 Fig .43

SB-42と一部が重複する。桁行4間、梁行2間の南北に長い建物である。トレンチで柱穴1個を失う。桁行全長761cm、梁行全長360cmを測る。桁行方位はN-41°-Wにとる。柱穴は平面円形で、径23~42cm、深さ14~44cmを測る。柱痕跡はない。柱穴から土師器の小片が出土したが図化できない。

SB-49 Fig .43

SB-45と柱穴が切り合うが先後関係は不明である。桁行3間、梁行1間の南北に長い建物で、桁行全長567cm、梁行長325cmである。桁行方位はN-27°-Eにとる。柱穴は平面円形ないし楕円形で、径31~48cm、深さ14~42cmを測る。柱痕跡はない。柱穴からは遺物が出土しなかった。

SB-50 Fig .44

B区西側中央部に検出した。SB-49と約1m離れている。ややいびつであるが、桁行3間、梁行1間の東西に長い建物で、桁行全長620cm、梁行長298cmを測る。桁行方位はN-68°-Wにとる。柱穴は平面円形で、径は24~45cm、深さ7~47cmを測る。柱痕跡はない。柱穴からの出土遺物はない。

SB-57 Fig .44 PL.9

当初B区内で東側柱列を検出し、これから東側に展開する建物と考えた(SB-43と呼称)が、その後D区を調査して西側に展開する建物であることが分かった。4間×4間のやや南北に長い建物で、建物の南側は一部調査区外に及ぶ。南北全長811cm、東西全長753cmを測る。主軸方位はN-18°-Eにとる。柱穴のプランは円形を呈し、径32~61cm、深さ20~55cmを測る。柱痕跡を持つ柱穴がひとつあり、プランは円形で、径18cmを測る。柱穴からは遺物が出土しなかった。

SB-58 Fig .45 PL.10

D区西端部に検出した桁行2間、梁行1間の東西に長い建物である。桁行全長321cm、梁行長234cmを測る。桁行方位はN-84°-Eにとる。柱穴のプランは円形を呈し、径25~36cm、深さ16~35cmを測る。柱痕跡はない。出土遺物はない。

SB-65 Fig .45 PL.10

E区西端部に検出した桁行2間、梁行1間の東西に長い建物である。桁行全長604cm、梁行長309cmを測る。桁行方位はN-84°-Wにとる。柱穴のプランは円もしくは不整な円形を呈し、径40~64cm、深さ50~68cmを測る。柱痕跡はない。出土遺物はない。

(5) 水田遺構

水田跡 Fig.12・46・48 PL.10・11

水田跡はB区からD区東側にかけて良好に遺存していた。B区の東に10m離れたA区では、水田が埋没する際の強烈な水流によって表面が削られていくつもの溝ができており、畦畔が残っていない。また、D区では地形がゆるやかに西へ向って上っており、水田跡の西側は削平されて残っていない。また遺構検出の際、D区の南東隅部の水田面を誤って削り過ぎた。

水田跡は砂層によって全面が厚く覆われていた。砂層は最も厚い部分で深さ0.5m以上に及ぶ。砂は南から北へ向かう水流によって運ばれ、水流は所によって水田面を削り、深い窪みを形成している。

水田跡は南から北へ下る地形に合わせて、深黒色の粘質土を段状に造成して作られており、畦畔は削り出して形成している。畦畔の残りは南側ほど良好で、畦畔の方向は磁北から47°東へ向き、現在の水田区画の方向に近い。水田耕作土は灰褐色のシルトで、南北部の水田に薄く残っていた。また、一部ではこのシルトを盛り上げて畦畔の修復をしている。(Fig.12)

水田は13筆検出できた。ただし、南北の境は段によって明確であるが、東西の境となる畦畔が埋没時の水流によってほとんど残っていないため明確な数字ではなく、特に北側の水田は東西に細分されていた可能性がある。一筆ごとの面積がわかるものは水田3・4・6・7・8・10で、それぞれ48m²・58m²・82m²・63m²・47m²・77m²である。畦畔は所々埋没の際に水流で削

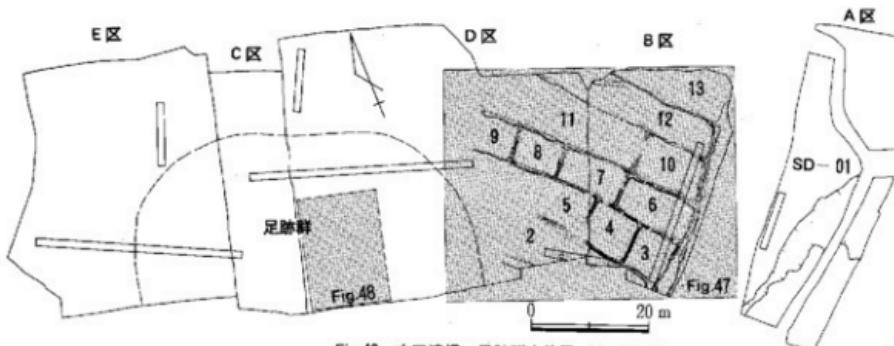
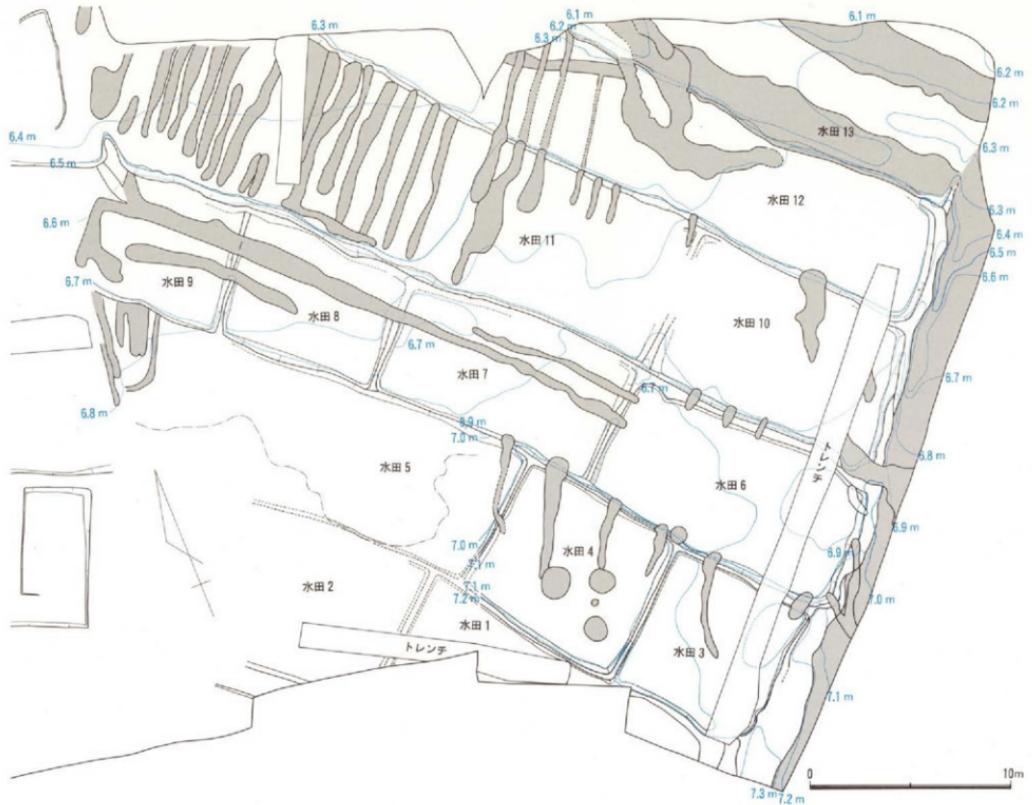


Fig.46 水田遺構・足跡群全体図 (1 / 1,000)



られているが、明確な水路、水口、水落は確認できず、畦畔越しに給排水していた可能性がある。また水田3・4で足跡を検出したが、残りが悪く判別できないため図化していない。

これらの水田は基盤土である深黒色粘質土やこれに掘り込まれたピットに含まれる遺物(Fig.49-131~135)から、13世紀初頭以降に造営されたものと考えられるが、水田を覆う砂層中からは埋没時期を示す遺物が出土せず、その廃絶時期については明確にしがたい。

足跡群 Fig.46・48 PL.11

地形が高まり、水田面が残っていないD区以西では、多数の足跡が検出された。特にD区南西、C区北半、E区南東にかけて集中しており、ヒトやウシのものと見られる足跡が幾重にも踏み込まれている。また、D区南西部では深黒色土の上面と下面で足跡が検出され、上面では足跡が幅2mに疎らな部分があり、畦畔を示すものであろう(Fig.48)。またこれらの足跡は覆土が黒色土で、中世のものと思われるが、C区北半部からE区にかけての足跡の中には近世の遺物が出土するものがあり、それらの覆土は灰褐色土であった。さらにC区北端部に検出した谷状の落ち込みは、近世水田の造営時に作られたものと思われる。

(6) その他の出土遺物

Fig.49は包含層、ピットなどから出土した遺物である。このうち131~135は水田造構の造営時期の上限を示すものである。

127、128は縄文土器である。127は口縁部、128は胴部の破片で、同一個体である可能性が高い。平底の深鉢の一部であろう。ともに胎土に砂粒と多量の滑石粒を含み、黒褐～暗赤色を呈し、焼成は良好である。外面に幅1cm弱の凹線文を施し、内面は指頭痕をナデ消している。127はA区包含層、128は同区ピットから出土した。同様の上器が他に6点あるが、それらには文様がない。縄文時代中～後期の阿高式系土器である。

129、130は陶質土器である。129は高环の蓋で、つまみの部分が欠けている。天井部が低く扁平で、体部と口縁部の境に高く突出する稜がある。口縁は外方へ開き、端部に外傾する面をつくる。口径14.6~14.9cmを測る。胎土は精良で、内面灰褐色、外面灰黑色を呈する。焼成は良好で、内面に自然釉を被る。ロクロ回転は天井部から見て逆時計回りで、天井部に一単位5条の櫛状施文具による列点文を2列に施す。D区南西部の包含層から出土した。130は壺である。やや肩の張る球形の胴部に直立する口縁部が付く。口縁端部は面取りされ、内傾する段をなす。復元口径7.6cmを測る。胎土に微小な砂粒を含み、内面淡灰色、外面灰色を呈する。焼成は良好で、外面に自然釉をかぶり、肩部に特に釉が厚い。胴内面にロクロ目を残し、内底面はヘラ先で整形している。胴部外面は上半に細かいカキ目、下半に粗いカキ目を施し、底部はナデ調整である。外面の調整は雑な感じを与える。C区北端の近世谷状落ち込みから出土して



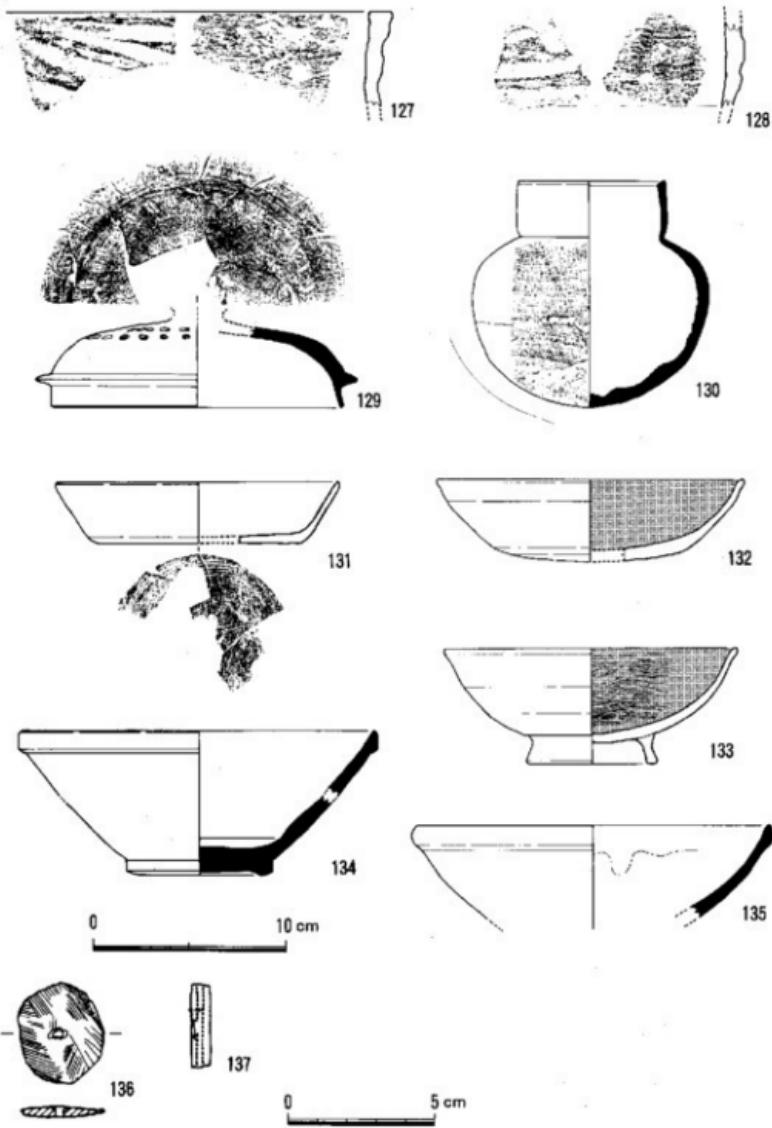


Fig.49 その他の出土遺物実測図 (136、137は1/2、他は1/3)

おり、SD-33から転落したものである可能性が高い。

131～135は古代末から中世にかけての土器である。131、133は掘立柱建物としてまとまらないA区ピットから、他の3点はA区包含層から出土した。131は土師質土器壺である。口縁部はやや外反して開くが、器形の歪みがある。復元口径14.6cm、同底径10.6cm、器高2.8～3.15cmを測る。胎土は精良で雲母粒を含み、橙褐色を呈し、焼成は良好である。内底面をナデ調整しており、外底面には糸切離し痕と板目圧痕がある。132は黒色土器の丸底壺である。底部を欠く。口径15.8cm、器高は4.2cmほどであろう。胎土は精良で、雲母粒を含む。焼成は良好で、内面を燻して黒色にする。外面は橙色を呈する。ロクロ成形で、内底面をナデ調整する。133は黒色土器碗である。復元口径15cm、高台径6.6cm、器高5.8cmを測る。胎土は精良で、雲母粒を含む。焼成は良好で、内面は燻されて黒色、外面は淡橙色を呈する。ロクロ成形の後、高台を貼り付けており、内面はやや難なハラ磨きを施す。134、135は玉縁口縁をもつ白磁碗である。ともにA区の砂層、包含層から出土した。134は口縁と底部が接合しないが同一個体であろう。口縁は直線的に開き、見込みに沈圧線を入れる。復元口径18.4cm、高台径7.5cmを測る。胎土は淡緑色で砂粒を少量含んでいる。焼成は良好。胴部中位以下を削り、高台を作り出す。高台は露胎である。135は口縁部で、やや内湾して開き、復元口径18.4cmを測る。胎土は淡緑灰色で黒色の鉱物を含む。焼成は良好。全面に釉薬がかかる。131～135の遺物は量的に少なく、年代幅もあるが、おおむね11世紀中頃～13世紀初頭に位置づけられるもので、水田遺構の開始時期はこれ以降に求められよう。

136、137は石製品である。136は扁平な円盤状の石製品で、梢円形の中央に1孔を穿つ。表裏に擦痕がある。石材は滑石だが、風化して緑黒色を呈する。A区表土から出土した。137は管玉である。長2.9cm、径0.65cmの石棒に穿孔しているが、棒の中途で孔が外へ抜けてしまっている。表面には面取りした後研磨した痕が明瞭に残っており、あるいは未製品か。石材は風化して明瞭でないが、滑石と思われる。D区表土から出土した。

V. おわりに

大塚遺跡

調査区は開田時に著しく削平され遺構の残りが懐かたが、中世の掘立柱建物12棟と溝状遺構1条を検出した。溝状遺構はおそらく複数の建物全体を方形に囲むものと考えられ、区画内で掘立柱建物1棟を検出した。全ての建物はその主軸がほぼ南北または東西方向を向き、主軸の振れは最大で20°の幅のなかにおさまっており、強い規制のもとに建てられている。また、直接の切り合い関係はないが建物の建て替えは3棟の建物で2回、1棟の建物で4回行われて

いる。各遺構の時期は出土遺物が極端に少なく明確にし難いが、掘立柱建物と溝状遺構の覆土が近似していることから見て、時期的にバラつくものではなくほぼ中世のなかにおさまるものであろう。出土した遺物のうち、土師質土器の壺、皿、鍋などはその特徴や法量から見て16世紀前半代を中心とする時期におさまるものと考えられるが、1次調査（福岡県教育委員会による）でピットから鎌倉期の青磁碗などが出土したと報告されており、当遺跡は鎌倉～室町時代にかけて営まれた集落の一部であると考えられる。また、古墳時代から奈良時代にかけての土器が数点出土しているが、この時期の遺構は調査区の東隣の4次調査の際に検出されており、ここからの流れ込みであろう。

女原遺跡

調査面積に比して検出した遺構は少ない。検出遺構は以下の通りである。

- ①古墳時代 : 穴住居跡4、土坑11、溝状遺構6、掘立柱建物 $3+\alpha$
- ②古代末～中世初頭 : 掘立柱建物
- ③中世以降 : 水田跡13筆

①は穴住居跡SK-02、35、60、土坑SK-36、37、40、51、溝SD-30～34等で構成される5世紀前半代の時期と、土坑SK-56、63や包含層出土遺物が示す6世紀～7世紀前半代の時期のものがある。前者の遺構からは良好なセット関係を示す土器が出土しており、その特徴を見ると、SK-40、SD-30～34出土土器がSC-02に比べて甕の口縁部に布留式の特徴を残すなどより古い様相を有しているもののはぼ同時期とみてよい。当該期の土器が多量に出土し整理されている遺跡には、同じ糸島平野では御床松原遺跡^{注1}、福岡平野では松木遺跡^{注2}、今光遺跡^{注3}があり、それぞれの編年に対比すれば、御床V期、松木・今光IV～V期に位置づけできよう。

①・②期の掘立柱建物は古墳時代のものと古代末～中世初頭のものが存在するが、出土遺物のないものもあって、明確な時期決定が困難である。ただし、溝状の土坑（雨落ち溝？）を伴うSB-03は古墳時代のものとしてよいであろう。また、SB-42、57などは土坑SK-40とはほぼ方向を同じくして建っていることから見て土坑と同時期（5世紀前半代）の可能性があろう。

③水田跡は②期の廃絶以後と考えられる。水田跡そのものは厚い砂に覆われていたため残りが良かったが、水路・給排水施設は検出できなかった。また埋没時期についても不明である。また、中～近世の足跡が多数検出され、中世以降の当地点が現代まで継続して営まれた水田であったことを物語る。

検出した遺構の中で注意を引いたものに細い溝を伴う住居跡がある。SC-02では、溝が住居跡床面の最も低い部分から壁を破って掘り出され、SC-60では住居跡壁溝がそのまま屋外へ延びている。このような溝は計5条が検出され、地形の傾斜に沿って北へ下りながら集まっ

て1条となっている。溝の上流は分岐して更に調査区の南側に及んでおり、区外にも住居跡の存在が予想される。これらの溝は覆土が砂質であることと地形の低い方へ向かって合流してひとつになることから見て住居跡内部あるいはその周辺の排水を意図したものと考えられる。同様な溝を設けた住居跡は、卑近な例では同じバイパス路線内で調査された福岡市西区飯氏遺跡群I区にある。飯氏遺跡群I区は女原遺跡同様谷部の扇状地上に立地し、古墳時代前期の堅穴住居跡とそれを巡る小溝が検出されている。また福岡県内では鞍手郡鞍手町の向山遺跡や咲花^{註4}遺跡（古墳時代後期）、時代はやや異なるが、柏屋郡柏屋町古大間池遺跡（弥生時代中期前半）、^{註5}小郡横隈山遺跡第2地点（弥生時代後期）等が、また県外では岡山県や近畿地方でも類例が知られており、いずれも住居跡壁溝や床面から溝を屋外に掘り出したり、住居跡周辺に溝を巡らせるなどして居住地周辺の排水を図ったものと考えられる。

出土した遺物には、朝鮮半島系の陶質土器・軟質土器と呼ばれる土器が多く含まれており注目される。SC-02の須恵質の壺（28）は頸部の文様を欠くものの、甘木市池の上墳墓群出土のものに形態的に類似している。口縁部がやや長いが、口縁端部の形態やタタキが見られない調整手法等は池の上遺跡の中で古相とされたD-7号墓の壺に近い。また、包含層から出土した129の須恵質の蓋は、つまみの部分を失っているものの、天井部に櫛状工具による列点文を施し形態的に極めて特異であり、同様の例が韓国金海府院洞遺跡A地点IV層にある。さらに、SK-40出土の68、71~72、74などの繩席文あるいは平行タタキの壺、69、73などの高杯、SD-33出土126の小形壺や攪乱から出土した130の壺などの須恵質の上器も陶質土器と見てよいものであろう。軟質土器とした土器のうち器形がはっきりしているものは全て平底の鉢であり、63を除いて全て外面に格子タタキが施されており、土師器と区別し得た。しかし68のようにナデ調整で仕上げたものは土師器との区別がつかず、土師器の中に含まれている可能性がある。また、SK-40出土の土師質の甕（46）は形態的に布留式の特徴を示すものの、外面には平行タタキが施されるなど、極めて特異な土器である。

以上不十分なまとめを行った。胎土分析等を含め、今後の検討課題としたい。

註1. 井上裕弘編『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 1983

註2. 清田康夫・佐々木謙彦編『松木遺跡I』那珂川町文化財調査報告書第11集 1984

註3. 佐々木隆彦編『今光遺跡・地余遺跡』東急不動産株式会社 1980

註4. 中間研志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XX』福岡県教育委員会 1977

註5. 上野精志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XX』福岡県教育委員会 1978

註6. 佐々木隆彦『古大間池遺跡』1977

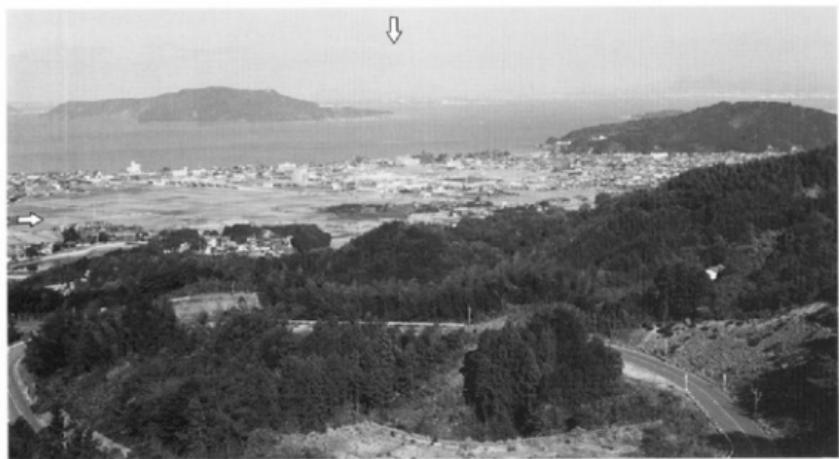
註7. 浜田信也『横隈山遺跡』小郡市教育委員会 1974

註8. 岡山県史第18巻 考古資料 1986

註9. 橋口達也編『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 1979

註10. 『金海府院洞遺跡』東亞大学校博物館 1981

P L A T E S



1. 大塚遺跡遠景(南西から)



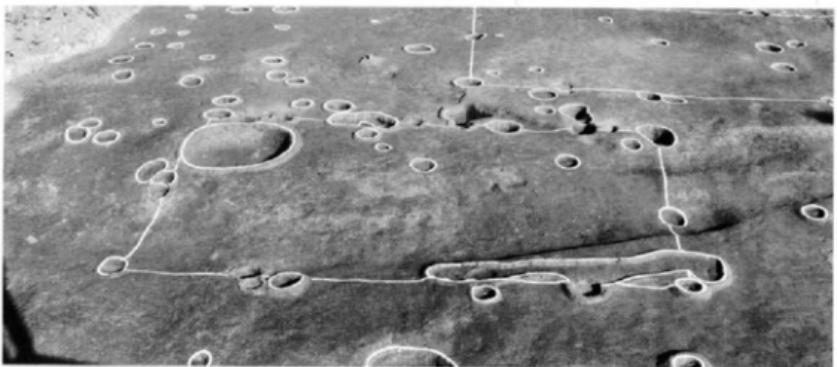
2. 大塚遺跡調査区全景(西から)



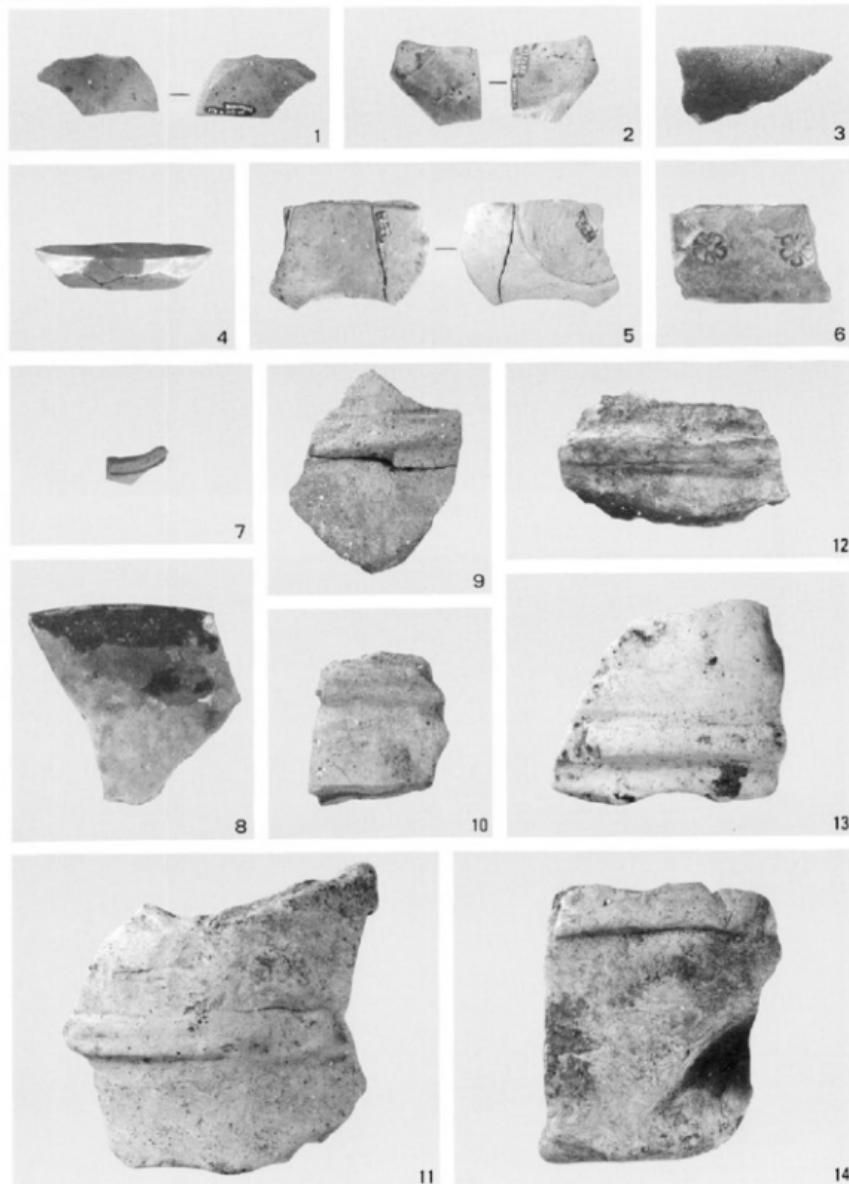
1. 溝状遺構(SC-01) (西から)



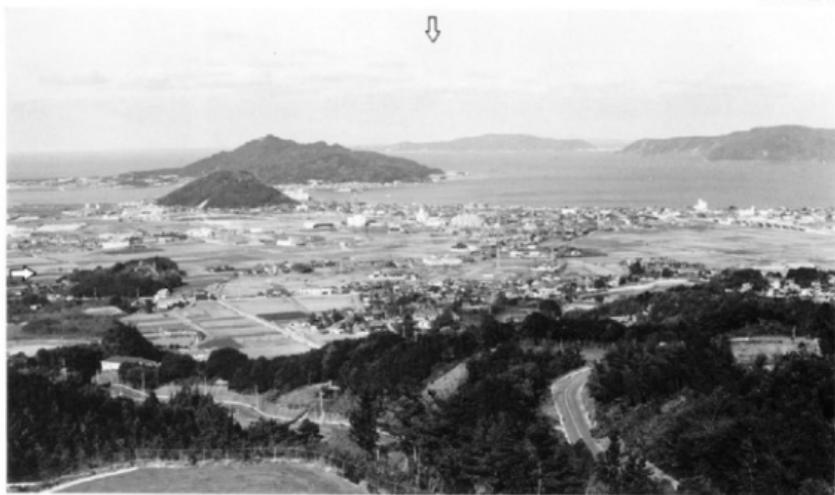
2. SB-04, 05(西から)



3. SB-05(西から)



大塚遺跡出土遺物(1/3)



1. 女原遺跡遠景(南から)



2. 女原遺跡調査区全景(西から)



1. 女原遺跡 A 区全景(南から)



2. 女原遺跡 B 区全景(南から)



1. 女原遺跡C区全景(北から)



2. 女原遺跡D・E区全景(東から)



1. SC-02(東から)



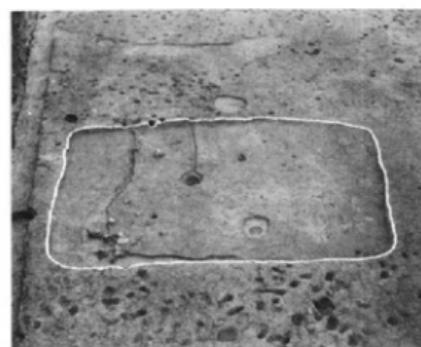
2. SC-35周辺(東から)



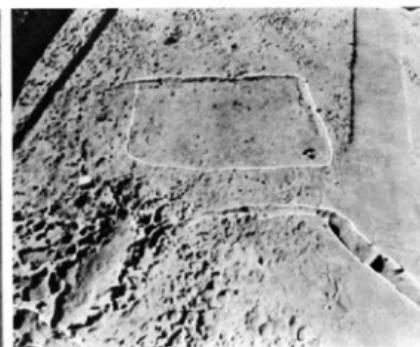
3. SC-35遺物出土状況



4. SC-35(東から)



5. SC-52(東から)



6. SC-60(東から)



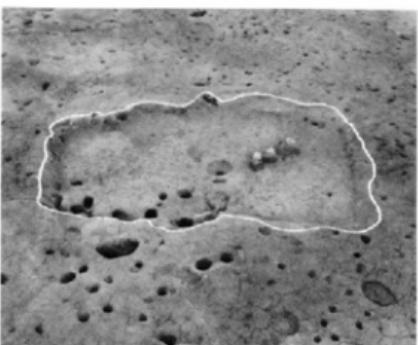
1. SK-11(南西から)



2. SK-36(東から)



3. SK-40(西から)



4. SK-51(南東から)



5. SK-53(北から)



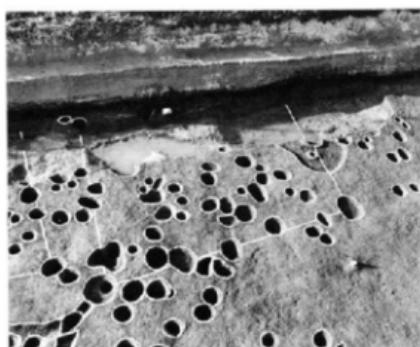
6. SK-56(東から)



1. SB-03(東から)



2. SB-16(東から)



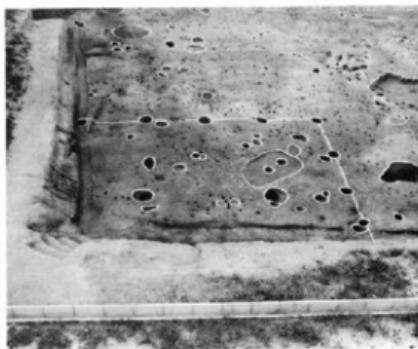
3. SB-17(東から)



4. SB-18.19(南東から)



5. SB-42(西から)



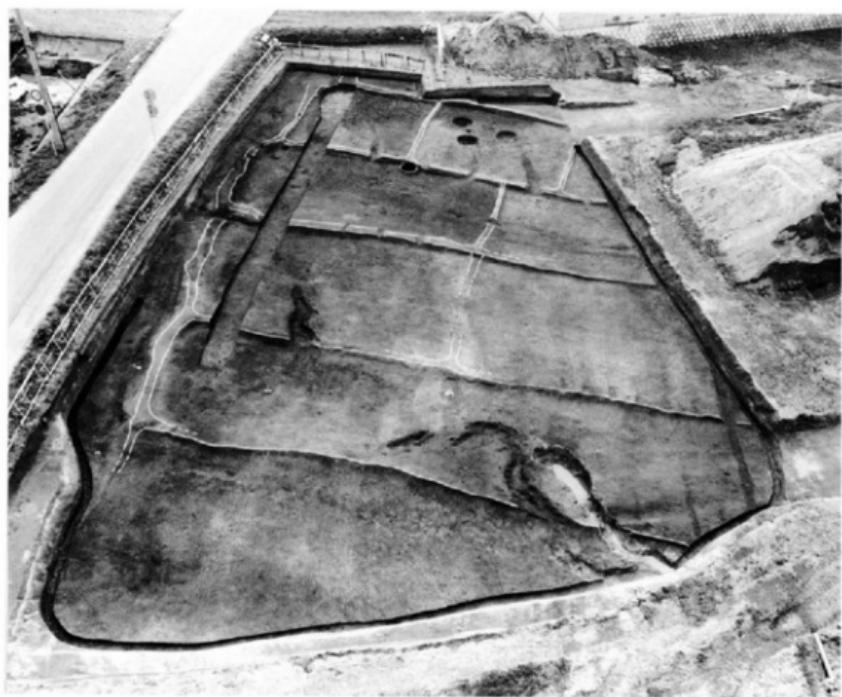
6. SB-57(東から)



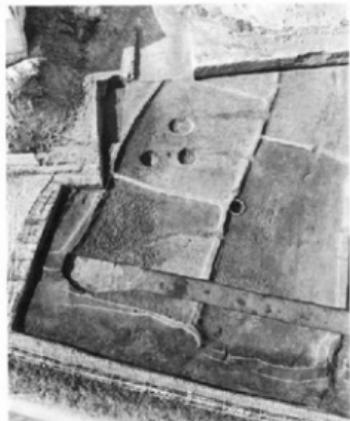
1. SB-58(西から)



2. SB-65(南から)



3. B区水田遺構検出状況(北から)



1. B区水田造構北端部(東から)



2. B区西壁土層(東から)



3. D区水田造構検出状況(北から)



4. D区南西部足跡群(東から)



5. C区足跡検出状況(牛蹄)



6. C区足跡検出状況(人)



7



5



6



15



16



12



13



17



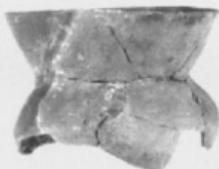
18



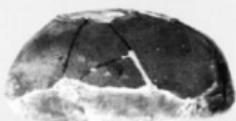
19



20



22



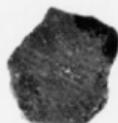
21



25



28



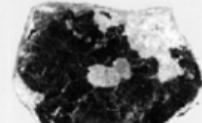
27



29



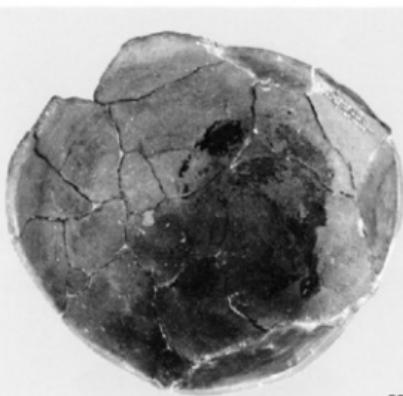
30



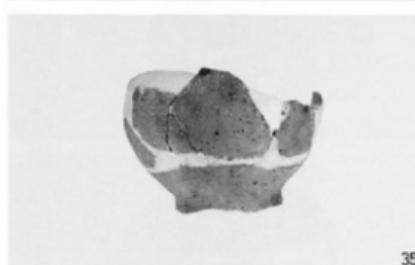
33



31



32



35



38



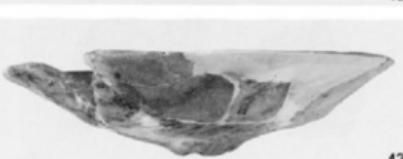
37



39



40



42



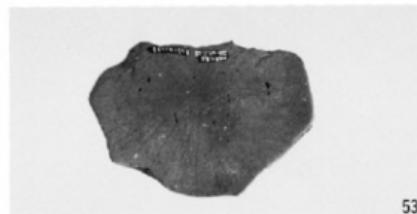
46



48



51



53



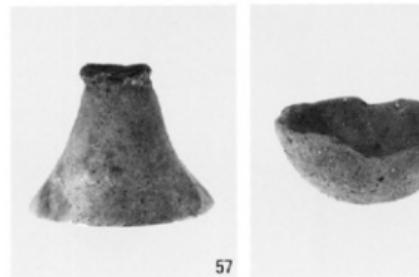
52



56



59



57



60



62



63



68



64



76



73



77



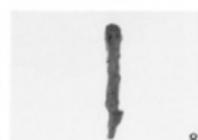
79



75



80



81



82



85



86



87



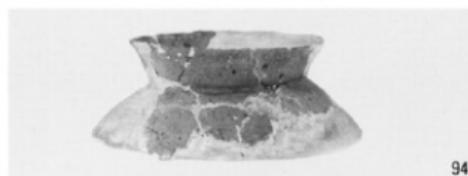
88



89



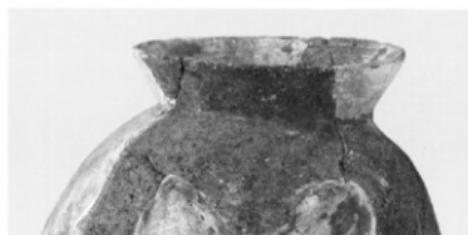
93



94



95



98



101



99



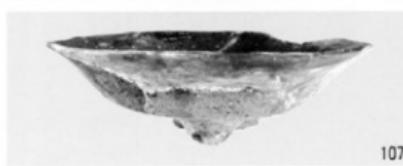
100



102

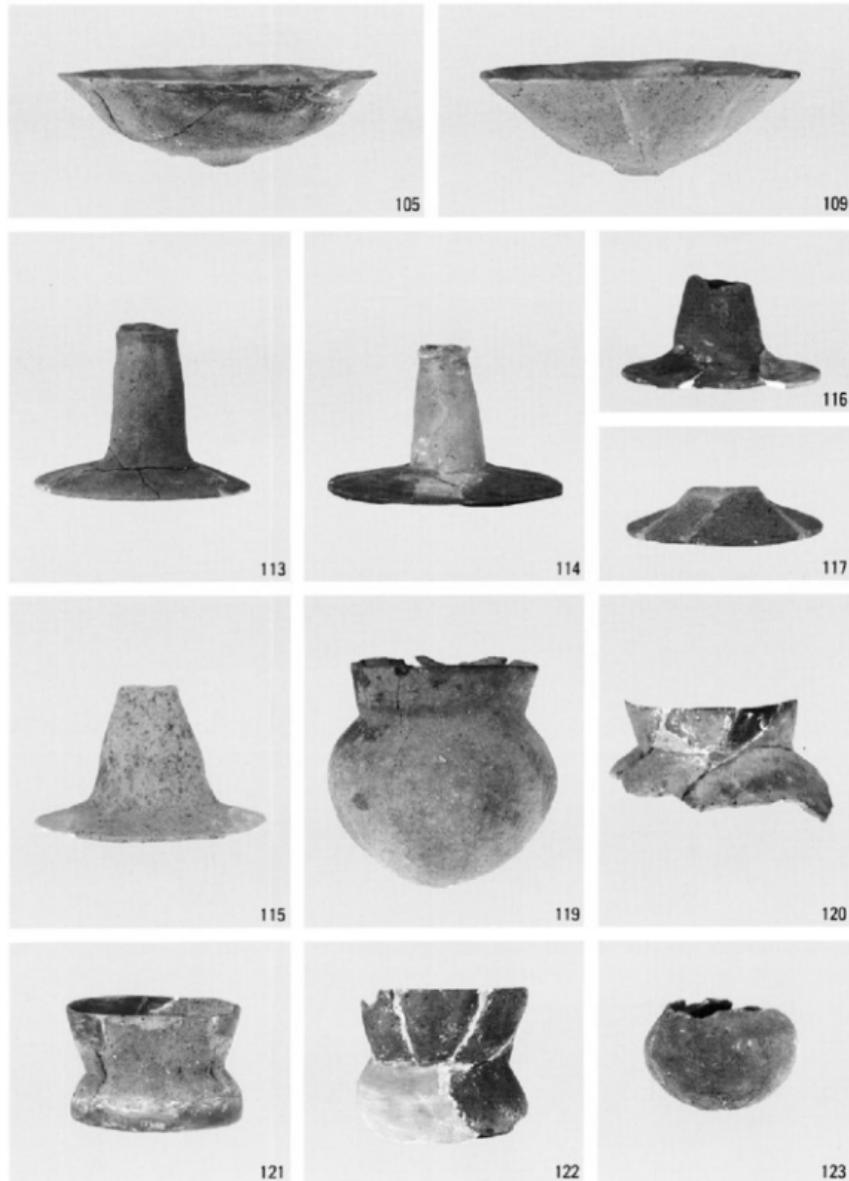


103



107

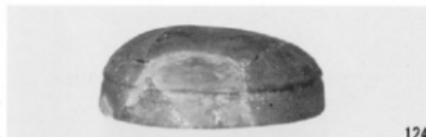
女原遺跡出土遺物・VII(1~3)



女原遺跡出土遺物・VII(1/3)



110



124



125



126



129



130



131



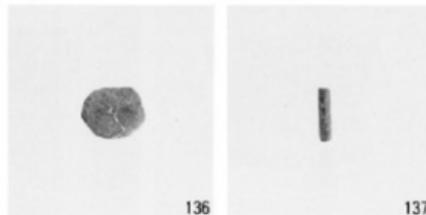
133



132



134



136

137

国道202号線今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告・I

大塚遺跡・女原遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書224集

1990年3月

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目4番4号

